埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第5集

増善寺遺跡

1982

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第5集

増善寺遺跡

1982

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県の道路網の整備は、県土の秩序ある発展をはかるため、国道、県道の新設、改良が、地域開発を整合させながら計画されております。

今度、県道坂本・寄居線の整備の一環として歩道建設が計画されました。その結果、これにかかる埋蔵文化財の取扱いについては、やむなく記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は、県道路維持課の委託を受け、当事業団がこれに当たり、その結果重要な成果を納めることができました。

ここに埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第5集として記録いたしましたので、本書並びに資料を学術研究および学校教育に大いに役立てていただきたいと思います。

発掘から報告書の刊行に至るまで、終始御指導御協力を寄せられた関係各位に深く感謝申し上げると共に、発掘に携わられた方々に対し厚く御礼申し上げます。

昭和 57 年 3 月

財団法人
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　長　井　五　郎

例　　言

1. 本書は県道坂本・寄居線歩道建設にかかる、寄居町増善寺遺跡の発掘調査報告書である。（昭和55年、委保第５の2046号）
2. 調査は埼玉県教育委員会が調整し、埼玉県の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、昭和55年６月４日から７月14日に亘って実施し、整理、報告書作成作業は昭和56年度に実施した。

   なお、調査の組織は２ページに示したとおりである。
3. 出土品の整理および図の作成は、宮崎朝雄、島村範久、細田勝が主にあたった。
4. 発掘調査における写真は、宮崎、島村、遺物写真は宮崎、細田が撮影した。
5. 本書の執筆は、各文末記載のとおりである。
6. 石器の石質鑑定は、埼玉県自然史博物館本間岳史氏にお願いした。
7. 本書の編集は、調査研究部第４課職員があたり、横川好富が監修した。
8. 本書を作成するにあたり下記の方々から御教示、御助力を得た。

   梅沢太久夫（埼玉県立歴史資料館）

   高木　義和（寄居町教育委員会）

目　　次

序
例　　言
Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
1　発掘調査に至る経過 …… 1
2　発掘調査の経過 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 4
Ⅲ　遺跡の概観 …… 7
Ⅳ　遺　　構 …… 10
1　住居跡 …… 10
2　土　　壙 …… 10
3　遺物包含層 …… 11
Ⅴ　遺　　物 …… 14
1　土　　器 …… 14
2　土製品 …… 40
3　石　　器 …… 42
Ⅵ　結　　語 …… 55
1　遺物包含層について …… 55
2　土器について …… 57
3　石器について …… 65

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……4
第２図　遺跡地形図(1)……5
第３図　遺跡地形図(2)……7
第４図　全体測量図……8
第５図　遺構実測図……11
第６図　遺物包含層実測図……13
第７図　１号住居跡、１号土壙
出土土器拓影図…15
第８図　出土土器実測図(1)……17
第９図　出土土器実測図(2)……18
第10図　出土土器実測図(3)……19
第11図　出土土器実測図(4)……20
第12図　出土土器実測図(5)……21
第13図　出土土器拓影図(1)……23
第14図　出土土器拓影図(2)……25
第15図　出土土器拓影図(3)……26
第16図　出土土器拓影図(4)……27
第17図　出土土器拓影図(5)……28
第18図　出土土器拓影図(6)……31
第19図　出土土器拓影図(7)……32
第20図　出土土器拓影図(8)……33
第21図　出土土器拓影図(9)……35
第22図　出土土器拓影図(10)……36
第23図　出土土器拓影図(11)……37
第24図　出土土器拓影図(12)……39
第25図　出土土器拓影図(13)……41
第26図　出土石器実測図(1)……43
第27図　出土石器実測図(2)……44
第28図　出土石器実測図(3)……45
第29図　出土石器実測図(4)……47
第30図　出土石器実測図(5)……48
第31図　出土石器実測図(6)……49
第32図　出土石器実測図(7)……50
第33図　出土石器実測図(8)……51
第34図　土器系統図　(1)……58
第35図　土器系統図　(2)……59
第36図　土器系統図　(3)……61

図 版 目 次

図版１　遺跡近景、第１号住居跡
図版２　第１号土壙、２号土壙、遺物包含層
図版３　実測土器(1)
図版４　実測土器(2)
図版５　実測土器(3)
図版６　土器（第７図）
図版７　土器（第13図）
図版８　土器（第14図）
図版９　土器（第15図）
図版10　土器（第16図）
図版11　土器（第17図）
図版12　土器（第18図）
図版13　土器（第19図）
図版14　土器（第20図）
図版15　土器（第21図）
図版16　土器（第22図）
図版17　土器（第23図）
図版18　土器（第24図）
図版19　土器（第25図）
図版20　石器（第26図）
図版21　石器（第28図）
図版22　石器（第29図）
図版23　石器（第30図）
図版24　石器（第27図）
図版25　石器（第31図）
図版26　石器（第31・32図）
図版27　石器（第33図）
図版28　石器（第33図）

Ⅰ　発掘調査の概要

1　発掘調査に至る経過

県道坂本寄居線では、歩道整備を進めているが、寄居町立原地区においても昭和54年度に工事が計画された。

教育局文化財保護課では、国・公団・公社・県の事業と埋蔵文化財との調整を図るため、毎年、「文化財と公共事業の調整会議」を開催しているが、この席で上記計画を県土木部道路維持課から提示された。文化財保護課では計画図面と遺跡地図を照合した結果、寄居町№75遺跡がこれに該当することが判明した。しかし、歩道工事であるため幅が狭いので、道路維持課、熊谷土木事務所、寄居町教育委員会、文化財保護課で協議し、遺跡の規模、保存状態を明確にするために町教育委員会で試掘を実施することになった。この結果、縄文時代中期の集落跡が確認され約300㎡が調査可能であることがわかった。既存の道路に伴なう歩道工事であるため計画変更は不可能ということであるので、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになり、改めて発掘調査の協議に入った。

昭和54年12月11日付け道維第1329号をもって道路維持課長から文化財保護課長あてに「交通安全施設歩道整備工事に伴う文化財包蔵地の取扱いについて」という協議書が提出された。文化財保護課では調査機関等について打合せをしてきたが、昭和55年度から課の組織が変わり、これまで発掘調査を実施していた文化財第３係がなくなり、新たに増大する公共事業に対処するために、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が設立された。これにより今回の調査も事業団が実施することになったのである。

事業団を含め数度の協議を重ねた後、先の協議書を受けて、昭和55年５月１日付け教文第314号をもって道路維持課長あて回答した。その内容は１調査期間、２調査機関、３調査範囲、４調査経費についてであり、この他に工事計画に変更が生じた場合及び調査対象区域外で文化財が発見された場合は別途協議するようにということであった。また、埼玉県は事業団と事業委託契約を締結し、ここに発掘調査の準備は整ったのである。

事業団からは埋蔵文化財発掘調査届が、埼玉県からは埋蔵文化財発掘通知が文化庁へ提出され、昭和55年６月２日から発掘調査は開始された。

文化庁からは昭和55年７月10日付け委保第５の2046号をもって調査届を受理した旨の通知があった。

（井上尚明）

発掘調査の組織

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理事長	関根秋夫(前)
			長井五郎
		副理事長	本郷春治(前)
			沼尻和也
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	伊藤悦光
			関野栄一
			福田　浩
			本庄朗人
調査及び整理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横川好富
		調査研究部第四課長	増田逸朗
			宮崎朝雄
			島村範久
			細田　勝
協力者	寄居町教育委員会、地元区長及び地元区民		

2　発掘調査の経過—日誌抄—

6月4日（晴）調査区をユンボーにより耕作土約30cmを削平し排土する。耕作土は30～40cmであるが、西側では10cmと浅く直ぐにローム層に達する。桑による攪乱が著しい。

6月10日（曇）今日より発掘作業開始。東側よりジョレンにより遺構確認を行なう。土壙と遺物包含層を確認する。

6月11日（晴）遺物包含層の調査。最初に北側50cm幅の試掘を入れ層位を調べる。耕作土40cmの下に、黒褐色土の包含層が40cm程堆積している。西へ行くにつれて深くなり、小さな谷状を呈するようである。縄文時代中期の土器・石器が多量に出土した。

6月12日（晴）包含層の調査。大形破片を残しながら遺物の出土状況を確かめる。土器、石器とともに河原石も混入している。

6月13日（晴）包含層の東側を精査し、住居跡1軒、土壙2基を検出する。いずれも部分的で、道路下に延びている。

6月16日（晴）住居跡と土壙を掘る。住居跡は壁が耕作により壊され、周溝によってプランを把えた。柱穴は2個検出。2号土壙より大形破片1個体が出土する。

6月17日（曇）包含層の調査、復元のできそうな土器が数個体検出される。石器も多い。

6月18日（曇時々晴）包含層の調査。おおよその遺物を出し終える。大形破片は30個体以上を数える。遺物出土範囲は約15m幅になった。調査区西端より井戸状の土壙1基を検出する。

6月19日（晴）包含層の遺物出土状態及び住居跡、土壙の写真撮影。

6月20日（雨時々曇）土壙の土層断面図を実測する。

6月23日（曇時々晴）包含層の遺物出土状態の実測を開始する。土器は押しつぶれた状態が多い。

6月24日（晴）調査区に座標北を基本にして10m区画の杭を打つ。悪天候の為に基準測量が遅れていたものである。

6月25日（晴）包含層の遺物を取り上げる。住居跡、土壙の測量を行なう。

6月26日（雨）図面及び遺物の整理

6月27日（晴）包含層下部を掘り下げる。深い所ではローム面まで約80cm黒色土、黄褐色土が堆積している。遺物は極めて少ない。

6月30日（曇一時晴）包含層下部を掘りローム面を確認する。小さな谷が入っている。

7月1日（曇時々晴）包含層下部の谷地形を測量する。ローム面は粘質を帯びている。

7月2日（雨）遺物整理

7月3日（晴）航空写真撮影を行なう。包含層北側土層断面図を測量する。

7月4日（晴後曇）遺跡全体の測量と写真撮影

7月7日（晴一時雨）遺跡周辺の地形測量を行なう。

7月10日（曇一時晴）地形測量の続きを行ない終了する。

7月11日（雨）図面類と遺物の整理

7月14日（晴）埋め戻し作業。調査完了する。　（宮崎朝雄）

Ⅱ 立地と環境

増善寺遺跡は、埼玉県大里郡寄居町立原字庚申塚288—1付近に所在する。秩父鉄道、東武東上線、国鉄八高線の3線が交叉する寄居駅より南西方向へ直線にして約1.6㎞の地点である。寄居町は秩父山地を源泉とする荒川が景勝地長瀞を通過した後、山地から平野部へ流れ出た谷口に作られた谷口集落であり、扇状地の扇頂部に当たっている。背後には秩父の山々を控え、前面には関東平野が広がっている。

町の中心街を南に行き、正喜橋により荒川を渡ると右手に中世城館跡として著名な鉢形城跡が存在する。国道254号線から鉢形城跡の裏側を通り東秩父村方面へ向かう道路が県道坂本・寄居線であり、増善寺遺跡は1㎞程入った所である。今回の調査はこの道路の歩道建設工事に伴なうものである。周辺には、折原小学校や遺跡名となった増善寺がある。野菜畑や牧草地も見られるが桑畑が大部分を占めている。

遺跡は、荒川右岸の標高130～131㎡を測る台地上に位置する。この付近における荒川の両岸は標高90～100㎡の河岸段丘があり、その上に120～130㎡の台地が広がり、奥には200㎡を越える丘陵や山地が続いている。台地は荒川から入り込む小支谷によって開析され各々が独立した地形を取り、緩やかな傾斜を持って河岸段丘へ延びている。遺跡はこのような台地上に密集して認められ

第1図 遺跡位置図

1. 増善寺遺跡 2. 下小路遺跡 3. 南大塚遺跡 4. 東国寺遺跡 5. 平倉遺跡 6. 東遺跡 7. 甘粕原遺跡 8. ゴシン遺跡 9. 露梨子遺跡 10. 上郷西遺跡 11. 末野窯址 12. 小前田遺跡群

第２図　遺跡地形図(1)　遺跡番号は埼玉県遺跡地名表による。

る。増善寺遺跡も西側を小支谷によって分断され、北側に入り込む小さな谷を望む平坦地から緩傾斜に至る台地上に営まれている。

寄居町の遺跡は、従来、左岸の丘陵地帯にある末野窯址群（註1）、花園村と続く河岸段丘上の小前田古墳群、右岸の鉢形城跡が知られていたが、近年になって、道路建設や宅地造成に伴なう発掘調査が急増し、縄文時代の遺跡が多数検出された。第1図は、縄文時代の遺跡分布と発掘調査が行なわれた主な遺跡を示したものである。

増善寺遺跡の近辺では、東国寺遺跡（註2）、南大塚遺跡（註3）、下小路遺跡（註4）、平倉遺跡（註5）において調査が行なわれている。東国寺遺跡では加曽利E期の住居跡4軒と土壙2基が検出された。増善寺遺跡とは小さな谷を挟む南側の台地に位置する。南大塚遺跡、下小路遺跡では黒浜期の住居跡と土壙が検出されている。中期の遺構は存在しないようである。増善寺遺跡、東国寺遺跡の一帯を中期の遺跡群と考える事ができよう。又、増善寺遺跡周辺から平坦な台地が多くなり、下流へ行くに従って河岸段丘や台地が発達し、大規模な遺跡も集中して存在する。鉢形城跡東側の台地には特に密集している。発掘調査が行なわれた遺跡としては、東遺跡（註6）甘粕原遺跡（註7）ゴシン遺跡（註8）、露梨子遺跡（註9）、上郷西遺跡（註10）等がある。

甘粕原遺跡、ゴシン遺跡では前期黒浜期、諸磯a、b期の住居跡と土壙が検出され、上郷西遺跡では諸磯a～c期の住居跡4軒と土壙群が確認されている。中期になると、甘粕原遺跡において2度の調査により勝坂～加曽利EⅠ期の住居跡5軒、ゴシン遺跡において加曽利EⅡ～Ⅲ期の住居跡2軒、露梨子遺跡において加曽利EⅣ期の柄鏡形住居跡1軒が検出された。更に後期では、東遺跡、上郷西遺跡において、称名寺期、堀之内Ⅱ期の敷石住居跡、柄鏡形住居跡が確認されている。各遺跡とも部分的な調査の為に集落としての全容は把握できないが、この付近における前期中葉から後期中葉に至るまで連続的に集落の存在を考えていく事ができよう。

同時期の集落は、最近の調査により荒川左岸の河岸段丘上においても多数の存在が明らかになってきている。寄居町と花園村にかかる小前田地区、黒田地区では、古墳群の下から前期諸磯期を中心として前期～後期の住居跡、土壙が多数検出されている。（註11）このように、荒川両岸の河岸段丘の台地上には縄文時代前期～後期の遺跡が密集して存在し、今後、集落の把握、遺跡群としての解明が期待される。増善寺遺跡は、遺跡群の中では最も奥部に位置した中期の集落である。

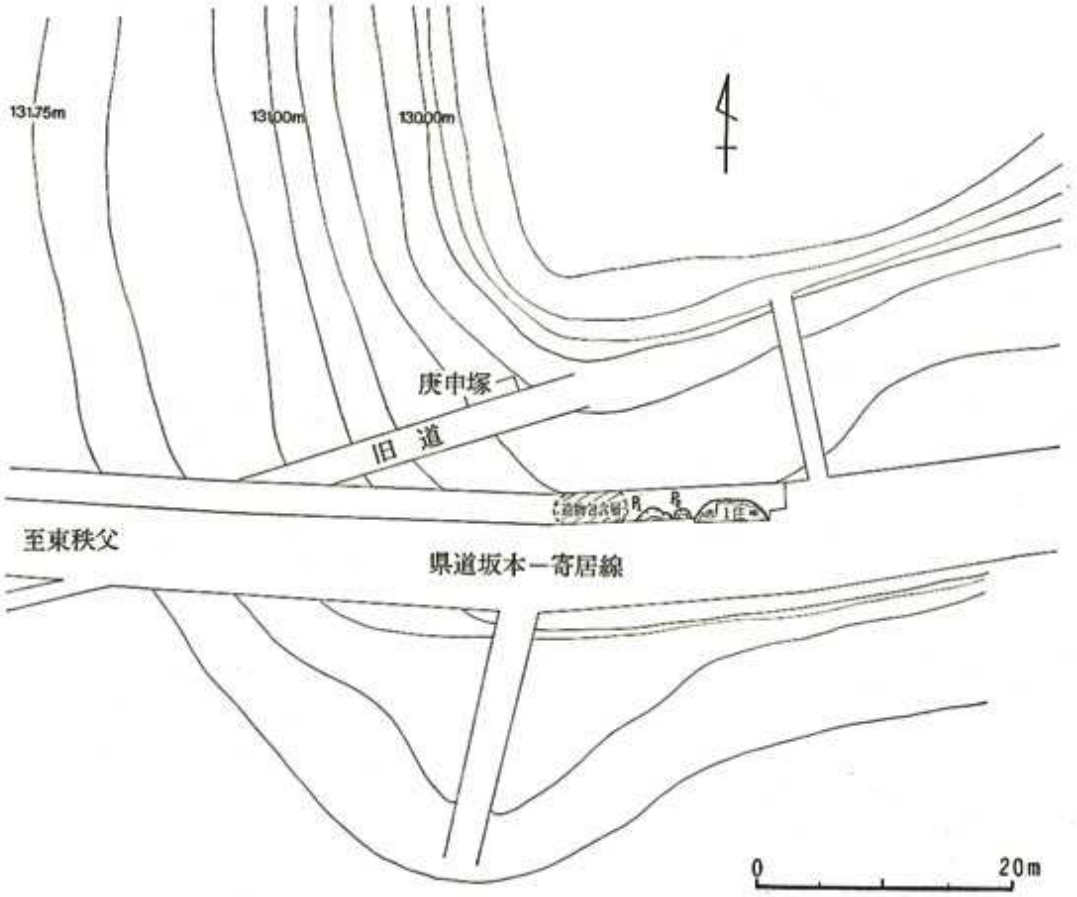
註1　野部徳秋、高木義和、1977年「末野窯址（花園支群）発掘調査」寄居町文化財報告第2集
註2　1981年町調査会により発掘調査、高木義和氏御教示
註3　埼玉県県史編さん室、1981年「新編埼玉県史、資料編1、原始旧石器・縄文」
註4　註2に同じ
註5　註2に同じ
註6　梅沢太久夫、1973年「大里郡寄居町東遺跡発掘調査報告」埼玉考古第11号
註7　中島利治、梅沢太久夫、1970年「大里郡寄居町甘粕原遺跡の調査」第3回遺跡発掘調査報告会発表要旨及び註8に同じ
註8　並木隆他、1978年「甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡」埼玉県遺跡調査報告書第35集
註9　註8に同じ
註10　註3に同じ
註11　代表的な遺跡としては、北塚屋遺跡a、上南原遺跡b、台耕地遺跡cがある。
a　市川修　1980年「北塚屋遺跡の調査」第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨
b　註3に同じ
c　鈴木敏昭、中島宏　1979年「台耕地遺跡の調査」第12回遺跡発掘調査報告会発表要旨　（宮崎朝雄）

Ⅲ 遺跡の概観

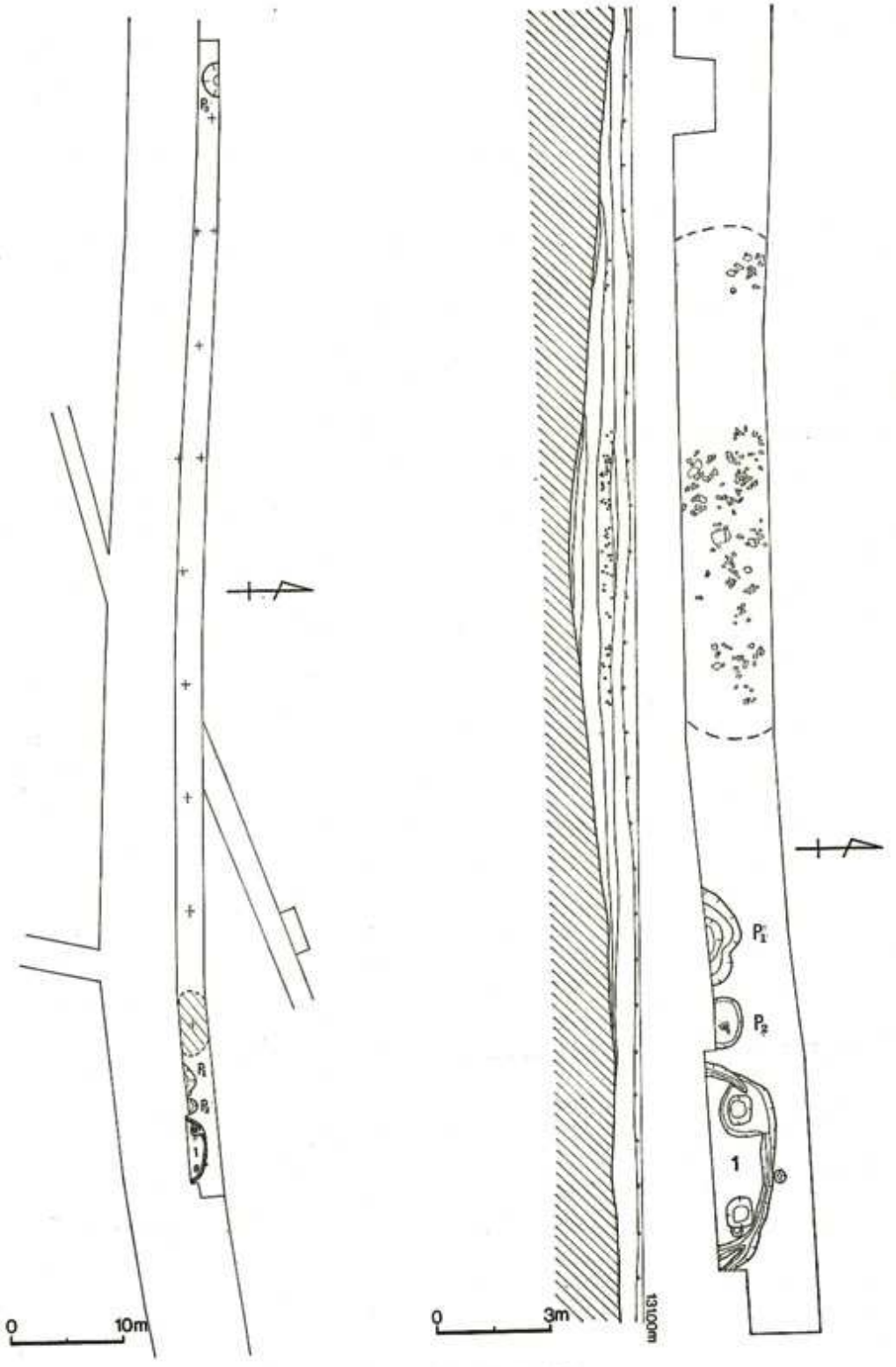
増善寺遺跡は、分布調査によりおおよそ東西150 m、南北200 mの範囲に把握されている。地形的には、西側は深い支谷、南側は浅い小支谷により分断されているが、北側、東側は緩やかな傾斜地が延び境界が明瞭ではない。遺物の分布状況も、密な所は見当たらず全体的に散在している。

今回の調査は、県道坂本、寄居線に付設する歩道建設工事に伴なうもので、幅2 m、長さ150 mが対象となった。ほぼ、増善寺遺跡の中央部を東西に横断するトレンチを設定した形になった。排土の関係より最初にユンボーにより約30cmの耕作土を削平した後、遺構確認調査を東より西へ順次行なった。その結果、調査区東端において縄文時代中期後半加曽利E期の住居跡1軒、土壙2基、遺物包含層1ヶ所、西端において時期不詳の土壙1基が検出された。

東端の住居跡、土壙は遺構の北側部分だけであり、南側の道路内に続いている。約40cmの耕作土がローム面にまで達しており遺物包含層は部分的にしか残っていない。住居跡は、壁が耕作の為に壊され、周溝、柱穴、床面が検出し得ただけである。床面上には約5 cmの薄い覆土が残存していた。遺物は周溝と柱穴より土器破片が少量出土している。土壙は円形又は楕円形を呈すると思われ



第3図 遺 跡 地 形 図 (2)



第4図 全 体 測 量 図

るもので、土壙1より少量の土器破片、土壙2より大形破片1個体が出土している。住居跡、土壙の西側は、ローム面が深くなり小さな浅い谷が確認され、そこに遺物包含層が検出された。遺物包含層は、谷が約70㎝埋まった後、住居跡や土壙とほぼ同レベルに形成され、40～50㎝の黒色土層として堆積している遺物は約15ｍの範囲に及び、完形に近い土器や大形破片を含み、土器、石器が多量に出土した。土器は、前期諸磯ｂ式を少量含むが、中期勝坂式、阿玉台式、加曽利ＥⅠ～Ⅳ式が主体である。復元可能な土器は勝坂式1点を除き、大部分が加曽利ＥⅠ式後半に比定される。周囲からの流れ込みとともに廃棄が考えられ土器捨て場として把握できよう。その範囲は、谷に沿って南北に幾分広がるものと考えられる。

西端の土壙は、すり鉢状を呈し、ロームブロックを含む黒色土が堆積していた。土壙内には河原石とともに縄文時代中期の土器や石器も出土しているが、形態や覆土より近世以降の井戸状遺構と考えている。

当初は、遺物包含層の西側にも中期の遺構を予想したが、遺構は全く検出されず、遺物も極く少量の土器破片が出土しただけであった。遺跡は、西端で標高131.60ｍ、東端で131.00ｍと若干西側が高くなっている。西側における遺構存在の有無は今後の調査を待たねばならないが、今回の調査結果によれば、遺物包含層の谷を臨むようにして東側の平坦地から傾斜地にかけて集落が広がるものと予想される。

なお、グリッドは座標北を基本にして10ｍ区画に設定している　　（宮崎朝雄）

Ⅳ 遺　　構

1 住 居 跡

第1号住居跡（第5図）

調査区の東端で住居跡が1軒検出された。西側に2号土壙、1号土壙が並んでいる。大部分が調査区外になり、住居跡の北側約⅓を確認しただけである。壁は耕作によって壊され、周溝、柱穴2個と床面が部分的に検出された。当初は周溝の確認が困難で掘立遺構とも考えたが精査によって周溝が巡る事が確認できた。プランはおおよそ一辺5.5m の隅丸方形を呈すると思われる。又、東側で周溝が2重に巡っており、住居を拡張したものと考えられる。

周溝は幅20～30cm、深さ30cm前後のしっかりしたもので、ローム混じりの暗褐色土が堆積している。柱穴は2個とも一辺約70cmの方形を呈し、床面からの深さは約50cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり状態は良好である。柱穴の覆土は、土器片、石器片、炭化物を少量含むローム粒子混じりの暗褐色土である。床面は南側道路近くにおいて部分的に検出され、床面上には約5cmの薄い覆土が残存していた。北側の周溝に接する小ピットは住居跡に伴なうかは不明である。

遺物は、周溝と柱穴より勝坂式後半と加曽利E Ⅰ式の土器破片が出土している。いずれも小破片であり、流れ込みによると考えられる。住居の形態や出土土器より、加曽利E Ⅰ期の住居跡と思われる。

2 土　　壙

第1号土壙（第5図）

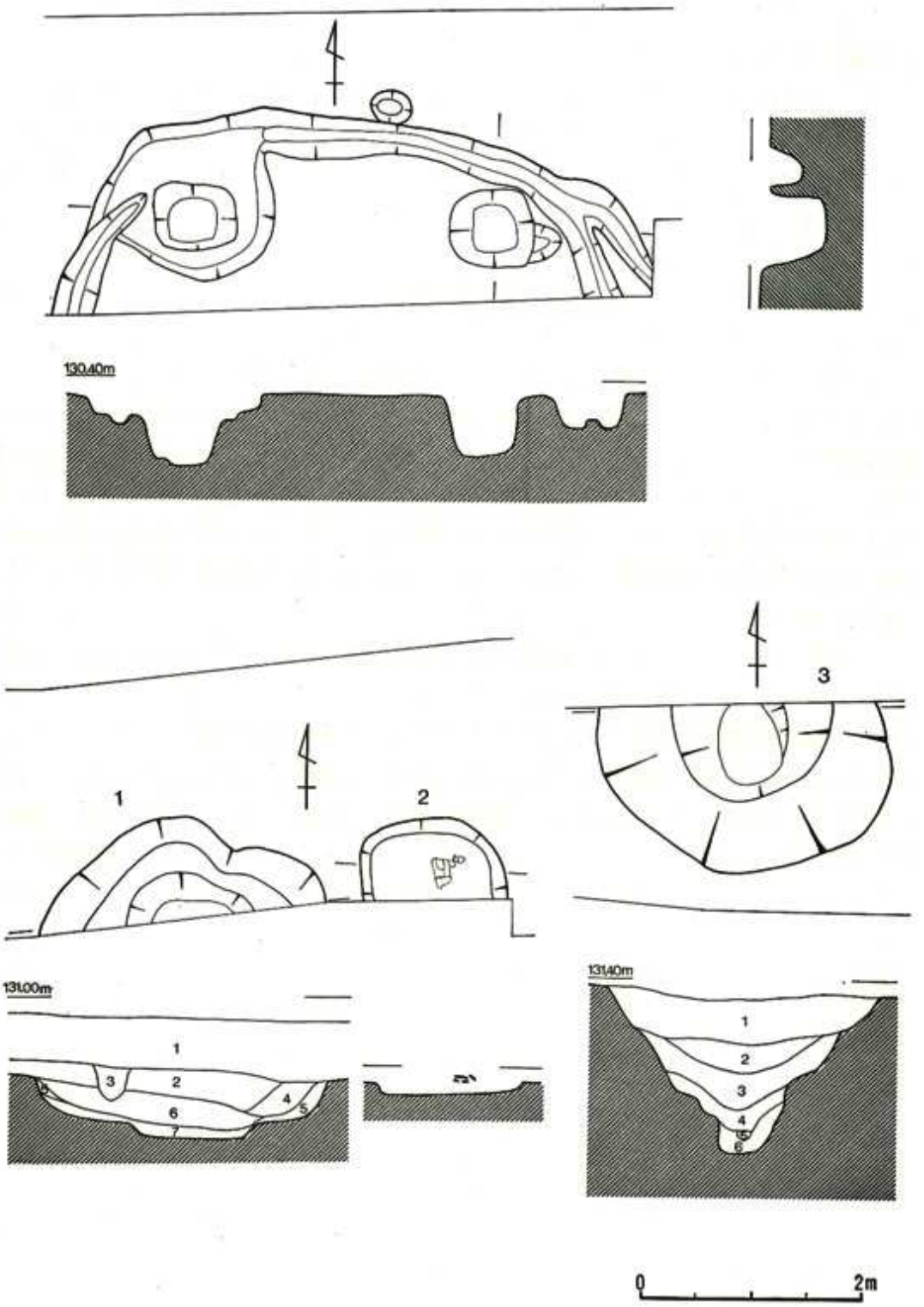
2号土壙の西側で検出された。この土壙も大部分が調査区外であり、北側の一部を検出したにすぎない。長径約2.6mの楕円形を呈すると思われる。ローム面からの深さは約50cmと深く、壁はなだらかに立ち上がり、底面は平坦である。底面は東側に段を持っており2基の土壙の重複とも考えられる。覆土は、上部に暗褐色土、下部に黒褐色土が堆積していた。遺物は、覆土中より中期勝坂式、加曽利E Ⅰ式、加曽利E Ⅱ式の土器破片が少量出土している。

第2号土壙（第5図）

1号住居跡の西側で検出され、北側½を調査した。プランは径1.3m の円形を呈すると思われる。掘り込みはローム面より10cmと浅く、壁は斜めに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は暗褐色土が堆積していた。底面より10cm浮いた覆土上面で、加曽利E Ⅱ式土器の大形破片（第10図3）が押しつぶれたような状態で出土した。その他には遺物は出土していない。

第3号土壙（第5図）

この土壙は調査区の西端において唯1基検出され、南側⅔が調査できた。プランは、径約2.6m の円形を呈すると思われる。掘り込みは深く、ローム面より底面まで1.4m を測る。ローム面より約30cmと80cmの所で段を持つが、全体的にはすり鉢状を呈している。覆土は、上部に黒褐色土、下部に暗褐色土が堆積し、ロームブロックが多量に含まれていた。遺物は、河原石とともに縄文土器や石器の破片が出土しているが、覆土の状態より近世以降の井戸状の遺構と考えられる。



第5図 遺 構 実 測 図

土壙1. 1耕作土 2暗褐色土 3黒色土 4・7褐色土 5黄褐色土 6褐色土
土壙3. 1・2黒褐色土 3・4褐色土 5ロームブロック 6黄褐色土

3 遺物包含層

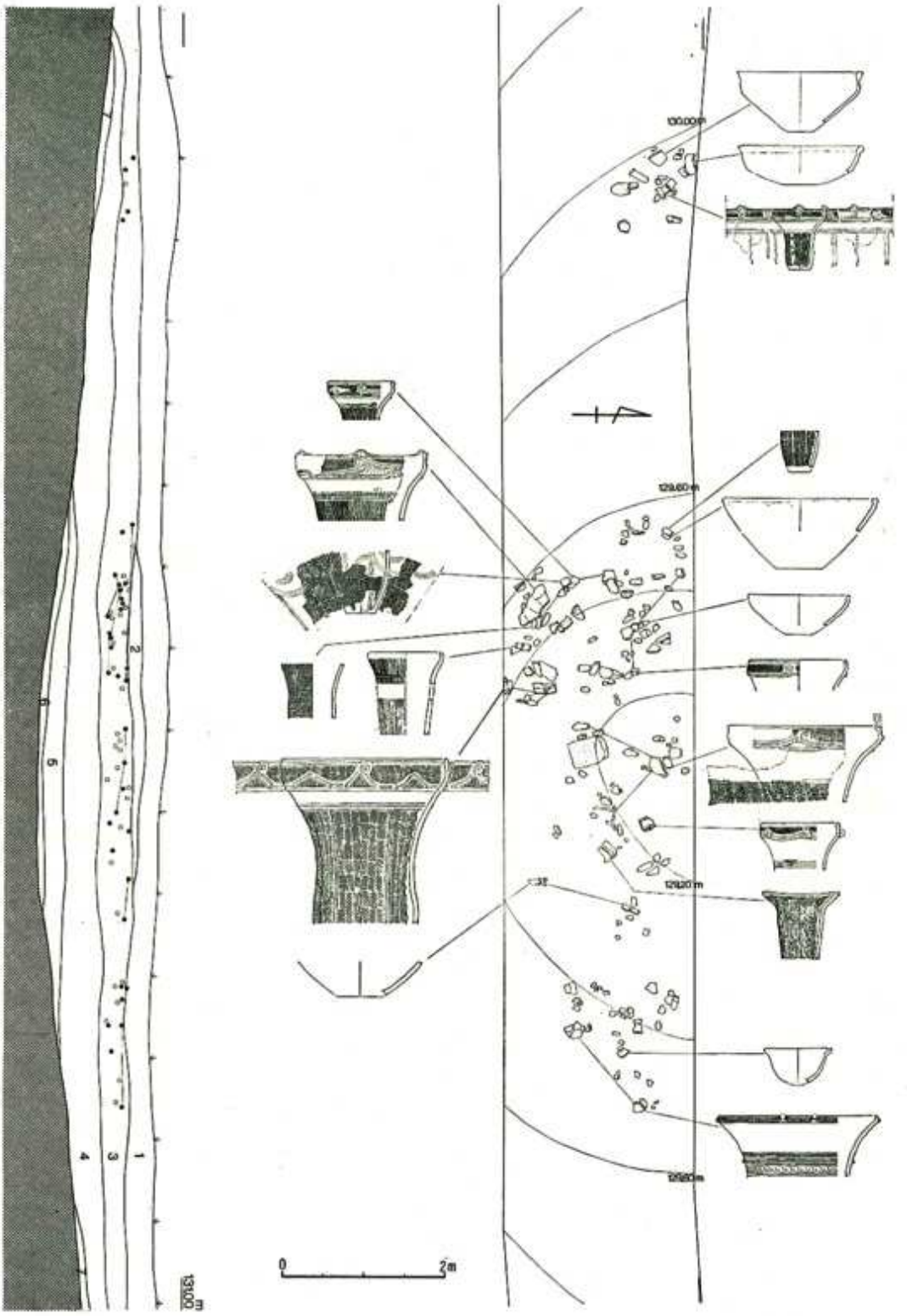
遺物包含層（第6図）

住居跡の西側約10m～25m離れた場所において多量の遺物が出土し、遺物包含層として確認された。1号土壙の付近からローム面が緩やかに傾斜し、最も深い所で約80cmを測り、西側も緩かに立ち上がり幅15m程の小さな谷になっている。この谷の層位は、1層耕作土、2層黒色土、3層黒褐色土、4層緻質な黒色土、5層粘性の灰黒色土、6層黄褐色土がレンズ状に堆積している。遺物包含層は、厚さ30～40cmの3層黒褐色土が相当し、下部の4層～6層には遺物はほとんど含まれていない。遺物包含層のレベルは、住居跡や土壙とほぼ一致し、4層上面が当時の生活面であったと考えられ、若干の窪地状のこの場所に遺物包含層が形成されたと思われる。

遺物は幅約15mの範囲から縄文土器コンテナバット30箱、石器5箱が出土し、今回の調査による出土遺物の9割以上を占めている。又、土器や石器とともに河原石も出土している。出土土器は、前期諸磯b式少量を含み、中期勝坂式、阿玉台式、加曽利EⅠ式～加曽利EⅣ式に及ぶが、加曽利EⅠ式後半が主体を占める。土器は完形に近いものや、大形破片も含まれるが大部分は破片であり、石器も欠損品が極めて多い。第6図は、復元実測し得た土器の位置と接合状況を示したものである。大形破片は1～2mの範囲で接合してブロック状に出土し、時期は加曽利EⅠ式後半に比定される土器が多い。

この遺物包含層は、全体的には時期に幅があり、破片が多い事から自然の流れ込みによって形成されたと思われる。しかし、遺物量の集中性や大形破片のブロック状の出土を考えると、この場所における遺物の廃棄行為も考えられ、ある時期には窪地を利用した遺物廃棄場になっていたと把えられる。又、この場所は北側から入り込む小さな谷の奥部に当たり、遺物包含層は谷に沿って南北に広がる事が予想されるが、それほど広い範囲にはならないと思われる。一応、15～20mの範囲を考えておきたい。

（島村範久）



第6図 遺物包含層実測図

1耕作土　2黒色土　3・4黒褐色土　5黒色土　6黄褐色土　7褐色土

● 土器　○ 石器

V 遺　　物

出土遺物は、おおよそコンテナパットに土器30箱、石器5箱である。調査面積300㎡の割には多量である。このうち、9割以上が遺物包含層より出土している。時期は、縄文時代前期諸磯b式、後期称名寺式、堀之内Ⅱ式を少量含むが大部分は中期勝坂式、阿玉台式、加曽利EⅠ式～加曽利EⅣに属する。

1 土　　器

第1号住居跡出土土器（第7図1～12）

1は口唇部が肥厚する口縁部破片で、沈線による渦巻文を持つ。胎土に小砂利を含み粗雑な土器である。2も口唇部が肥厚し、頸部以下には縄文が施文される。3、5は刻みを持つ隆帯により区画文が描かれ、区画内は沈線文を充填している。4は、沈線により曲線文が描かれている。3～5は焼成が良好で色調は赤褐色を呈している。6は、刻みを持つ隆帯により楕円区画文を作り、区画内を沈線により充めている。1～6は勝坂式後半に比定される。

7～9は、断面がキャリパー形を呈する口縁部破片である。7は、縦位の沈線の上に隆帯を貼付し、剣先文を描いている。8、9は隆帯による文様が区画文を取るようになっている。10は、交互に刺突文を施文した隆帯が巡る頸部破片である。7～10は、加曽利EⅠ式後半に比定される。
11は浅鉢形土器の口縁部破片である。口唇部が若干肥厚する。12は、外反する口縁部破片である。器厚5㎜と薄手の土器で、器面の内外面とも丁寧に磨かれている。頸部には2条の沈線がみられ、以下幾可学文様を描くと思われる。堀之内Ⅱ式に比定される。

第1号土壙出土土器（第7図13～26）

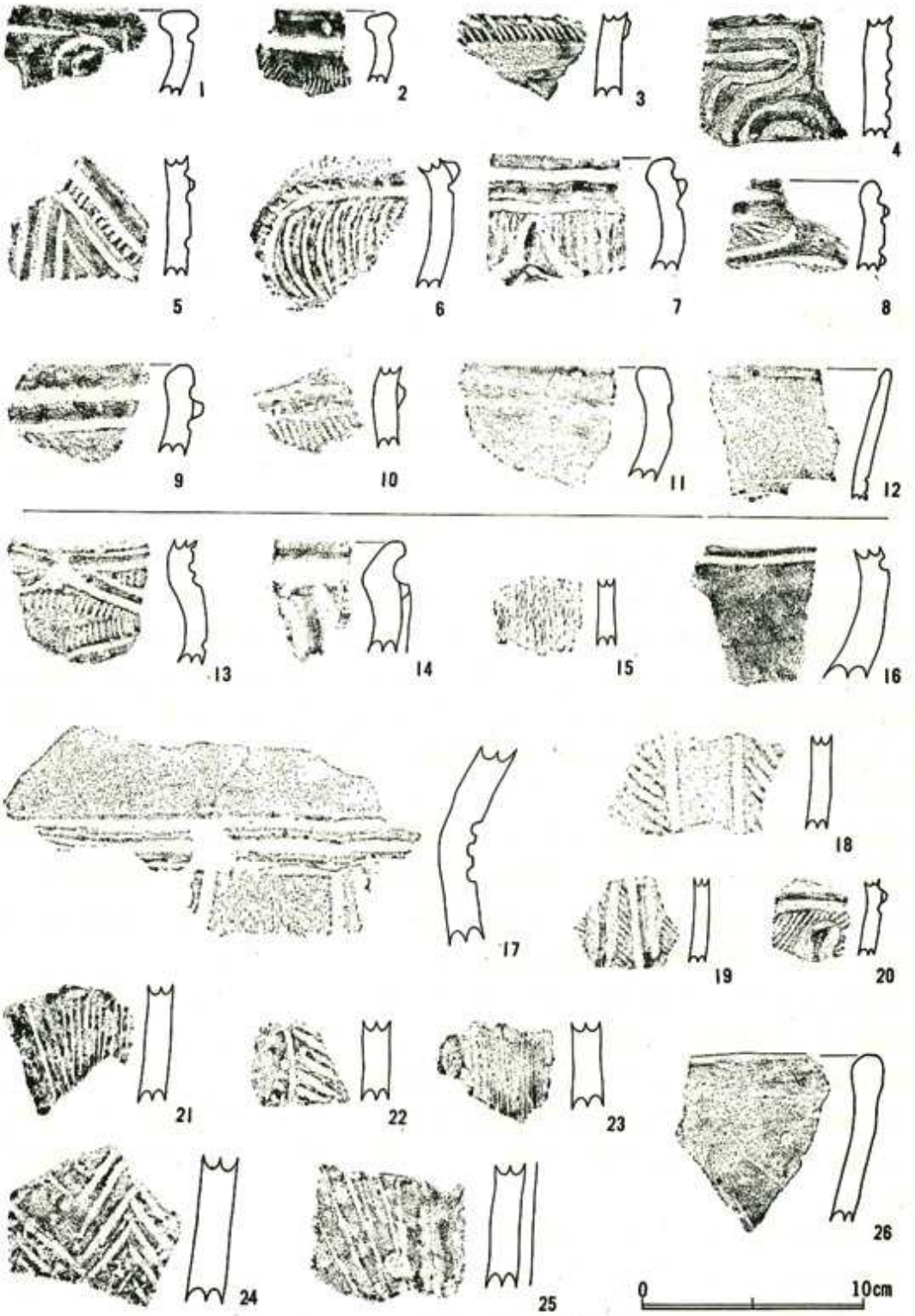
13は、半截竹管文により三角区画文を描き、区画内に連続爪形文を充填している。14は口唇部が外反するキャリパー形土器の口縁部破片である。16は、沈線が横位に巡る底部付近の破片である。17は、頸部無文帯を持ち、胴部との境に3条の沈線を巡らしている。胴部は、条線を地文とし、太い3本沈線による懸垂文を持っている。焼成が悪く脆い土器で、色調は黒色を呈している。18、19は磨消縄文の胴部破片である。20は、両側を沈線によりなぞる隆帯により曲線文が描かれる。19、20は器厚5～6㎜と薄手の土器で、焼成が良く堅緻である。

21～25は、地文に条線又は櫛描文を持ち、隆帯が貼付される土器である。24はハの字文が描かれる。胎土が砂質の為に器面が粗い。色調は褐色を呈している。26は、口唇部が若干肥厚し、内傾する口縁部破片である。器面は良く磨かれ、焼成が良く堅緻である。沈線により胴部文様が描かれる。

13、16は勝坂式、14、15は加曽利EⅠ式、25は加曽利EⅡ式に比定される。21～25は曽利系の土器である。26は堀之内Ⅰ式に比定されよう。

第2号土壙出土土器（第10図3）

口縁部のキャリパー形が退化し開き気味になった深鉢形土器である。約¼が残存している。口径は41.7㎝である。口唇部は扁平化し直行する。口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯の構成であ



第7図　1号住居跡、1号土壙出土土器拓影図

る。口縁部文様は、隆帯により渦巻文を8～10単位配し、その間を太い沈線により区画する。区画内はヘラ状工具により沈線が充塡される。頸部無文帯は上下を隆帯により区切られ、無文帯幅8.5cmと広い。胴部は地文に原体Lの撚糸文を縦走し2本隆帯の懸垂文を貼付している。胎土、焼成ともに良好で、色調は黒味を帯びた黄褐色を呈する。加曽利E Ⅰ式後半に比定される土器である。

遺物包含層出土土器（第8図～第25図）

復元実測し得た土器22個体を含みコンテナパット30箱に及ぶ多量の土器が出土している。前期諸磯b式少量と、中期勝坂式、阿玉台式、加曽利E Ⅰ式～加曽利E Ⅳ式が出土している。いずれもⅢ層を中心に混在し、層位的な区別は把えられなかった。以下、時期毎に分類し説明を行なう。

第1群土器（第13図1～8）

前期諸磯式に比定される土器である。

1は、原体R<$\frac{L}{L}$の縄文を横位に施文した胴部破片である。横位の蛇行沈線文を持つ。胎土には小砂利を含む。2～8は浮線文土器である。地文に縄文を持つ。6、7は浮線上、又は、沿って円形刺突文を加えている。諸磯b式に比定されよう。

第2群土器（第8図1、第13図9～29、第14図～第16図）

中期前半勝坂式に比定される土器である。

8図1は、口縁部が外反する大形破片である。約⅓残存している。口径は48.5cmである。口縁部文様帯の幅が狭く、頸部無文帯が広い。口縁部は隆帯を巡らし、2条のD形とC形の連続爪形文を施文する。隆帯は数個の突起も作っている。胴部文様は、隆帯と半截竹管文を巡らし、口縁部同様D形とC形の連続爪形文を施文している。又、上下から交互に三角文を施こす事によって、肉彫の蛇行文を巡らしている。胎土に小砂利を含み器面は粗い。色調は暗褐色を呈する。藤内式段階に比定される。

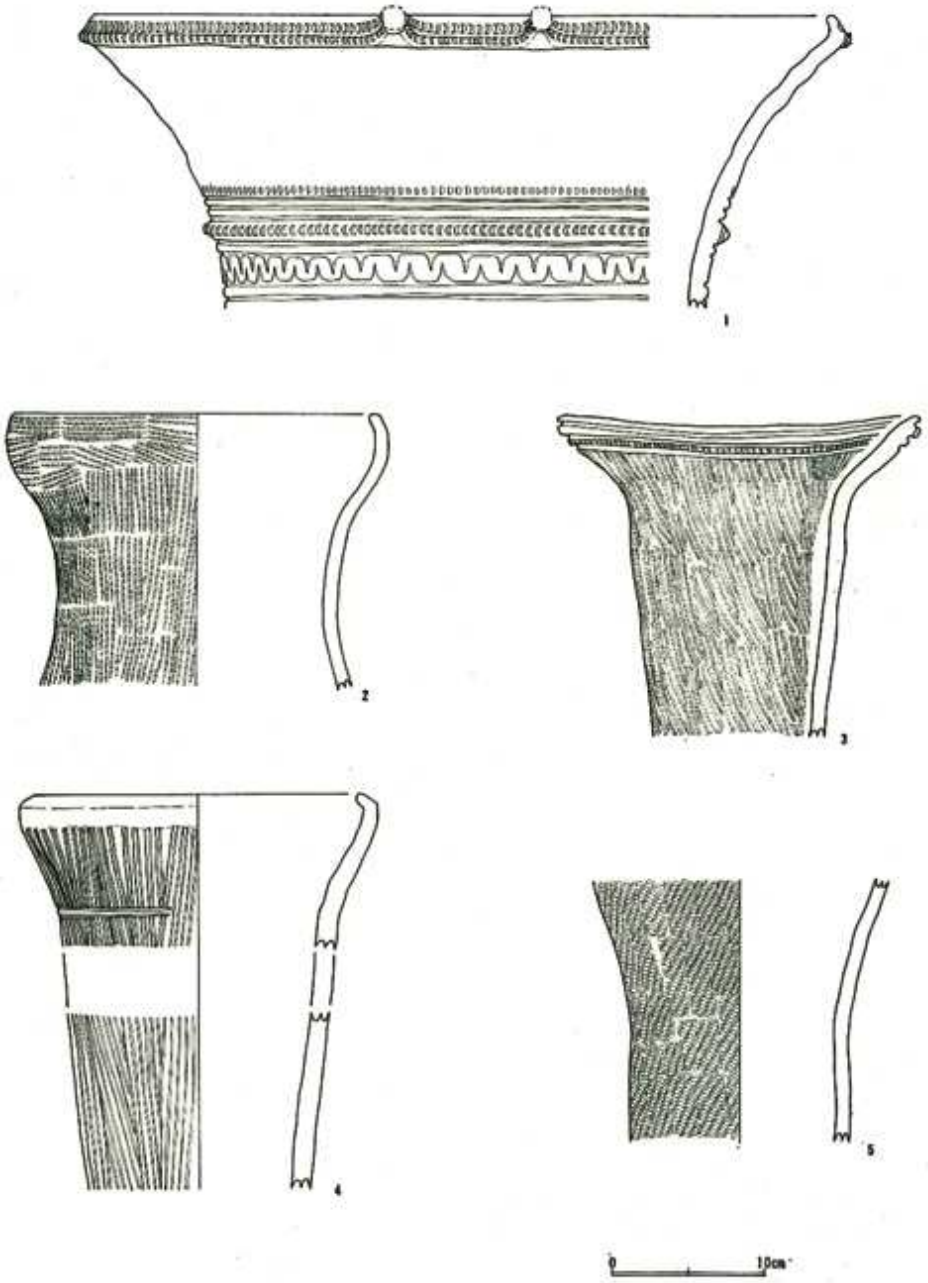
13図9は角押文により文様を描く土器である。10は肥厚する口唇部が外反し、口唇下には小形の爪形文による鋸歯状文が巡っている。胴部は地文に縄文を持ち、半截竹管により文様が描かれる。11は、沈線による鋸歯状文を持つ。12は、連続三角刺突文により鋸歯状文を描く。地文には縄文を持っている。9～11は黒褐色、12は褐色を呈する。

13～16は、隆帯により三角区画文を描く土器である。隆帯に沿って三角あるいは矢羽根状の刺突文を施文する。区画内は、三叉文、鋸歯状文が充塡される。いずれも色調は褐色を呈する。17～21は若干幅広の連続三角文により文様が描かれる。色調は褐色を呈している。

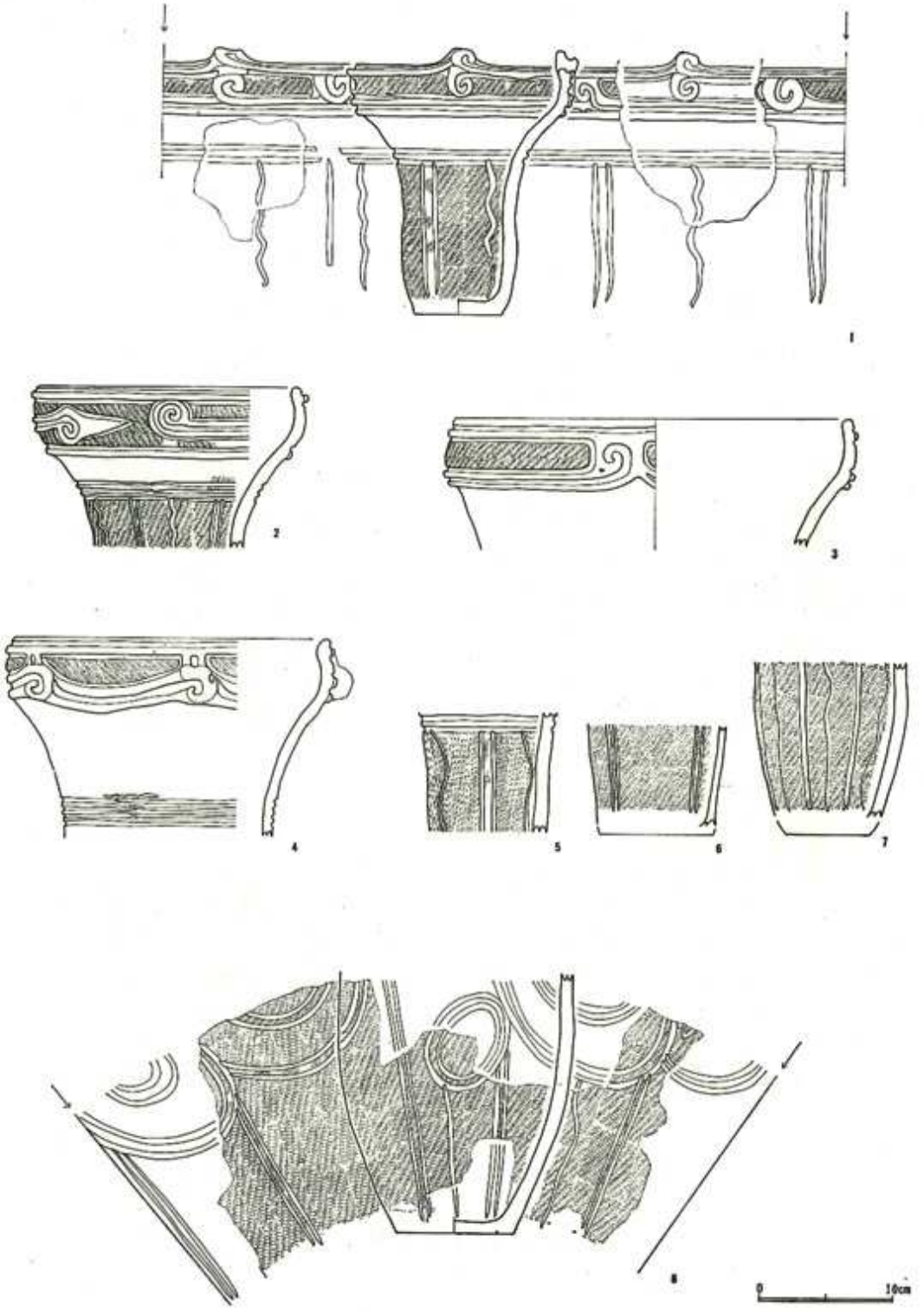
22～29は、隆帯により三角形と楕円形の区画文を描き、隆帯に沿って幅広な連続爪形文を施文する。区画文は横帯として数段の構成を取ると思われる。胎土、焼成とも良好であり、色調は褐色を呈する。

13図9は狢沢式、10～16は新道式～藤内Ⅰ式、17～29は藤内式段階に比定される。

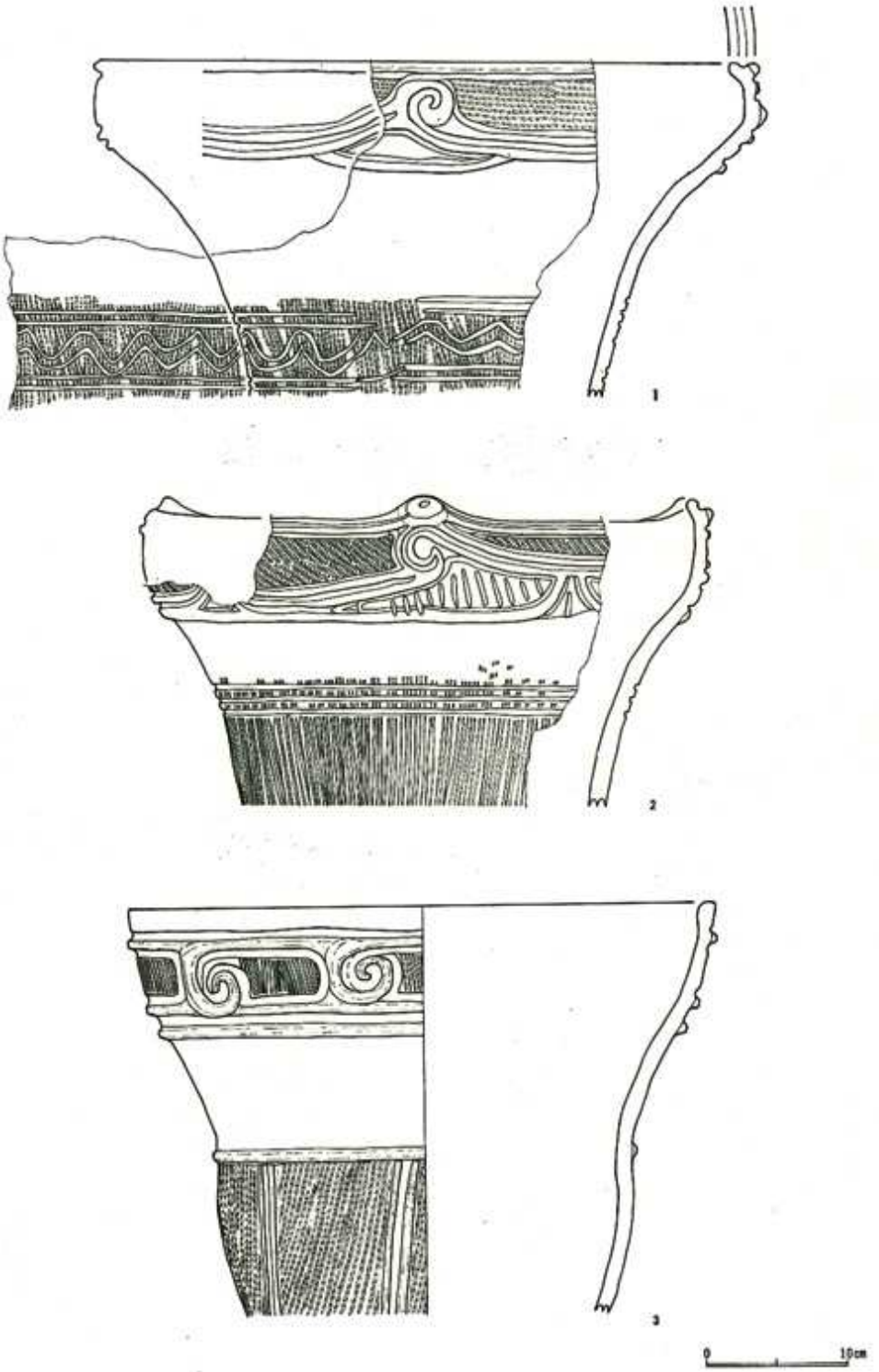
14図1～6は、隆帯と大形連続爪形文により、抽象文的文様を描く土器である。1は、口縁部がくの字状に屈曲し、胴部が張る鉢形を呈すると思われる。口唇部を始め、隆帯や区画内に密な連続爪形文を施文する。1～6はいずれも器面が丁寧に磨かれている。胎土、焼成とも良く堅緻である。色調は暗褐色を呈する。



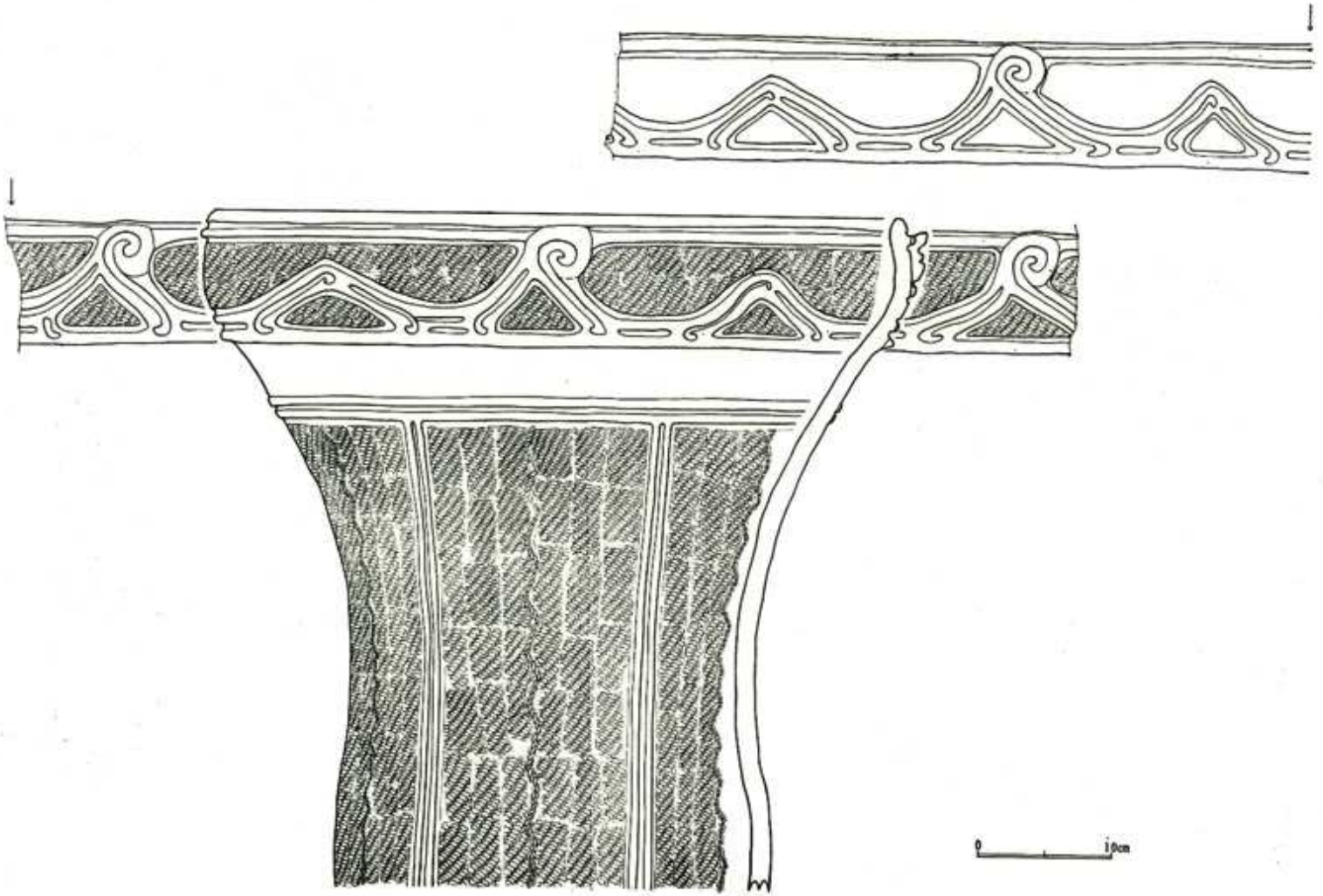
第8図　出土土器実測図 (1)



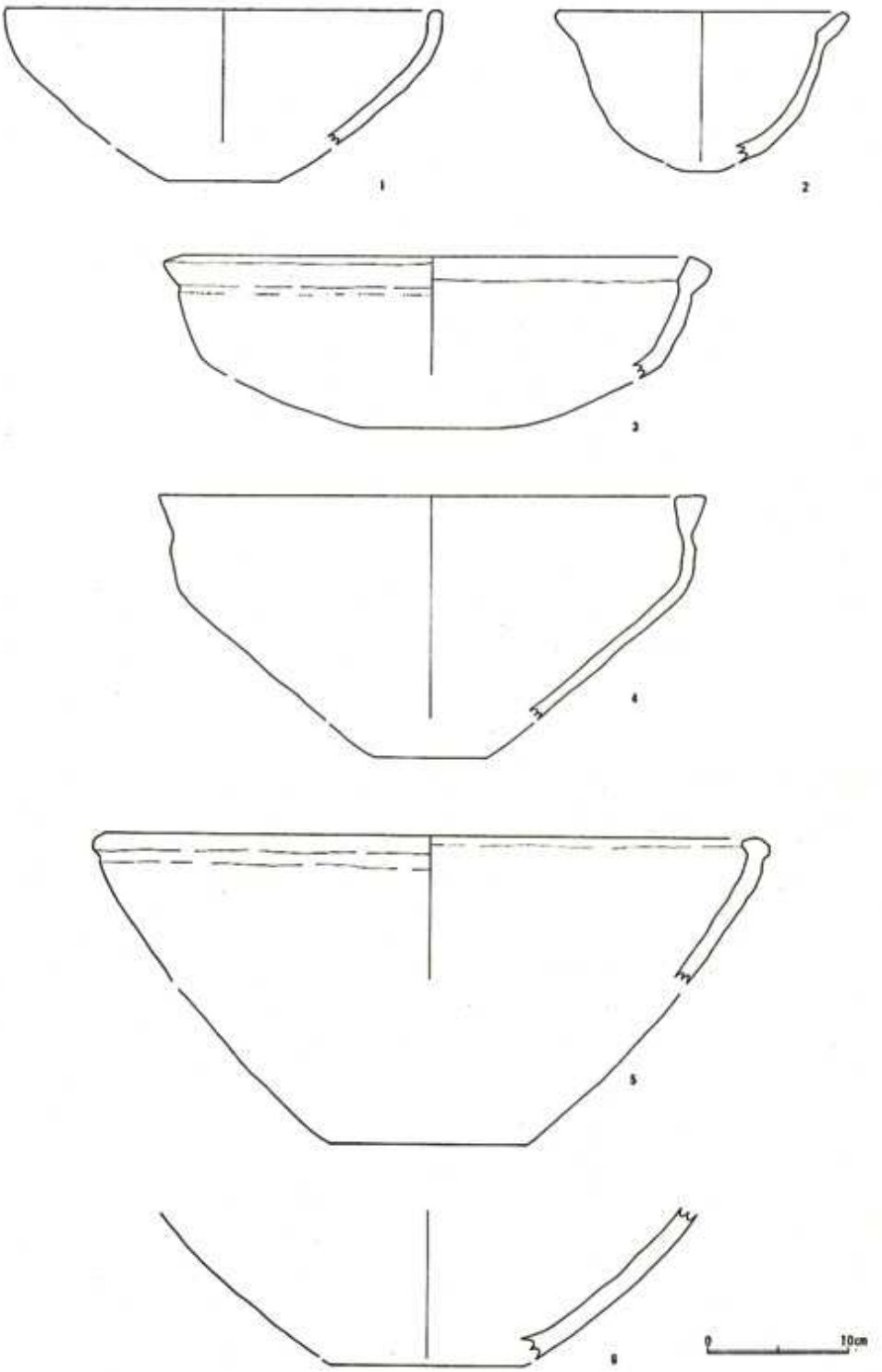
第9図　出土土器実測図(2)



第10図　出土土器実測図(3)



第11図 出土土器実測図(4)



第12図　出土土器実測図(5)

7～18は、半截竹管文により縦帯区画文を描く土器である。7～9は同一個体である。区画内を原体L$<^{R}_{R}$の縄文により充填している。12～18の半截竹管文は深く施文され区画が一層明確になるとともに、縦帯区画文の幅が広くなる。区画内は連続する爪形文、矢羽根状文、半円文等によって文様を充填している。7～18は、胎土、焼成とも良好で堅緻である。色調は褐色を呈する。

19～25は刻みを持つ隆帯により縦帯区画文を描く土器である。19は区画の幅が狭く、区画内は、連続爪形文、矢羽根状文、半円文を施文している。21～23は区画幅が広い土器で、22の区画内は櫛目文を充填している。21～23は器厚1㎝と厚手である。いずれも胎土、焼成が良好で、色調は19が暗褐色、他は褐色を呈する。

14図1～25はおおよそ藤内式段階に比定される。1～11、19が古く位置付けられよう。

15図1～20は隆帯により縦帯又は横帯の区画文を胴部文様帯として展開する土器である。隆帯の断面はカマボコ状を呈し、刻みが施される。区画内は、爪形文、櫛目文によって充填している。1～12、18は縦帯区画文、13～17、20は横帯区画文である。胎土が砂質で器面の粗い土器が多い。色調は褐色を呈する。21は、原体L$<^{R}_{R}$の縄文を施文した底部である。

15図1～20は藤内Ⅱ式～井戸尻Ⅱ式段階に比定される。

16図1～3も隆帯により区画文を描く土器である。隆帯には刻みを持ち、隆帯に沿って連続爪形文と半円文が巡る。区画内は櫛目文により充填される。円筒形を呈する深鉢形土器の胴部に当たる。胎土が砂質であるが焼成が良く、堅緻な土器で、色調は褐色を呈する。井戸尻式段階に比定される。

4～9は半截竹管により櫛形文を描く土器である。4は山形の突起を持ち波状を呈する口縁部である。波頂部に縦長の楕円区画文を配し、区画内には縄文を施文している。胎土は砂質で器面は極めて粗い。色調は黒褐色を呈する。5～7は半截竹管文により区画を描き、区画内を櫛形文により充填している。6～8は口唇部が肥厚し特徴的である。9は底部付近の破片である。器面は丁寧に磨かれている。色調は暗褐色を呈する。

10は口縁部が無文で、胴部に半截竹管文により文様が描かれる。11は、隆帯に沿って半截竹管文を2条施文し、区画内には小さな三角刺突文を施文している。12～14は半截竹管文で文様が描かれる土器である。いずれも胎土は砂質で器面が粗い。色調は褐色を呈する。15は、口縁部文様帯に扁平な隆帯を貼付した浅鉢形土器である。

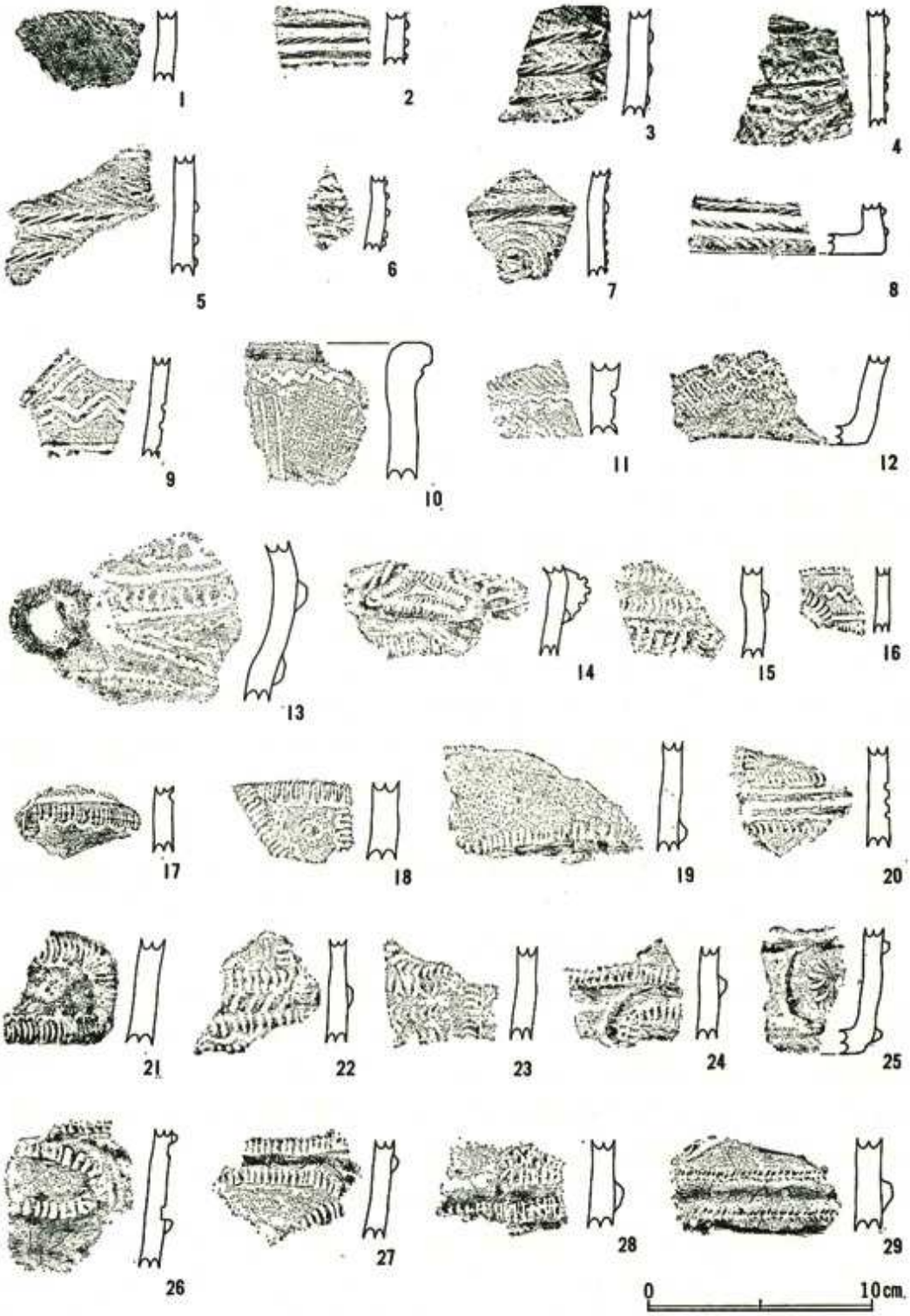
16図4～14は、藤内Ⅱ～井戸尻Ⅱ式段階に比定される。

第3群土器（第17図）

阿玉台式に比定される土器である。

1は、山形の波状口縁部である。波頂部から、指頭押圧文を持つ隆帯を垂下し、口縁に沿って2条の刺突文風な結節沈線文を施文している。2～8は、断面三角形の隆帯により横長な楕円区画文を構成する。隆帯に沿って、2は1条、3～8は2条の結節沈線文を巡らしている。胎土には雲母が含まれる。焼成は良好で堅緻な土器である。色調は2、7が褐色、1、3～6、8は黒褐色を呈する。

9、10は隆帯に沿って半截竹管文が施文される。11は、隆帯をY字状に垂下している口縁部破片



第13図 出土土器拓影図(1)

である。12〜14は2条の蛇行沈線文を持っている。11は、外反する口縁部であり、口縁と平行に蛇行沈線文を巡らしている。13、14は、隆帯による区画内に描かれている。胎土に雲母を含み、色調は黒褐色を呈する。

15〜22は連続爪形文を持つ土器である。15は、隆帯により区画し、裾部に1条の結節沈線文が巡る。区画内には切るような爪形文を施文している。16は、鉢形土器の口縁部破片である。口唇部を肥厚させ、爪形文を施文し、その下に2条の結節沈線文を巡らしている。17は、指頭状押圧文を持つ隆帯により区画した口縁部である。小突起を持つと思われる。隆帯の裾部に半截竹管文を施文し、区画内に2条の爪形文を充塡している。18は、山形の波頂部に棒状の隆帯を貼付している。20、21は隆帯を貼付し横位に爪形文を配している。19〜22の爪形文は、大きく、深く刻まれている。胎土に雲母を含み、焼成が良好で堅緻な土器である。色調は17、20が褐色16、18、19、21、22は、黒褐色を呈している。

第17図1〜22は、阿玉台Ⅰb式の要素を持つ土器も存在するが、全体的に様相が類似しており大部分が阿玉台Ⅱ式に比定される。

第4群土器（第8図2、3、5、第9図〜第12図、第18図〜第21図）

加曽利EⅠ式及び加曽利EⅡ式前半に比定される土器である。

8図2は、口縁部が内曲する深鉢形土器である。約¼残存し、口径は23.8cmを測る。口縁部は横位に、頸部から胴部には縦位に撚糸文を全面施文している。撚糸文の原体はLである。胴下半部にも撚糸文が続くと思われるが、勝坂式の胴部文様帯を持つ土器も存在する。色調は暗褐色を呈する。

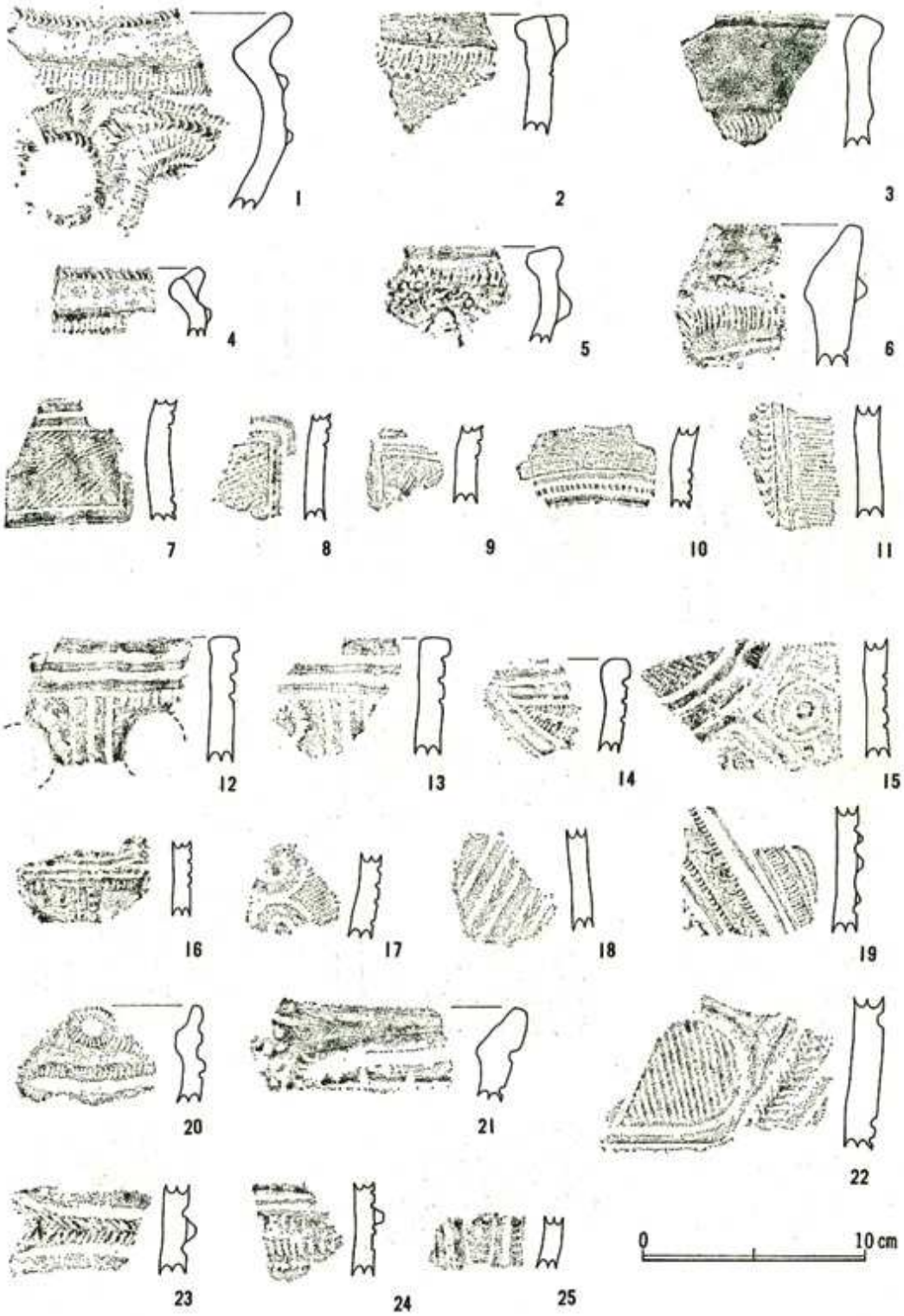
3は口縁部が外反し、胴部が円筒状の深鉢形土器である。底部を欠損しているが、ほぼ完形に復元された。口径は23.4cmを測る。頸部以下全面に撚糸文を縦走施文する。口縁部は1条の隆帯と3条の沈線を巡らしている。胎土に小砂利を含み、焼成が悪く極めて脆い。色調は黒味を帯びた暗褐色を呈する。5は、原体R$<^{L}_{L}$の縄文を縦位に施文する胴部である。約⅓残存する。色調は褐色を呈する。

8図2、3は加曽利EⅠ式前半に比定される。

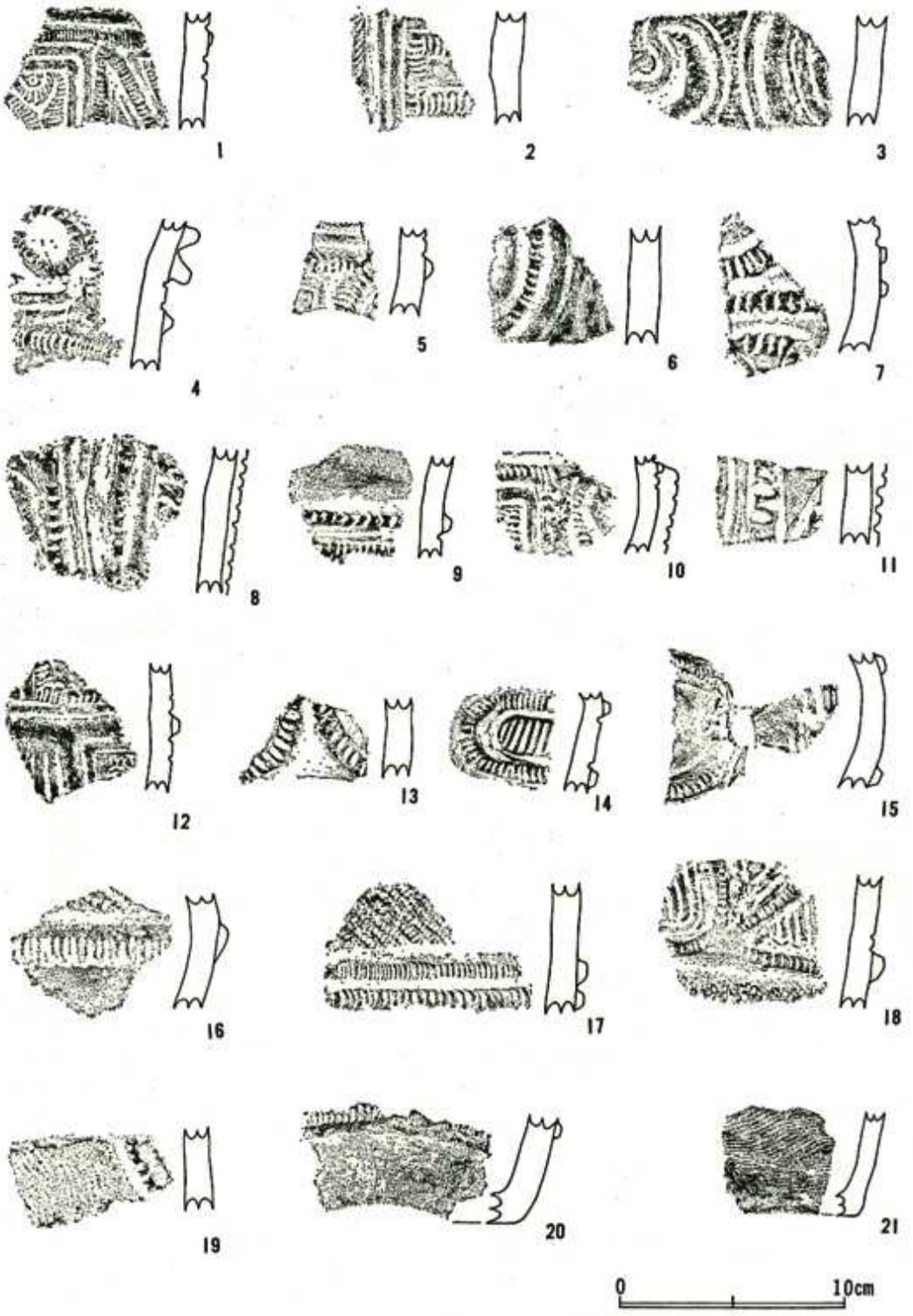
9図1〜4は口縁部がキャリパー形を呈する深鉢形土器である。1は一部欠損しているが、ほぼ完形に復元された。口径15,7cm、底径6.5cmである。口唇部は2本隆帯により作り出され、3単位の突起を持つ。口縁部文様帯は、地文に原体R$<^{L}_{L}$の縄文を縦走し、突起を中心に6単位の隆帯による渦巻文を貼付する。隆帯の裾部は沈線によりナゾられる。頸部無文帯は2本の沈線により胴部と区切られている。胴部文様帯は、地文に原体R$<^{L}_{L}$の縄文を縦走し、2本沈線と1本の蛇行沈線を垂下する。2本沈線間は磨消し状になっている。胎土、焼成とも良好で、色調は暗褐色を呈する。

2は、約⅓残存する土器で、口径は19.4cmである。地文に原体R$<^{L}_{L}$の縄文を、口縁部は横位、胴部は縦位に施文する。口縁部文様帯は、2本隆帯により渦巻文と剣先文を描く。3単位構成と思われる。頸部無文帯は3本沈線により胴部と区切られる。胴部は2本沈線と、1本蛇行沈線を垂下する。2本沈線間は1同様磨消し状になっている。胎土、焼成とも良好で、色調は黒味を帯びた暗褐色を呈する。

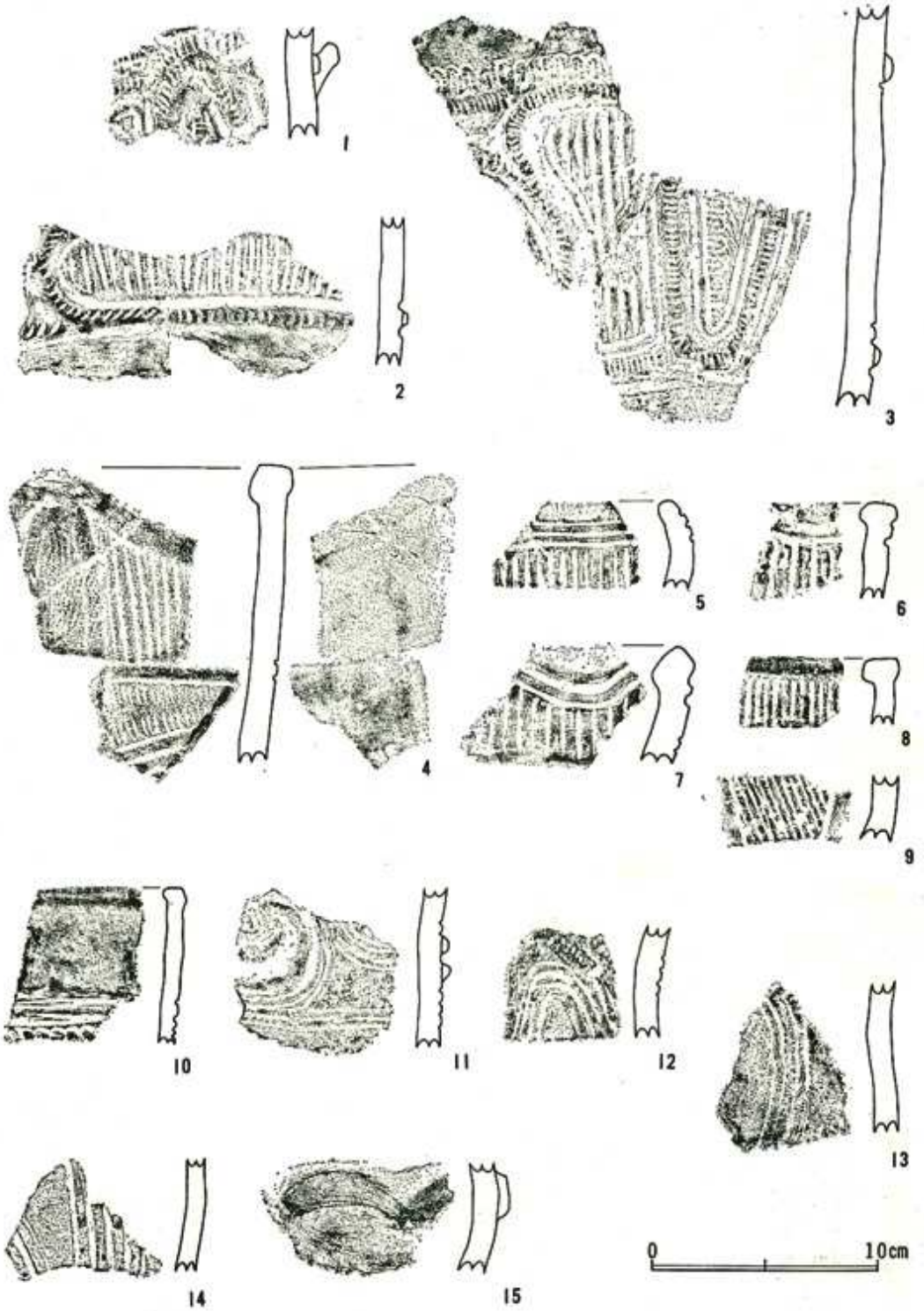
3は口縁部が約¼残存する土器である。口径は29.7cmを測る。口縁部文様帯は地文に原体L$<^{R}_{R}$



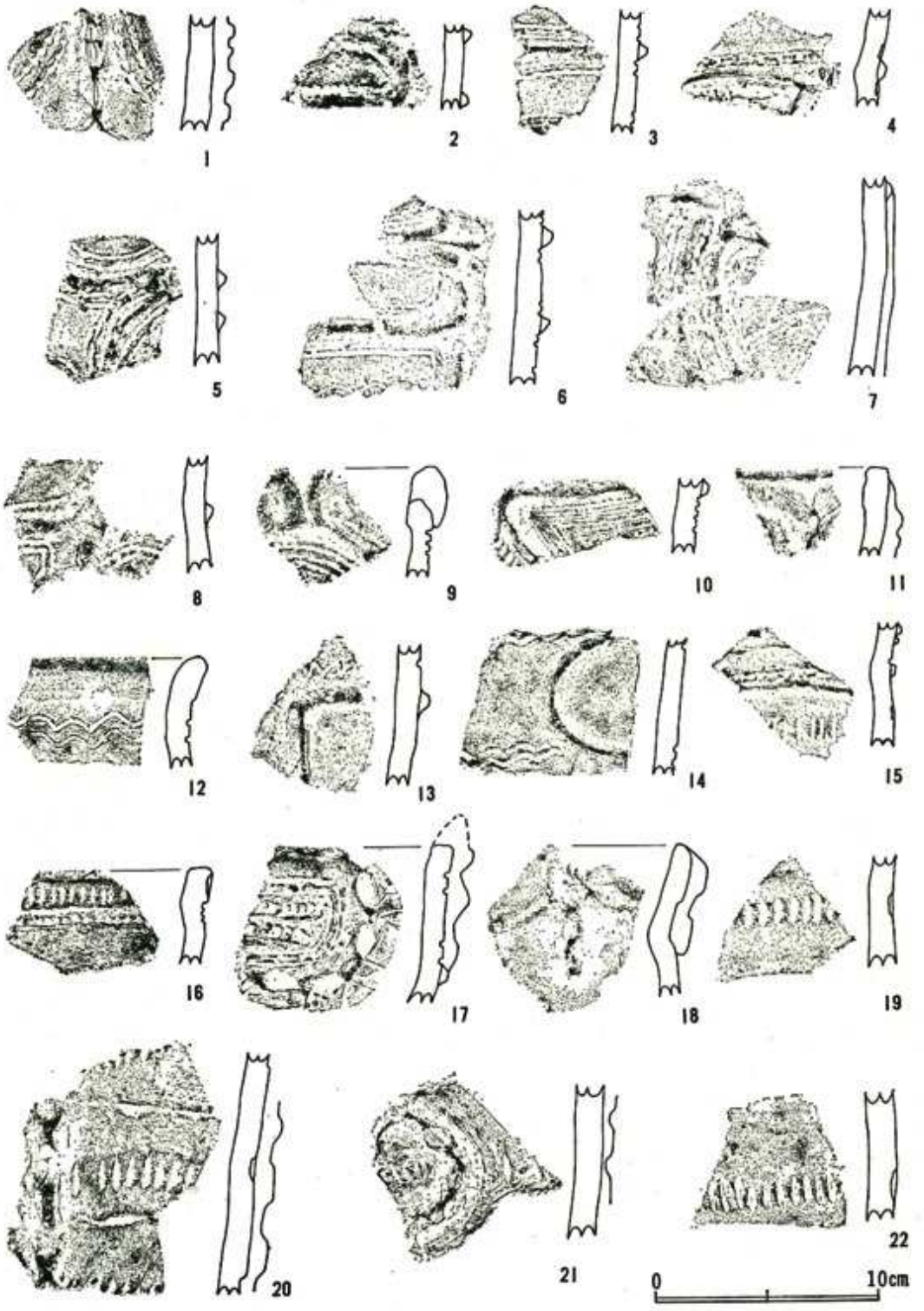
第14図　出土土器拓影図(2)



第15図　出土土器拓影図(3)



第16図　出土土器拓影図(4)



第17図 出土土器拓影図(5)

の縄文を横位に施文し、2本隆帯と沈線により区画文と退化した渦巻文を描いている。4単位構成と思われる。頸部無文帯を持つ。胎土に小砂利を含み脆い土器である。

4は、頸部より上半部が約⅓残存し、口径は23.7cmを測る。口縁部文様帯は地文に原体R<$^{L}_{L}$の縄文を横位に施文し、2本の隆帯により連結渦巻文を描く。渦巻文は2本隆帯によって口唇部とも連結している。文様構成は5単位を取ると思われる。頸部無文帯との境界は無く、その為か頸部無文帯幅が広い。頸部無文帯は4本沈線により胴部と区切られている。胎土、焼成とも良好で、色調は暗褐色を呈する。

5～8はキャリパー形深鉢形土器の胴部及び、胴下半部である。5は、地文にLの撚糸文を縦走し、2本沈線と1本蛇行沈線を垂下している。2本沈線間は磨消し状になっている。6は、地文に原体R<$^{L}_{L}$の縄文を縦走し、2本沈線の懸垂文を持っている。底径は約8.5cmである。7は1本隆帯と1本の崩れた蛇行沈線を交互に懸垂している。約½残存しており、隆帯と蛇行沈線文を単位として8単位構成を取ると思われる。地文には原体R<$^{L}_{L}$の縄文を縦走する。底径は6.2cmを測る。

8は、約½残存する胴下半部であり、底径は8.8cmを測る。地文に原体R<$^{L}_{L}$の縄文を縦走している。文様は、2本沈線による渦巻文と懸垂文により描かれ、1本の蛇行沈線も垂下している。4単位構成を取ると思われる。胎土、焼成とも良好で、色調は黒味を帯びた暗褐色を呈する。

9図1～8は、加曽利E Ⅰ式後半に比定される。

10図1、2は口縁部のキャリパー形が若干変形した深鉢形土器である。1は約⅓残存し、口径は45.4cmを測る。頸部が外反し、口縁部が強く内曲し、口唇部に1条の沈線が巡っている。口縁部文様帯は2本隆帯により渦巻が描かれ、地文には撚糸文Lを横位に施文する。口縁部文様帯と頸部無文帯の境界は基本的には無いが、渦巻文の下に隆帯を加えて作っている。頸部無文帯の幅は広い。胴部には、2本沈線により上下を区画し、区画内に山形の連弧文を描いている。地文にはLの撚糸文を縦位施文している。胎土、焼成とも良好で、色調は黒味を帯びた暗褐色を呈する。

2は約½残存し口径38.5cmを測る。口縁に、隆帯による円形文を突出させ突起を作っている。口縁部文様帯は2本隆帯によりの字文を描き、突起の下で渦を巻いている。3単位構成を取ると思われる区画内には、地文として原体R<$^{L}_{L}$の縄文を横位に施文するが、渦巻文の下部はヘラ状工具による棒状沈線を充填している。頸部無文帯と胴部文様帯は3本沈線により区切られる。胴部文様は地文に条線文を持ち3本沈線を垂下している。胎土に小砂利を含み脆い土器である。色調は黒味を帯びた暗褐色を呈する。

10図1、2は加曽利E Ⅰ式後半に比定される。

11図1は、口径51.2cm、現存高50.5cmの大形深鉢形土器であり約½残存している。口縁部文様帯は2本隆帯により、口唇部と接続して突出したS字文と、山形文を描いている。隆帯間は沈線により文様効果をあげている。4単位の文様構成を取る。地文には原体R<$^{L}_{L}$の縄文を縦位に施文する。頸部無文帯は2本隆帯により胴部と区切られる。胴部文様帯は、地文に原体R<$^{L}_{L}$の縄文を縦位に施文した後、2本隆帯と1本の結節縄文を垂下している。大木8b式の様相を持つ土器であり、加曽利E Ⅰ式後半に比定される。

12図は、浅鉢形土器を一括したものである。

1は約¼残存し、口径30.8cmを測る。口縁部が若干内傾する。器面は丁寧に磨かれる。2は約⅔残存し、口径20.2cmを測る。口縁部がくの字状に外反し、底部は丸底状になる。器面は丁寧に磨かれ、つやを持っている。3は約⅓残存し、口径36cmを測る。肥厚する口唇部が外反する。4は約⅛残存し、口径38.8cmを測る。口唇部が肥厚し、直行している。3、4も器面が丁寧に磨かれている。胎土、焼成とも良好で堅緻である。色調は黒味を帯びた暗褐色を呈する。5は約¼残存し口径46.6cmを測る。胎土が砂質で器面が粗雑である。色調は褐色を呈する。

12図1～6の浅鉢形土器は、おおよそ加曽利E Ⅰ式後半又は加曽利E Ⅱ式前半に属すると思われる。

18図1～17はキャリパー形土器の口縁部破片である。

1は、2本の若干細い隆帯を貼付して文様を描いている。地文には、Rの撚糸文を口縁部は横位頸部以下は縦位に施文する。2、3も地文にRの撚糸文を横位に施文している。太い2本隆帯により文様を描く。4～6は、太い隆帯により大きな渦巻文が描かれる。4は地文に原体R<$^{L}_{L}$の縄文を施文している。

7～15は、2本隆帯と隆帯間の沈線によりの字文を描く土器である。地文には縄文を施文している。10は区画文が中心になっており、頸部無文帯を持つ。11～13は、渦巻部を突出させている。11は頸部無文帯との境界が無く、無文帯幅を広く取る土器である。15は渦巻文が発達している。16は地文に撚糸文を施文する。

17は、口縁部文様帯に2本隆帯によるの字文を描くと思われる。頸部無文帯は幅が極めて狭く、1本隆帯により胴部と区切られる。地文は、口縁部、胴部とも原体L<$^{R}_{R}$の縄文を縦位に施文する。胴部には1本の蛇行沈線文が垂下している。胎土に小石を含みやや脆く、色調は暗褐色を呈する。

18図1は加曽利E Ⅰ式前半、2、3、5、6は中頃、4、6～17は後半に比定される。

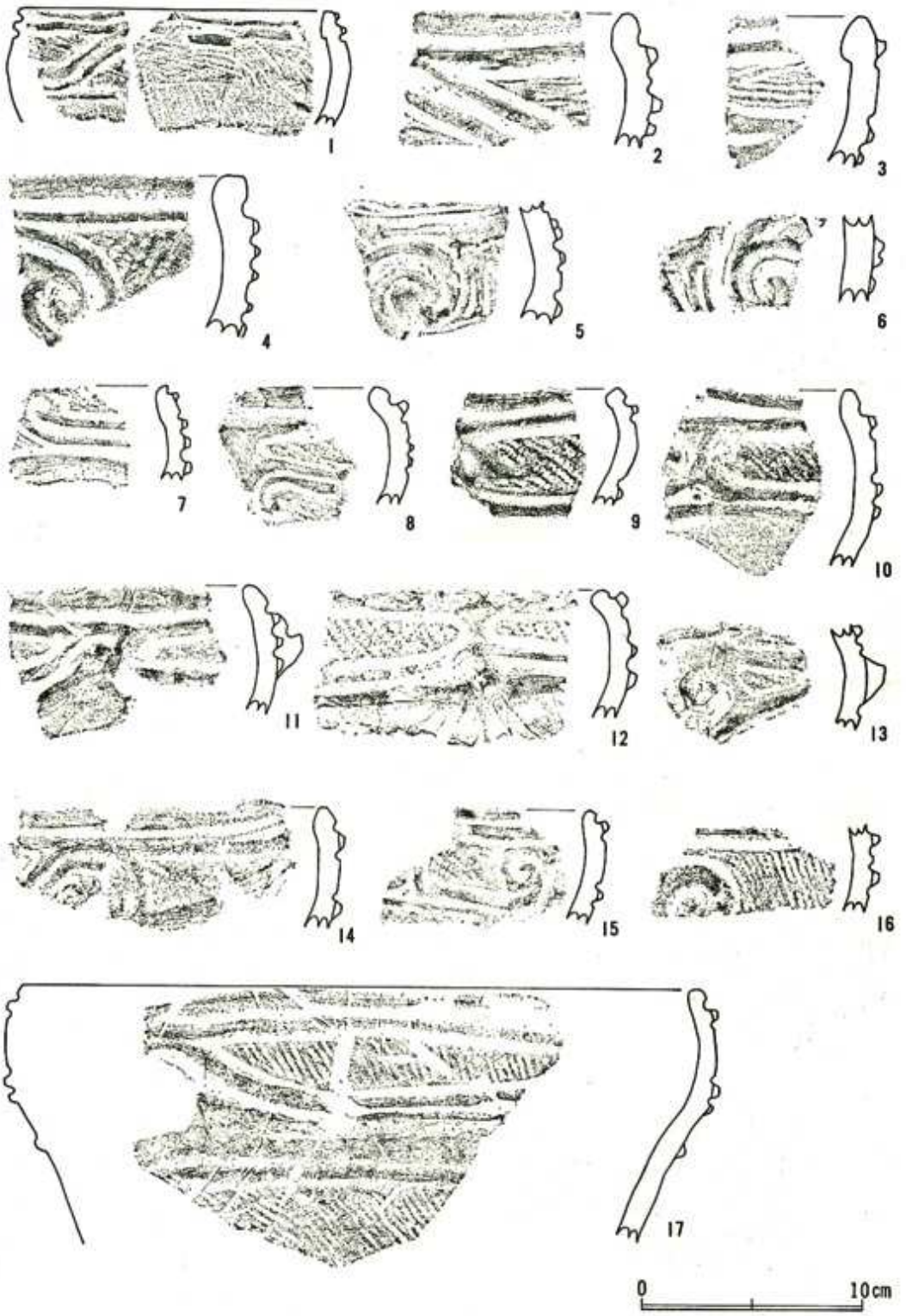
19図1～15もキャリパー形土器の口縁部破片である。

1は口唇部欠損しているが、若干大きな破片である。2本隆帯により区画文を中心とする文様を描き、区画間に沈線により渦巻文を配している。頸部にも区画文が構成され無文帯は持たないと思われる。地文には原体R<$^{L}_{L}$の縄文を縦位に施文している。胎土に小砂利を含み、焼成が悪く脆い土器である。色調は暗褐色を呈する。

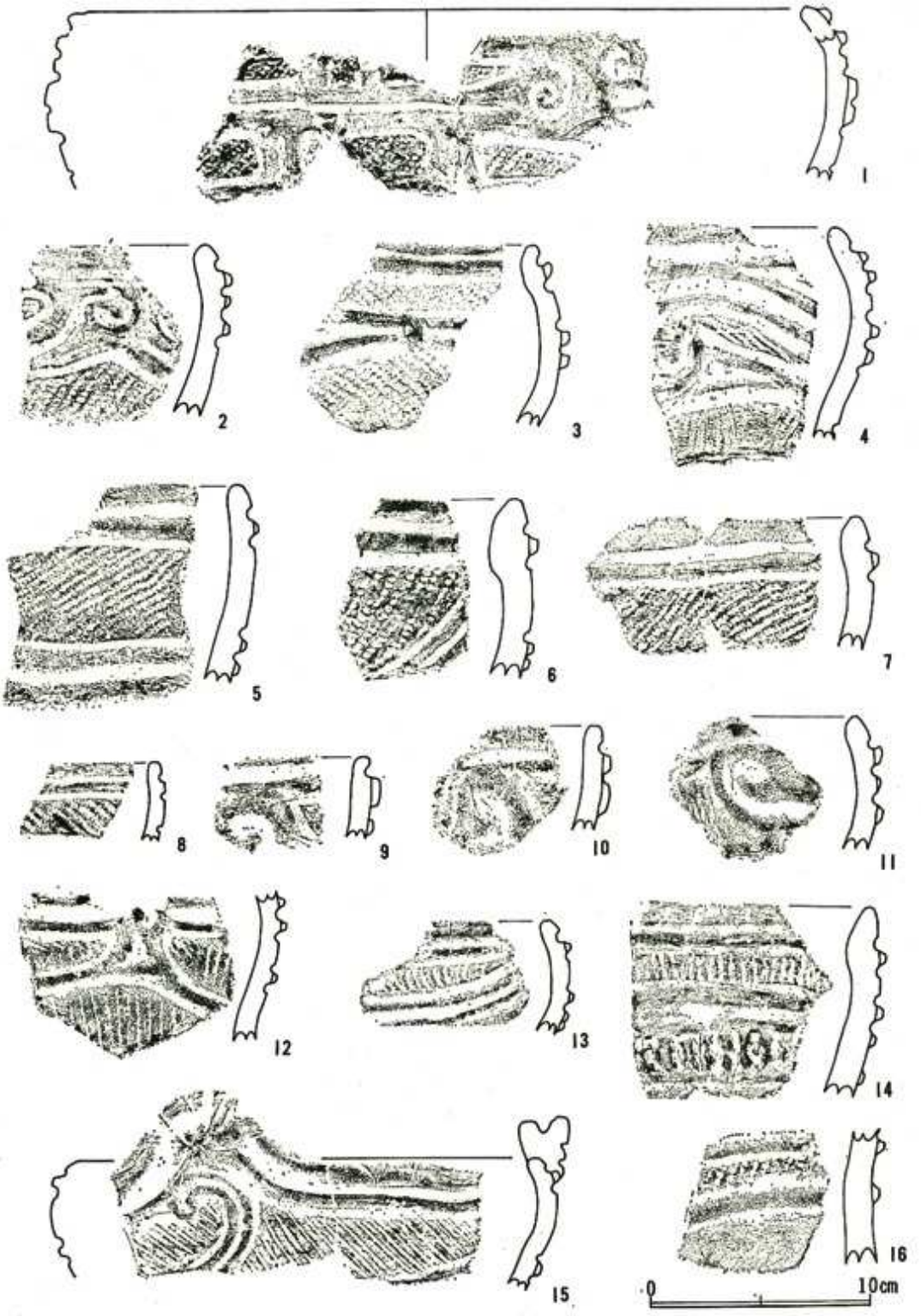
2～4も頸部無文帯を持たない土器である。2は、2本隆帯と隆帯間の沈線により渦巻文の発達したの字文を描く。地文に原体R<$^{L}_{L}$の縄文を縦位施文し、口縁部と頸部の境界は無い。3は、口縁部から頸部まで原体R<$^{L}_{L}$の縄文は横位に施文している。4は、原体R<$^{L}_{L}$の縄文を口縁部は横位頸部は斜位又は縦位に施文する。頸部には沈線が巡らされる。2～4とも胎土、焼成とも良好である。2は褐色3、4は、暗褐色を呈する。

5～8は、口縁が扁平で直行気味になり、口縁部文様帯は区画文が中心になっている。地文には原体R<$^{L}_{L}$の縄文を5～7は縦位に、8は横位に施文する。9～11は、扁平化した隆帯により独立した渦巻文を持っている。地文には縄文が施文される。

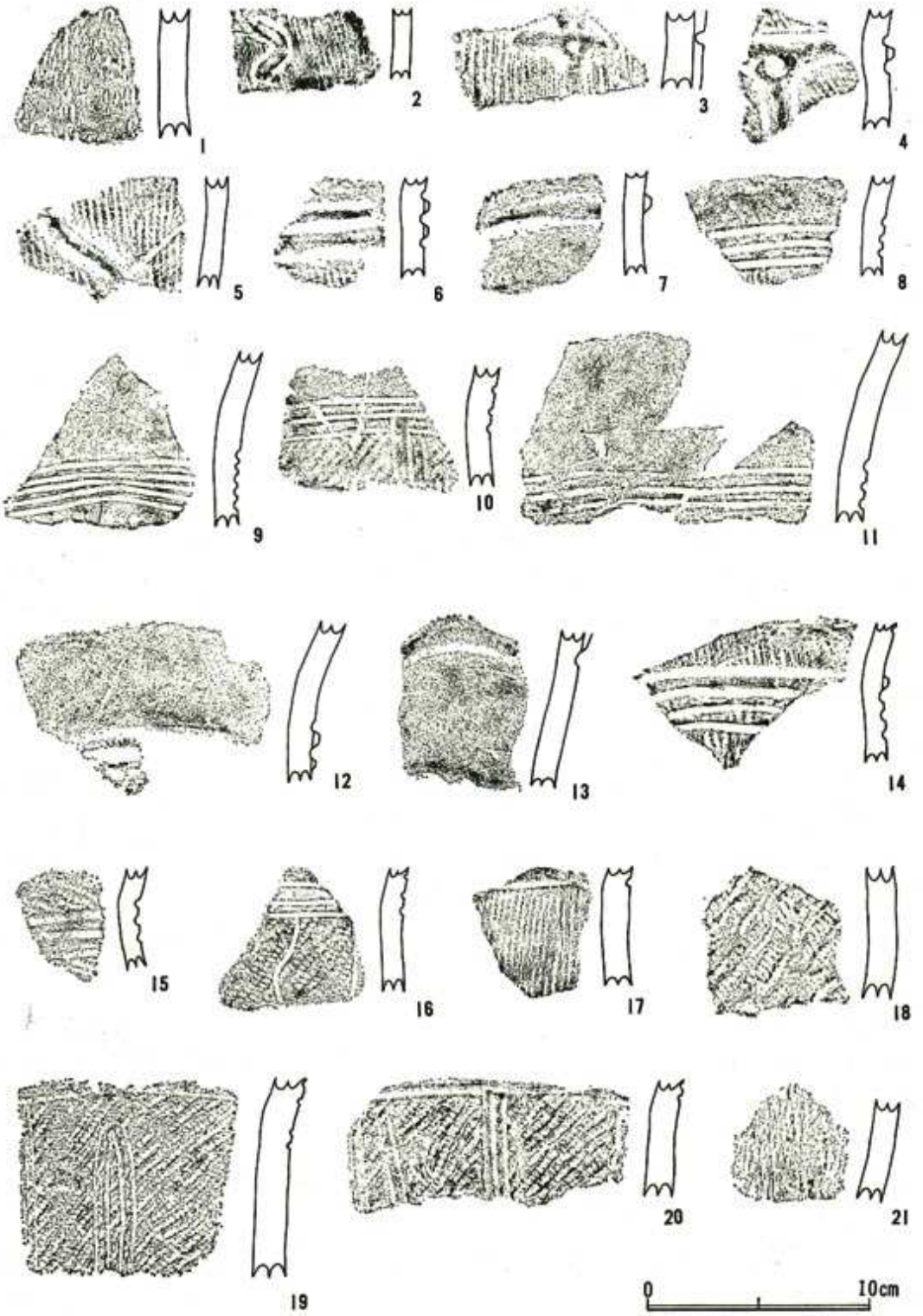
12は、撚糸文Lを縦位に施文した後、隆帯により区画文を描く。頸部無文帯は無い。13～15は、



第18図　出土土器拓影図(6)



第19図　出土土器拓影図(7)



第20図 出土土器拓影図(8)

区画内を沈線により充填する土器である。14は、口縁部文様帯が段構成を取り、上段には沈線文を、下段には棒状の隆帯を、貼付している。下段が頸部に相当する可能性もある。

15は、2本隆帯により文様が描かれ、隆帯が延びて突起を作り出している。突起下に渦巻文が配され、区画内には鋭い斜めの沈線を充填する。胎土、焼成とも良好で、色調は暗褐色を呈する。16は14に類似する頸部破片である。

19図1～16は、加曾利E Ⅰ式後半～加曾利E Ⅱ式前半に比定される。

20図は、加曾利E Ⅰ式に比定される頸部及び、胴部破片である。9～13は無文帯幅が広い頸部である。

21図は、加曾利E Ⅰ式後半～加曾利E Ⅱ式前半に比定される胴部破片である。9～15の2本懸垂文間は磨消し状になっている。

第5群土器（第22図、第8図4）

加曾利E Ⅱ式に比定される土器である。

22図1～12は連弧文系の土器である。1は、地文にLの撚糸文を、口縁部は横位に、頸部以下は縦位に施文する。文様は2本沈線により描かれ、弧頂部の下線は若干渦を巻いている。3は、地文に条線を施文し、3本沈線により文様を描く。やや開き気味の口縁部である。

3は地文が条線で3本沈線による文様である。4は地文に撚糸文を持つ。5も地文に撚糸文を持ち、口縁部は横位に施文する。3本沈線である。6は地文が条線で、3本沈線により文様を描く。

7は地文にRの撚糸文を持ち、2本沈線により文様を描く。8は地文に縄文を施文し、3本沈線により文様を描いている。1～8は胎土に小砂利を含み器面が粗く、いずれも似た様相を持っている。

9～11は、地文に条線を施文し、口縁下に2又は3本沈線を巡らした口縁部破片である。口縁の作りが連弧文土器と類似する。12は地文に撚糸文を持っている。

13は、キャリパー形が退化した口縁部破片である。扁平化した隆帯により区画文と独立した渦巻文が描かれる。渦巻文の所は口縁が突出し、波状になる。区画内には原体R$<^{L}_{L}$の縄文を施文している。14～22は、沈線による懸垂文間が磨消される胴部破片である。14～19は磨消縄文、20～22は条線の土器である。

23～27は、櫛状工具により条線が施文された胴部破片である。

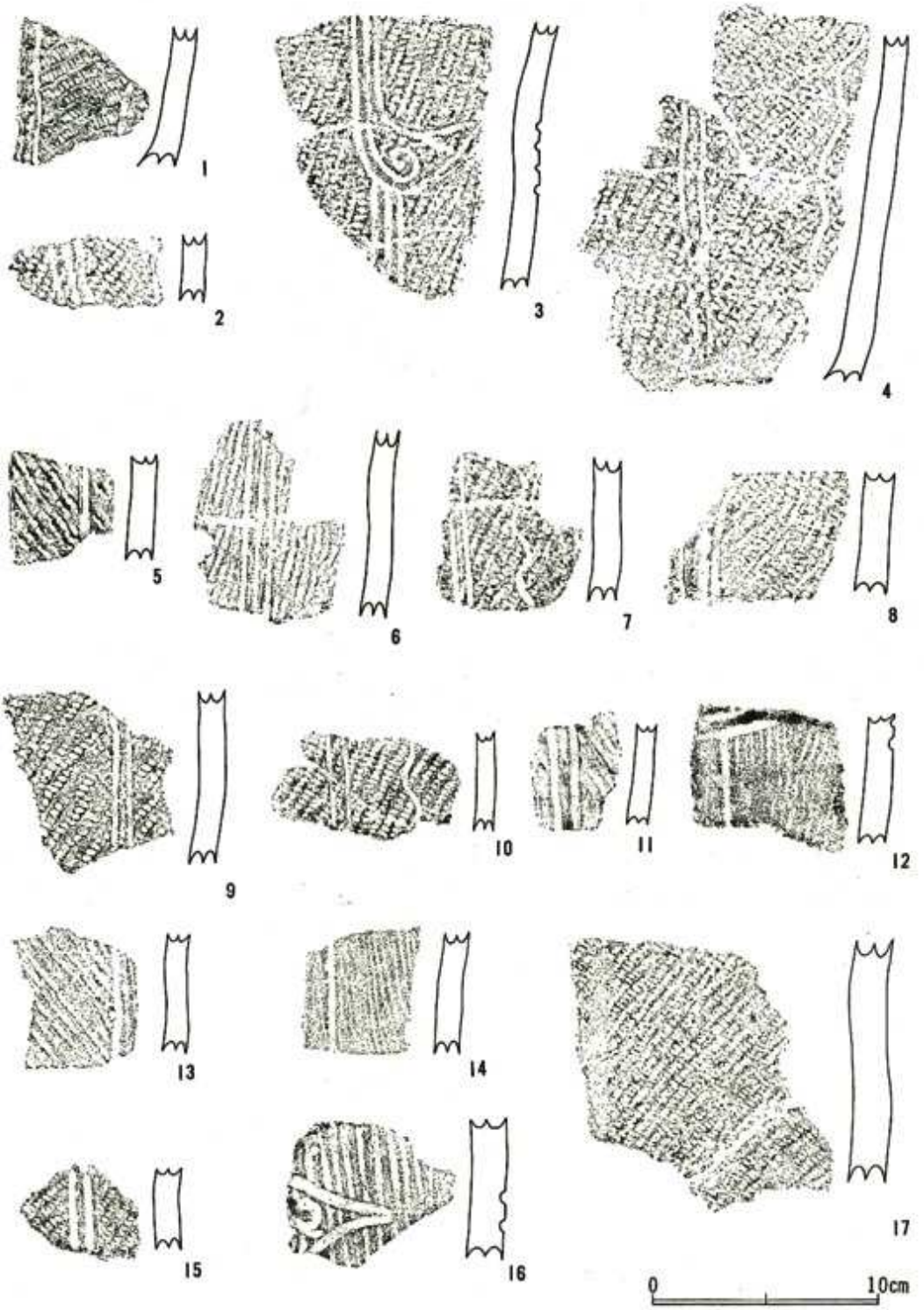
第8図4は半截竹管文により条線を施文した土器である。約¼残存し、口径は21.4cmである。胎土に小砂利を含み、焼成が悪く極めて脆い。

22図1～8は加曾利E Ⅱ式前半、9～27は加曾利E Ⅱ式後半に比定される。

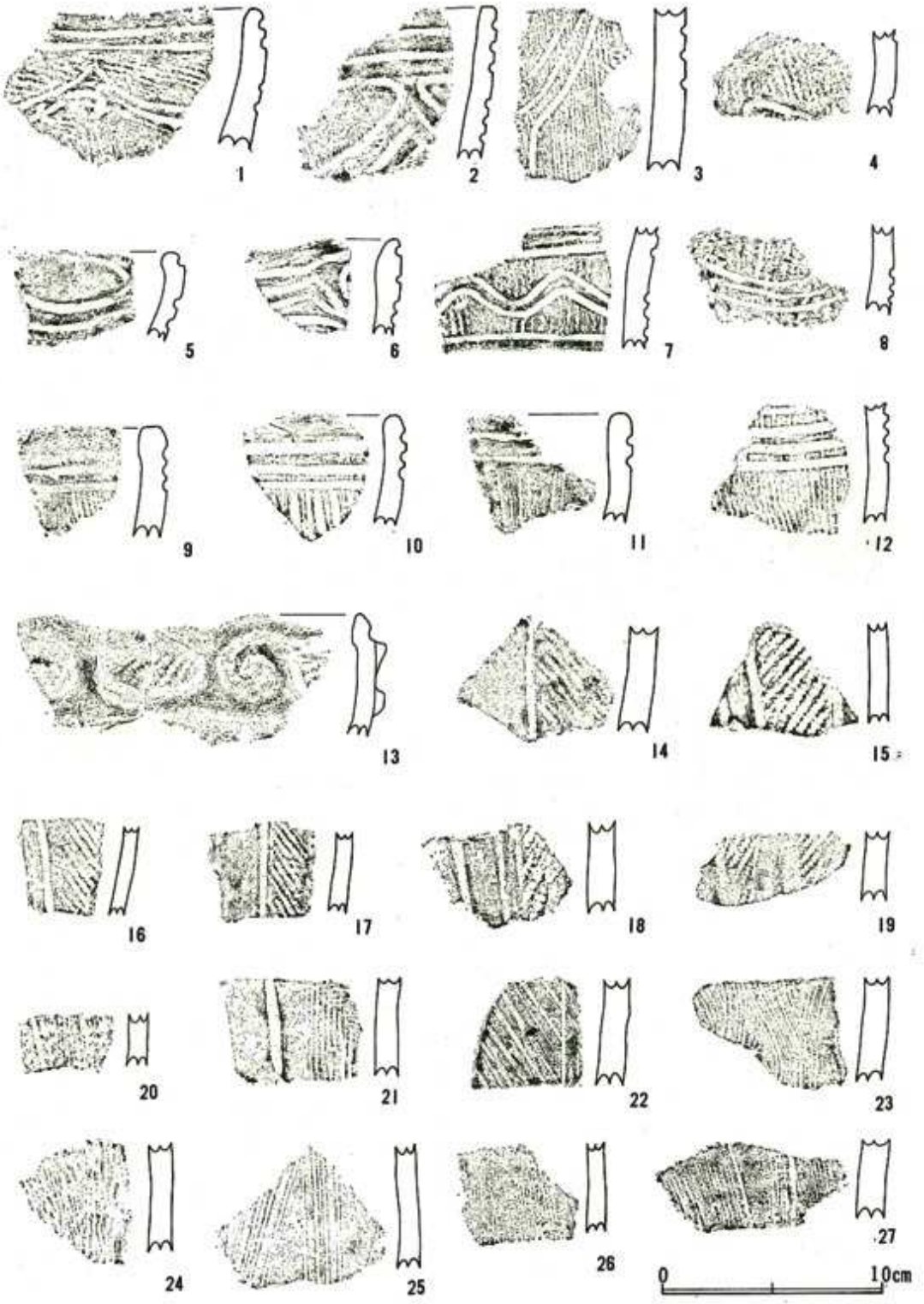
第6群土器（第23図、第24図1～8）

曾利式に比定される土器である。

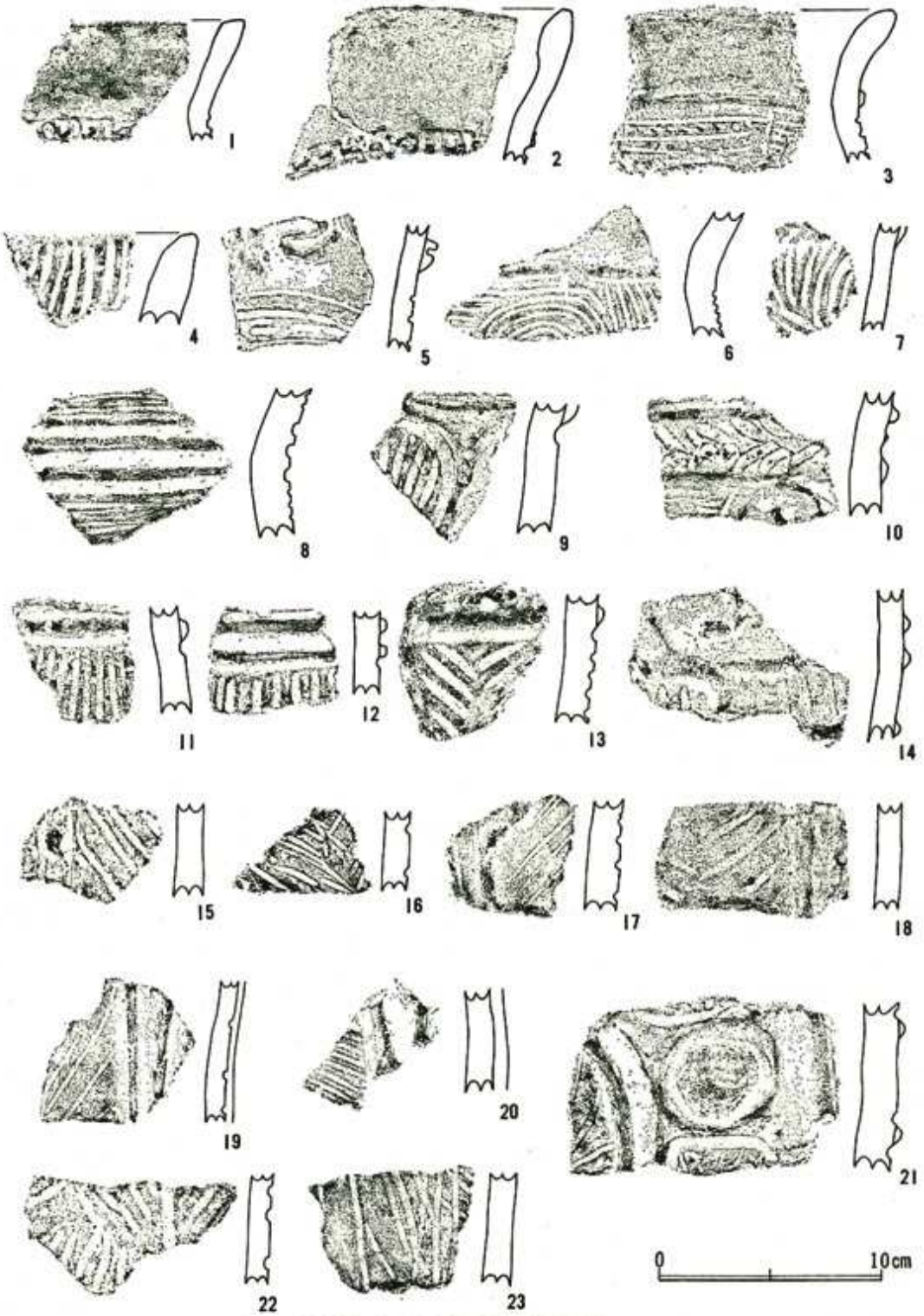
23図1～3は、幅広い無文の口縁部が外反する深鉢形土器である。1、2は頸部に交互の刺突文、3は隆帯、沈線、連続刺突文を巡らしている。6は、口縁部が無文で、頸部に1本隆帯を巡らし、胴部には、沈線により渦巻文を描いている。1～3、6は胎土に小砂利を含むが焼成が良く、堅緻な土器である。色調は黒褐色を呈する。



第21図 出土土器拓影図(9)



第22図 出土土器拓影図(1)



第23図 出土土器拓影図(1)

4は、重弧文土器の口縁部破片である。やや厚手の土器であり、太い沈線により文様が描かれる。5は、口縁部無文帯に2本隆帯により渦巻文を貼付し、頸部は沈線と刺突文を巡らしている。7は頸部に隆帯を貼付し、胴部に沈線による渦巻文を施文している。4～7の色調は黒褐色である。

8～14は頸部から胴部付近の破片である。8は2条の太い沈線を頸部に巡らし、上下には条線を施文する。9～14は隆帯により区画文を描き、区画内や胴部に、太い沈線文を施文する。10、13はハの字文、9は区画内の充填、11、12、14は縦走施文である。8～14は器厚1㎝と厚手の土器で、胎土が砂質の為に器面が粗い。

15、17～21は隆帯による懸垂文を持ち、その間に斜行沈線を充填する胴部破片である。18は、ハの字文を構成する。21は、胴部全体に隆帯による渦巻文を展開すると思われる。器厚1.2㎝と厚手の土器である。色調は、15～20は褐色21は、黒褐色を呈する。

16、22、23は沈線による懸垂文を持ち、その間に斜行又はハの字状の沈線文を施文している。22、23は、2本の懸垂文間に磨消し部を持っている。色調は褐色を呈する。

23図1～14は曾利Ⅱ式～Ⅲ式に、15～24は曾利Ⅲ～Ⅴ式に比定される。

24図1、5は隆帯による懸垂文を持ち、その間を沈線により充填する。1はハの字文、5は浅い沈線文を縦走している。2は太い沈線により文様が描かれる。3、4、6～8は条線文の上に、沈線により曲線的な文様を施文する。1～8は胎土が砂質で器面が粗い。色調は、2が黒褐色、他は褐色を呈している。

24図1～8は、曾利Ⅳ～Ⅴ式に比定される。

第7群土器（第24図9～22、第25図）

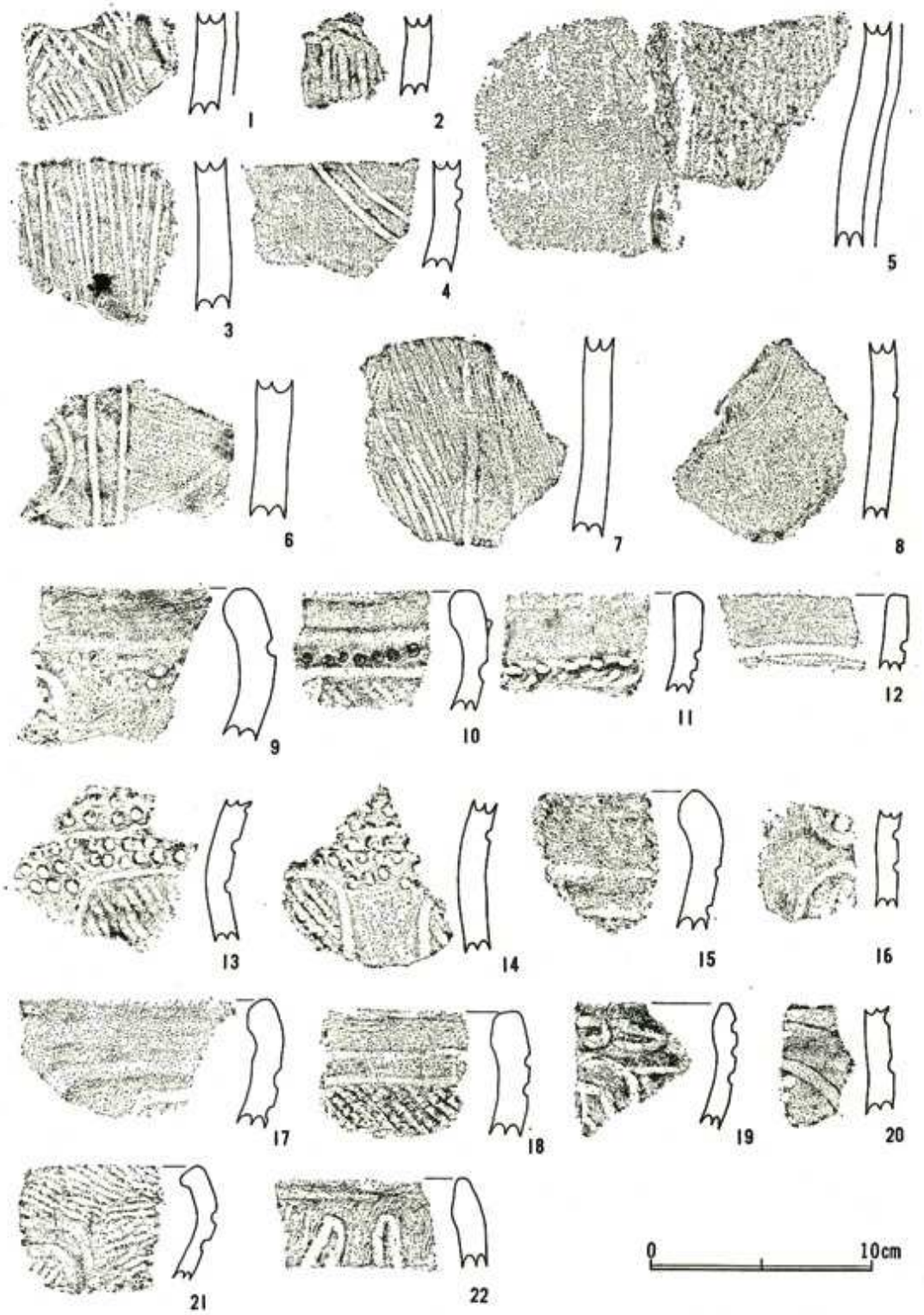
加曾利EⅢ式及び加曾利EⅣ式に比定される土器である。

9～12は無文の口縁部が沈線又は隆帯により区切られ、胴部には上端が連結した区画文が描かれる。9は沈線下の磨消し部に2条の円形刺突文を施文する。区画内には縄文が施文される。10は、断面三角形の微隆起線文と、沈線文の間に1条の円形刺突文を施文している。沈線下には、原体$L<^{R}_{R}$の縄文を縦位施文する。11は、沈線内に斜めの刺突文を施文している。9～11は胎土が砂質で器面が粗い。12は、器面が丁寧に磨かれている。色調は、9、12が黒褐色、10、11は褐色を呈する。

13、14は頸部付近の破片である。磨消し部に円形刺突文を施文している。区画内の縄文は、原体$L<^{R}_{R}$の縦位施文である。色調は黒褐色を呈する。

15、17～19、21、22は2本沈線により磨消し部を持つ区画文を描く土器である。15、17、18は幅広な口縁部無文帯を持つ。18の縄文は原体$L<^{R}_{R}$の縦位施文である。19は口縁下に沈線による曲線文が描かれている。21は、口縁に沿って原体$R<^{L}_{L}$の縄文を横位に2段施文し、その下の本来磨消し部である場所にも、横位から斜位に縄文を充填している。一方区画内は縦位施文である。22は、地文に、条線文を持っている。いずれも、胎土が砂質で器面は粗い。色調は19が黒褐色、他は褐色を呈する。

16、20は懸垂文が連結して区画文を描いた胴部破片である。16は、器厚1㎝と厚手の土器で、画



第24図　出土土器拓影図(2)

区内は原体R$<^{L}_{L}$の縄文を縦位に施文している。色調は、16が赤褐色、20は褐色を呈する。

24図9～23は加曽利E Ⅲ式に比定される

25図1は、口縁に沿って原体L$<^{R}_{R}$の縄文を1段横位に、その下は縦位に施文している。懸垂文の上端が連結した区画文の一部が残存し、区画内は磨消し部である。2は、1条の沈線によって無文の口縁部を作り、以下、全面に原体L$<^{R}_{R}$の縄文を施文する。施文方向は、沈線下に1段横位その下は縦位又は斜位である。1、2は若干薄手の土器で、色調は1が黒褐色、2は褐色を呈する。

3、4は、口縁下に1条の隆帯を巡らしている。3は隆帯に沿ってナゾられ沈線下している。4は無文の口縁部に断面三角形の隆帯を貼付している。3、4とも赤味を帯びた褐色を呈する。

5、6は羽状縄文の土器である。いずれも、原体L$<^{R}_{R}$とR$<^{L}_{L}$の2種の縄文を縦位に施文する事によって作っている。6は隆帯による懸垂文を持つ。5は、黒褐色、6は褐色を呈する。

7～13、15は扁平な隆帯により曲線的な区画文が描かれ、区画内に縄文を持つ胴部破片である。隆帯に沿つて沈線がナゾられ、隆帯を一層扁平化している。区画内には節の大きな粗い縄文が施文される。15は原体L$<^{R}_{R}$の縄文を横位及び斜位に充填施文している。7～13、15、16の土器は、充填縄文が多いと思われる。いずれも器厚1㎝以上の厚手の土器で、胎土に小砂利を含み器面は粗雑である。色調は褐色を呈している。

14は、2本の微隆起線文により渦巻文が描かれている。微隆起の間は丁寧にナゾられている。色調は褐色を呈する。17は、磨消し部が発達し、隆帯が微隆起状になった土器である。

18は、小突起を持つ口縁部破片である。口縁に沿って、無文帯を作る沈線が1条巡る。器面は丁寧に磨かれている。色調は黒味を帯びた褐色を呈する。

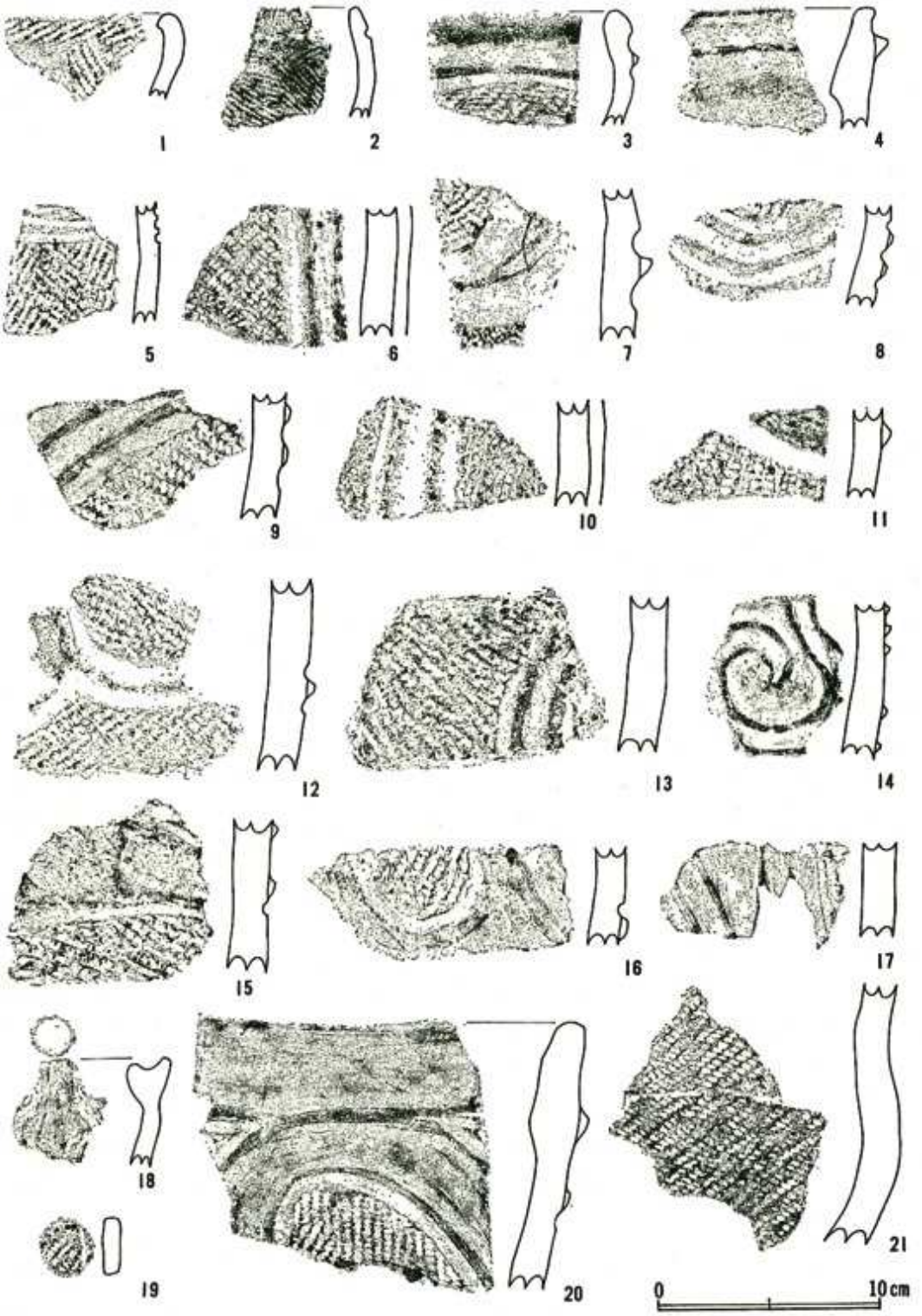
20は、若干外反する口縁部である。1本の隆帯を巡らして口縁部無文帯を作っている。胴部文様は2本の隆帯により大きな渦巻文を描く。隆帯間は丁寧にナゾりが加えられ、外側には隆帯に沿って沈線が巡っている。区画内は、原体R$<^{L}_{L}$の縄文により充填している。器厚約1.2㎝の厚手の土器である。胎土、焼成とも良好で、色調は黒味を帯びた褐色を呈する。

21は、胴部が若干ふくらむ壺形になると思われる。器面全面に原体R$<^{L}_{L}$の縄文を縦位に施文している。器厚1.2㎝と厚手の土器である。色調は褐色を呈する。

25図1～18は加曽利E Ⅲ式、20、21は加曽利E Ⅳ式に比定されよう。　　（宮崎朝雄）

2 土 製 品（第25図19）

小形の土製円版が1点出土している。径2.5㎝の円形を呈し、器厚は8㎜である。周囲は丁寧に磨られている。加曽利E Ⅰ式後半の土器の胴部破片を利用したものである。　　（宮崎朝雄）



第25図 出土土器拓影図(3)

3 石　　器

本遺跡からは、欠損品も含めて、120点の出土があった。いずれも遺構内の出土はなく、土器と伴に、遺物包含層である窪地に投棄されたものと推定される。ここでは、石器を8型態に分類し記述する。尚、石材計測等は一覧表に掲載してあり本文中では割愛した。

打製石斧

本遺跡出土石器の主体を占め、総数67点出土した。形態から短冊、撥、分銅形に分類し、自然面付着の状態により、Ⅰ類—片面にあるもの、Ⅱ類—両面にあるもの、Ⅲ類—ないもの、に分類し更にa—肉厚のもの、b—扁平なもの、に細分した。

短冊形（第26図1～第28図42）

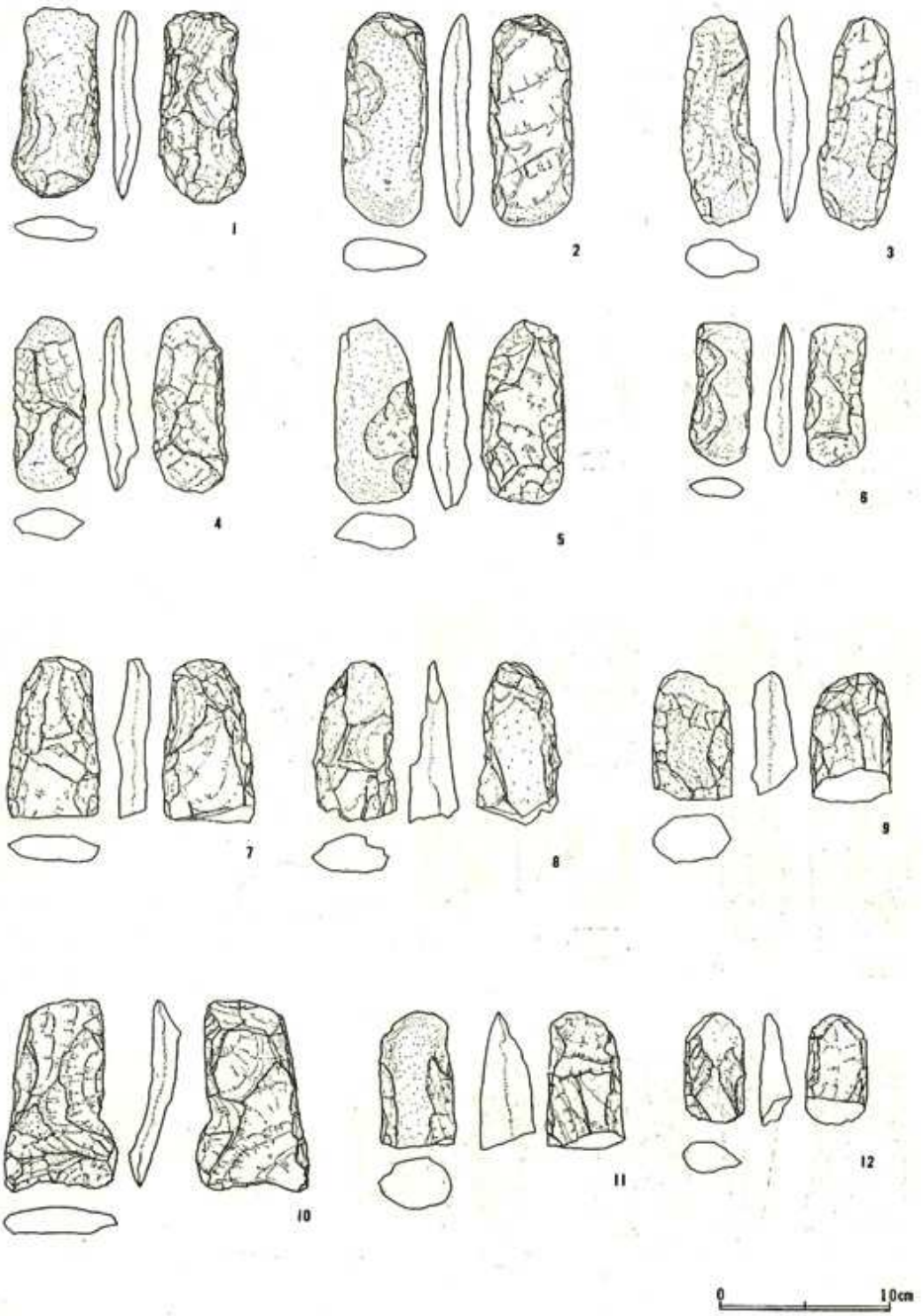
総数42点、うち完形品1点であり、石斧群中の主体を占める

Ⅰ類a（第26図3～5、8、9´11～12、第27図15、20、24～27、第28図30～31、33～38、40～42）

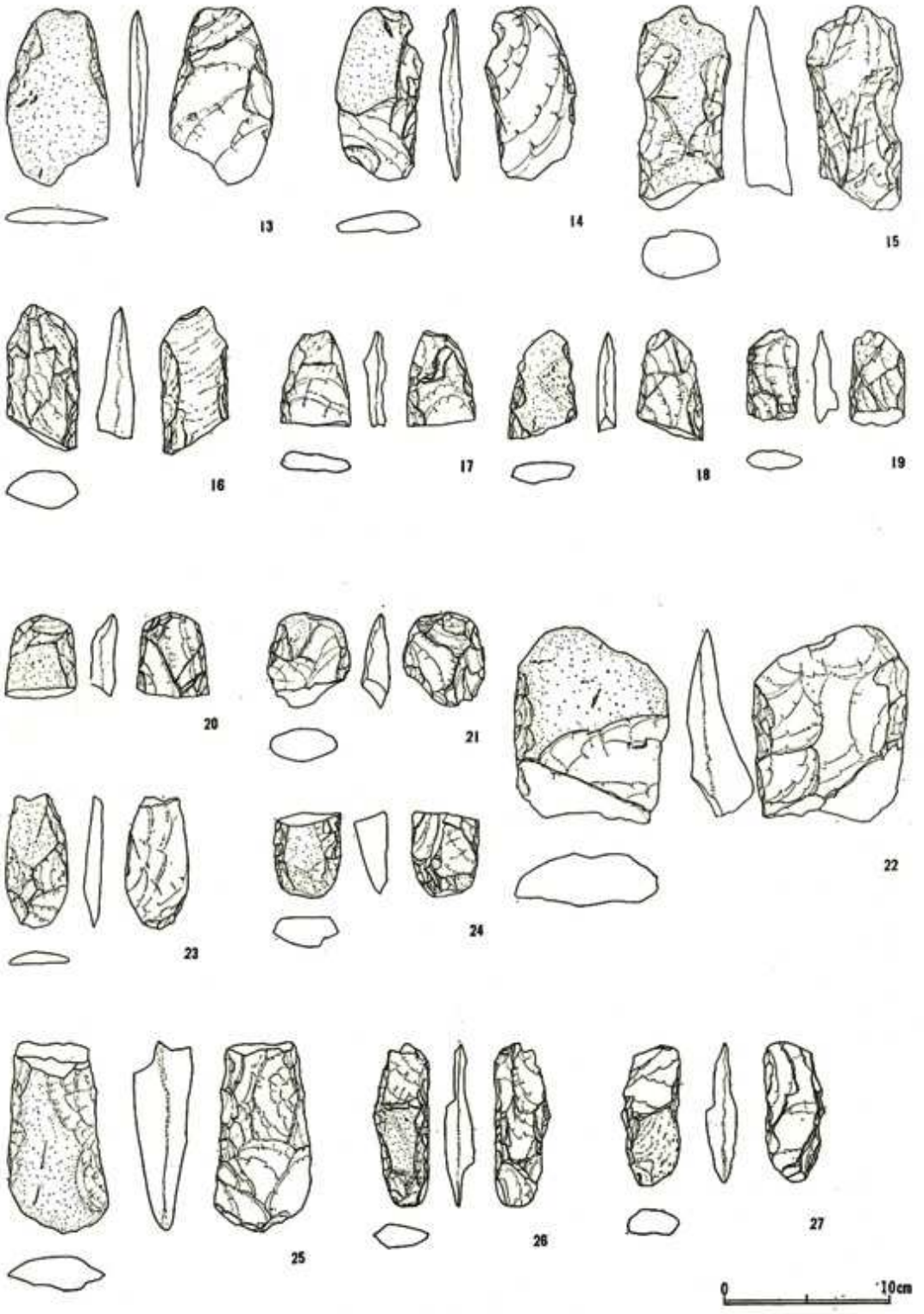
3は表裏に大きく剥離を加え、両側縁に粗い細部加工を施している。刃部は粗い剥離を裏面に加えることによって作出しており、磨耗が著るしい。4は基端、刃部に自然面を残し、表裏面共左右から浅く剥離を加え、裏面片縁に細かい細部加工が施されている。5は主剥離面を大きく残し、細部加工は裏面に集中している。4、5とも刃部は裏面を粗く剥離することにより作出している。8～9、10～11は横断面が楕円形を呈する。表裏面に左右から大きく剥離し、両側縁に細部加工を加えている。8は側縁が円みを帯びている。共に側縁には敲打痕が著るしい。15は片縁中位に抉り込みをもつ、粗いつくりで側縁には敲打痕が著るしい。25は刃部を左右2回の剥離により作出し、円味を帯びている。表面には自然面を大きく残し、両側縁に敲打痕が著るしい。26は中央部に自然面を残し、表裏とも大きく剥離した後、両側縁に丁寧な細部加工を加えている。21、24、25は刃部の磨耗が強く、線状痕が観察される。22は欠損部に若干磨耗が認められ、再利用が考えられる。27は風化が著るしい。31は刃部が若干磨耗している。32は両側縁に粗い剥離を施しただけであり、刃部は左右2回の剥離により作出している。風化が著るしい。33は刃部に自然面を残し、裏面に若干細部加工を加えている。34は主剥離面を大きく残し、側縁に粗く細部加工を加えている。刃部には敲打痕が著るしく、磨耗している。35は急角度の大きな剥離で整形しただけであり、側部には敲打痕が著るしい。

Ⅰ類b（第26図1、2、7、10、第27図13、14、17～18、20～23、第28図は28～30）

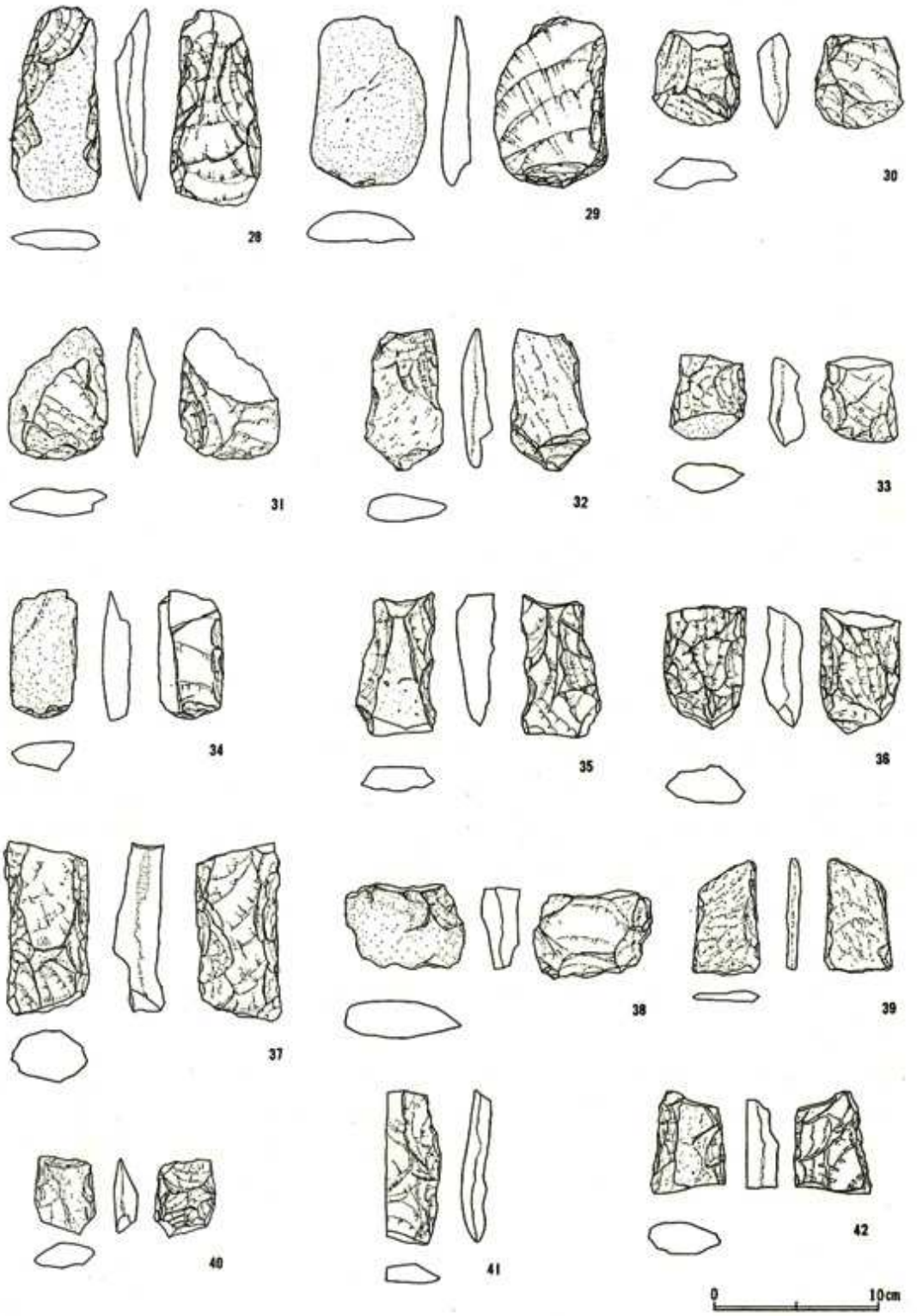
1、3は自然面を大きく残す。1は裏面に左右から大きく剥離を加え、両縁部に丁寧な細部加工を施している。2は主剥離面を大きく残し、両側部に粗く細部加工を加えている。1は刃部を表離に丁寧な剥離により、2は自然面、主剥離面をそのまま利用して作出している。ともに磨耗が著るしい。7は表裏に左右から大きく剥離し、両側縁を丹念に細部加工している。自然面は部分的に残されている。13、14は横長剥片の縁辺に粗く細部加工を施しただけで、横刃形石器の可能性がある。17、18はともに基部中位から欠損、23は刃部近くに左右から剥離が加えられ、主剥離面を大きく残す。28は基端部の欠損、表裏面に粗い細部加工が加えられ、雑なつくりである。29は剥片の片



第26図　出土石器実測図 (1)



第27図　出土石器実測図(2)



第28図 出土石器実測図(3)

縁、刃部に細かい細部加工が施され、自然面、主剥離面を大きく残す。

Ⅱ類（第26図6）

扁平な河原石を大きく剥離し、形次を整えている。側縁の細部加工は片面に集中する。やや小形で、刃部は磨耗が著るしい。

Ⅲ類（第26図10、第28図36～37）

10は基端、刃部とも鋭角をなし、両面に左右から浅く大きな剥離が加えられている。側縁には片縁に丁寧な細部加工が加えられており、敲打痕等は認められない。所謂トランシェ様石器に類似している。36、37とも肉厚で、断面形が菱形、乃至は楕円形を呈する。37は主剥離面を大きく残す。両面とも比較的丁寧なつくりである。37は片縁に敲打痕が集中する。

その他（第28図39）

緑泥片岩の扁平な剥片の両側縁に細部加工を加えただけの簡素なつくりで、基部。刃部とも欠損している。

撥形（第29図～第30図66）

総数38点、うち完形は5点である。

Ⅰ類a（第29図43～46、54、第30図60）

43は表裏とも左右から大きく剥離され更に両側縁に入念な細部加工が施されている。表面刃部付近は磨かれている。44は両側縁に細かな細部加工が加えられている。43は片縁に敲打痕が集中し44は両側縁にみられる。46、54は風化が著るしいは、60は中央～刃部にかけての残在である。左右より大きな剥離が加えられただけの雑なつくりである。横片面形は菱形を呈する部厚いつくりである。

Ⅰ類b（第29図47、50～52、第30図56～59、61～63、65～66）

47は両側縁に丁寧な剥離が加えられ、主剥離面を大きく残す。刃部は磨耗が強く、線状痕が観察される。50は表面に研磨が加えられており入念なつくりである。51は側縁に粗い剥離が加えられただけで、雑なつくりである。56は基端部の欠損、刃部磨耗が著るしく、主剥離面が一部消失している。57は主剥離面を大きく残し、側縁に細かい細部加工が施されている。刃部磨耗が著るしく線状痕が見られる。敲打痕は片縁に集中する。58、62は剥片に粗く細部加工しただけである。59は基端、刃部の欠損、風化が著るしい。63、65～66は共に両側縁に丁寧な細部加工を加え、自然面、主剥離面を大きく残す。

Ⅱ類（第29図48、49、53、55）

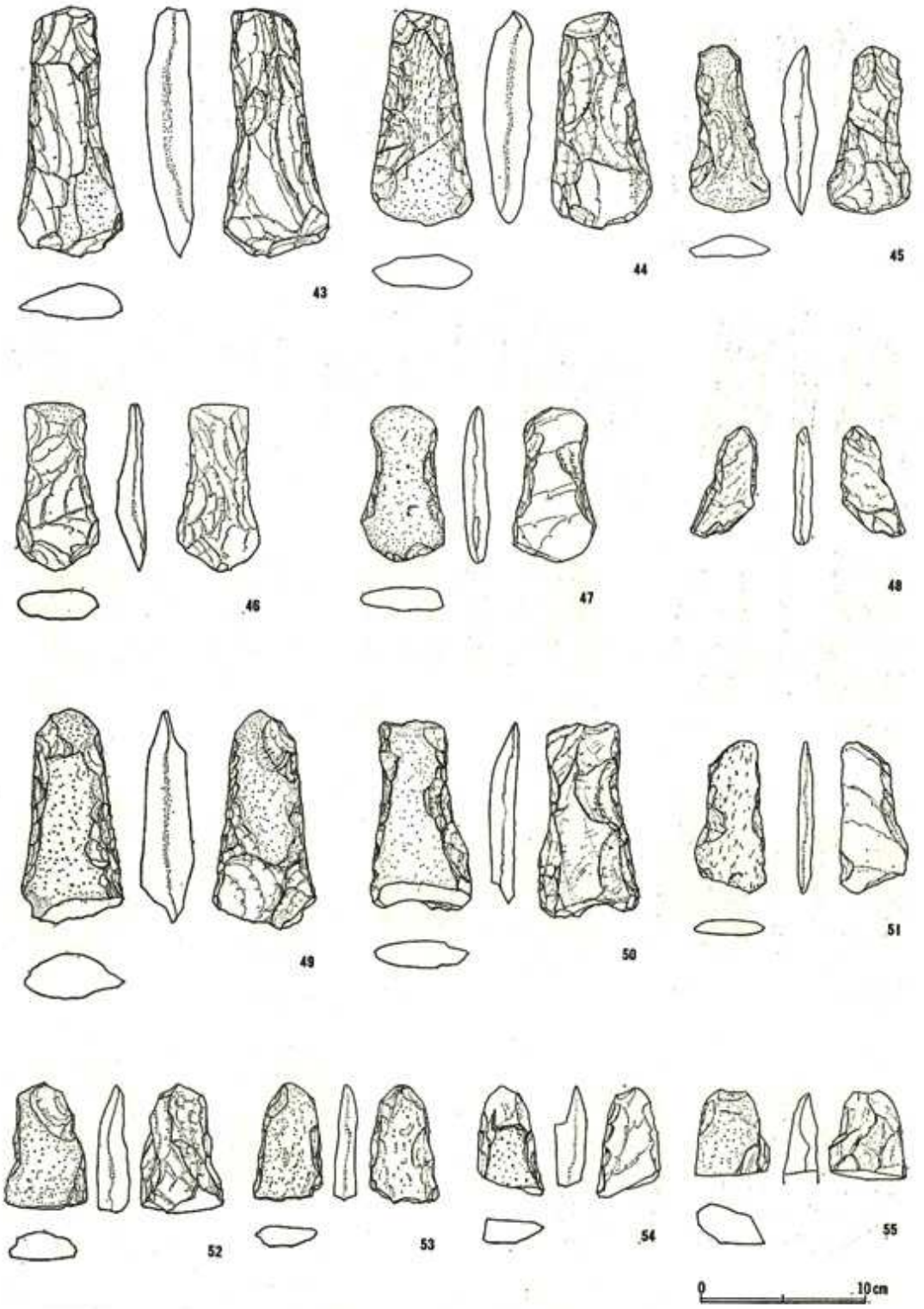
49は原石の両側縁に入念な剥離を施すことによって形状を整えている。敲打痕が著るしい。刃部が欠損している。48、53、55は中央以下欠損、48、49は扁平な原石両側縁に細かい細部加工を施している。55は基端両面に自然面が残る。雑なつくりである。48、53はⅠ類aに、49、55はⅠ類dに該当しよう。

Ⅲ類（第30図64）

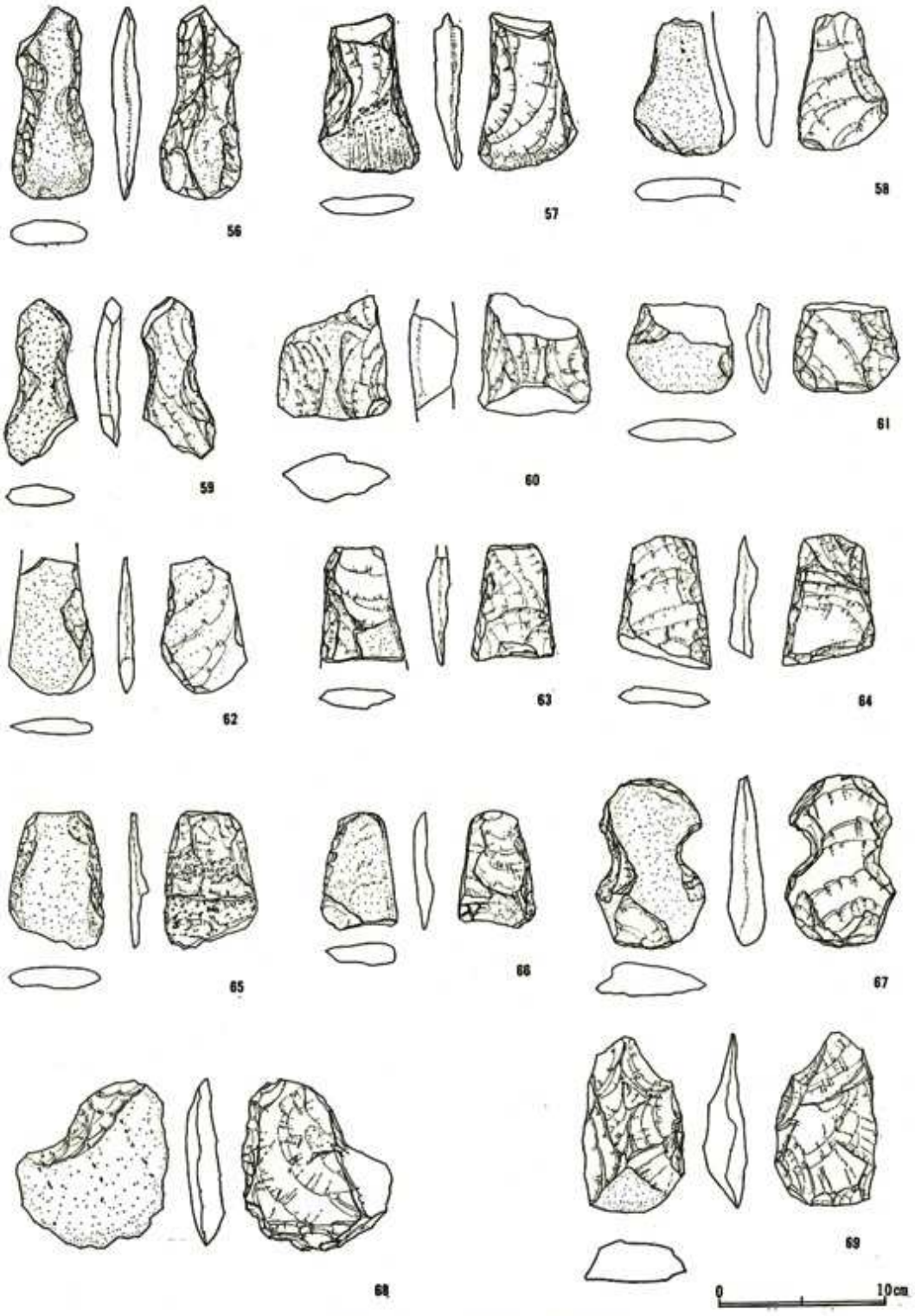
扁平な剥片に丁寧な細部加工を加えており、主剥離面は大きく残されている。

分銅形（第30図67）

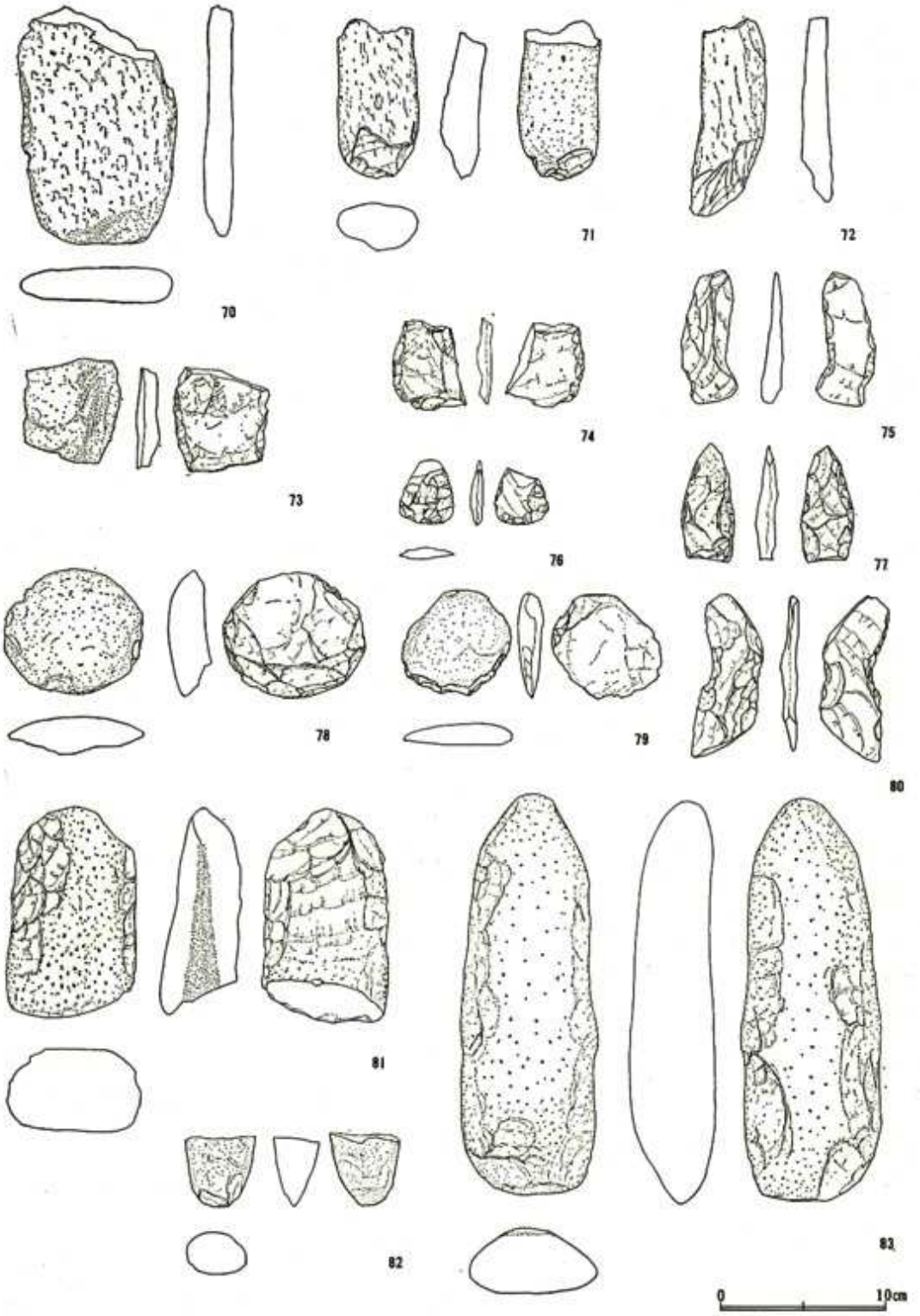
1点のみ出された。主剥離面、自然面を残し、両側縁に粗い剥離を加え、更に、細かい剥離を粗



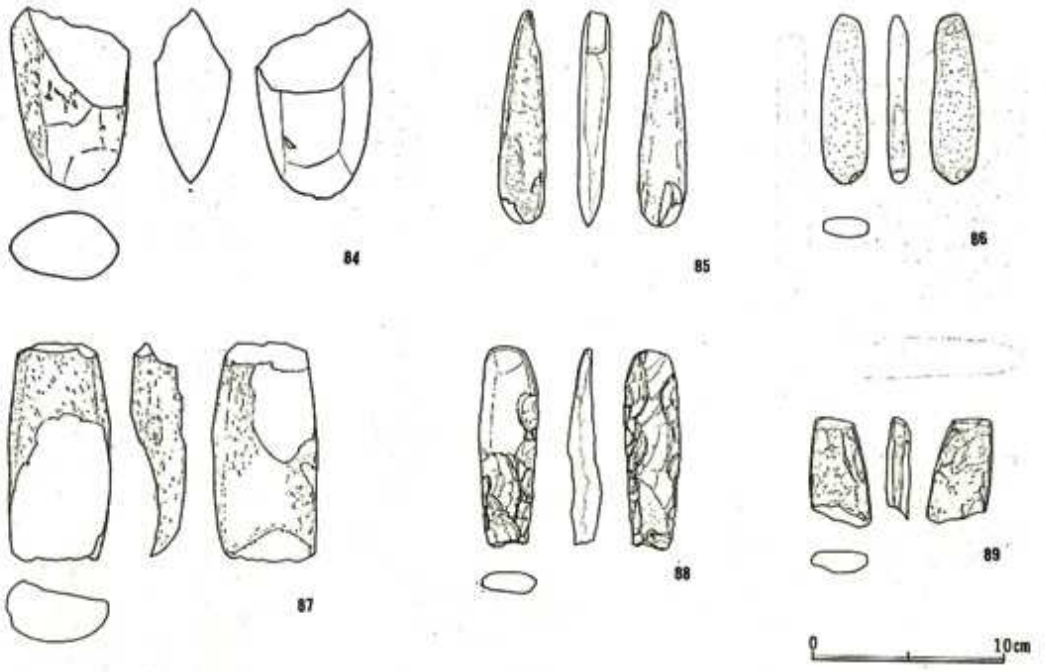
第29図 出土石器実測図(4)



第30図　出土石器実測図(5)



第31図　出土石器実測図(6)



第32図　出土石器実測図(7)

く施すことにより抉入部を作出している。刃部は磨耗が著るしい。抉入部に沿って著るしい敲打痕が観察される。完形品。

磨製石斧（第30図81～83、第31図84～89）

Ⅰ類（第31図81～83）

表面に剥離痕が著るしく、研磨のすすんでいないものを本類とした。81は両面に剥離痕が著るしく、敲打が粗く加えられており、研磨されていない。欠損部に磨耗が認められ、再利用されたものと思われる。断面三角形状を呈する。82は刃部のみ残存、浅く剥離痕がみられ、粗く敲打されている。断面楕円形を呈する。83は両側縁に剥離痕、敲打痕が著るしい。器面は両面とも研磨されており断面隅丸方形を呈する。81は未成品、82、83は刃部に磨耗痕があり完成品と思われる。

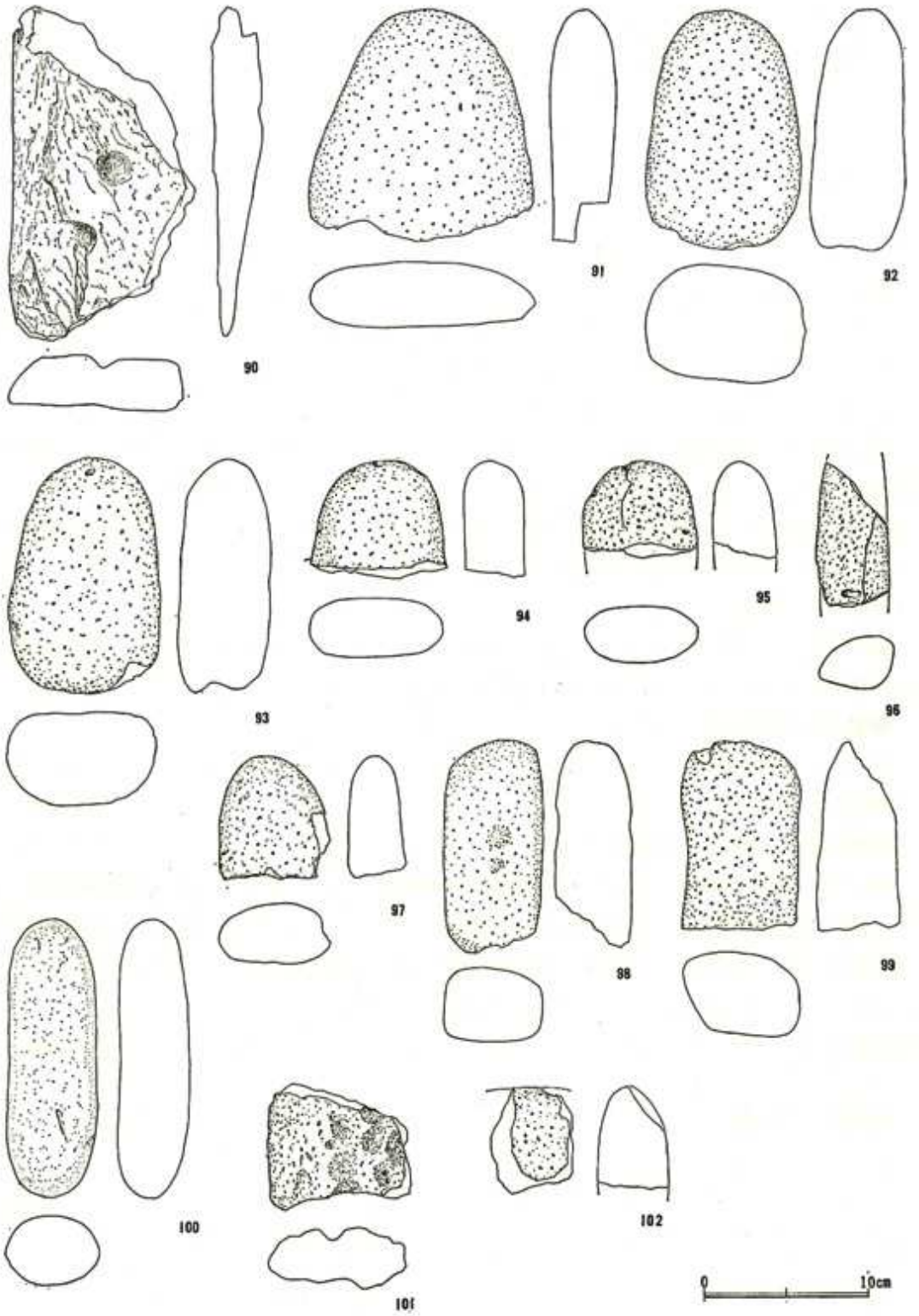
Ⅱ類（第32図84～85、87）

形状はⅠ類に同じだが、研磨が入念に施されているものを本類にした。84は刃部のみの残存、87は刃部、基部の欠損品である。85はわずかに剥離痕が残っているが、全体的に研磨されている。断面形は84、87が楕円形、85が三角形状を呈する。

Ⅲ類（第32図86、88～89）

断面が扁平な形状をもつものを本類にした。88は基部が入念に研磨された他は、両面とも剥離痕が大きく残されている。両側縁に敲打痕がみられ再利用と思われる。89は刃部欠損、剥離痕が認められるが、全体に丁寧に研痕されている。86は原石側縁に研磨を加え、形状を整えたもので、一般的な磨製石斧とは認め難い。

Ⅰ・Ⅱ類は乳棒状、Ⅲ類は定角式に比定される。



第33図 出土石器実測図(8)

掻器（第30図68、第31図76、78～79）

剥片の一部に刃部加工を施したものをまとめた。

Ⅰ類（第30図68、第31図78、79）

いずれも自然面をもつ円形状の剥片の一部に、粗い調整剥離を加えている。主剥離面は3例とも大きく残されている。78は丁寧なつくりである。79は、縁辺に急角度の剥離を施し、刃部としている。

Ⅱ類（第31図76）

平面形は二等辺三角形状を呈する。薄手の剥片に丁寧な調整剥離を加えている。先端部に細かな剥離を加え、刃部を作出したものと思われる。

削器（第31図73～75）

刃部が側縁につけられたものをまとめた。ともに側縁に丁寧な剥離を連続して加えている。74は自然面をもつ扁平な剥片を利用。73、75は中央部に稜をもつ、石刃状剥片の利用である。

その他の剥片石器（第32図77、80）

77は先端部に一部自然面を残し、両面とも左右からの大きな剥離の後、側縁に細かく入念な細部加工が加えられており、一部に磨耗が認められる。尖頭石器に相当しよう。80は横長剥片の中央部両側縁に調整を加え、ゆるやかな抉入部を作出している。丁寧なつくりである。両端に自然面を残す。80は横刃形石器との関連が考えられており、除草具とする説もある。

敲石（第32図70）

扁平な礫の先端部に敲打痕が認められ、一部磨耗している。両側縁には小さなノッチがみられ、何れも磨かれていることから、研磨具としての使用も考えられる。

礫器（第32図71～72）

何れも、河原石の先端部を粗く剥離しただけのもので、71は両刃、72は片刃である。72は全体的に風化している。

石皿、磨石、凹石（第33図90～102）

90、101は両面に複数の凹みをもち、90は縁辺が磨かれている。表面に磨耗痕は認められない。91～100、102は磨石である。91～95、97は長楕円形を呈する。何れも表面は磨かれており、91の断面は扁平である。96は断面三角形状、98、99は平面形態が長方形を呈し、縁辺部は全面に研磨が加えられている。98は両面に浅い凹みをもつ。100は部分的に磨れているのみだが、本類とした。102は小破片のため全体の形状は不明　　（細田　勝）

石器一覧表

番号	種別	出土地点	大きさ (cm)	厚さ (cm)	石質	備考
1	打製石斧	第Ⅲ層	11.0	1.4	ホルンフェルス	
2	（短冊形）		12.8	1.8	粗粒硬砂岩	
3			12.4	2.2	中粒硬砂岩	
4			10.2	1.8	粗粒硬砂岩	
5			10.8	2.0	ホルンフェルス	
6			8.4	1.0	細粒硬砂岩	

番号	種別	出土地点	大きさ (cm)	厚さ (cm)	石質	備考
7	(短冊形)	第Ⅲ層	9.4	1.4	ホルンフェルス	刃部欠
8			9.6	2.2	石墨片岩	
9			7.6	2.6	粗粒硬砂岩	
10			11.0	1.4	ホルンフェルス	
11			8.0	3.0	粗粒硬砂岩	刃部欠
12			6.4	1.8	中粒硬砂岩	
13			10.8	1.0	〃 〃	
14			10.6	1.2	粗粒硬砂岩	
15			12.6	3.0	細粒硬砂岩	
16			9.0	2.4	石墨片岩	
17			5.8	1.2	ホルンフェルス	
18			6.8	1.2	細粒硬砂岩	
19			5.4	1.4	中粒硬砂岩	
20			5.0	1.4	細粒硬砂岩	
21			5.8	2.0	ホルンフェルス	
22			11.8	4.0	中粒硬砂岩	
23			8.0	1.0	細粒硬砂岩	基部欠
24			4.4	1.8	ホルンフェルス	
25			13.4	2.6	中粒硬砂岩	
26			9.8	1.6	ホルンフェルス	
27			8.4	1.4	石墨片岩	
28			11.6	2.0	中粒硬砂岩	
29			9.8	2.2	緑泥片岩	
30			5.8	2.0	ホルンフェルス	
31			8.0	1.8	中粒硬砂岩	
32			8.6	1.6	ホルンフェルス	
33			10.2	3.0	中粒硬砂岩	
34			7.8	1.8	硬質頁岩	
35			8.8	2.4	ホルンフェルス	刃、基部欠
36			7.4	2.2	中粒硬砂岩	基部欠
37			5.4	2.0	ホルンフェルス	刃、基部欠
38			5.0	2.2	〃 〃	
39			7.0	0.6	緑泥片岩	
40			4.4	1.6	ホルンフェルス	
41			5.2	1.2	中粒硬砂岩	
42			6.2	1.0	ホルンフェルス	
43	(撥形)		15.0	2.6	〃 〃	
44			12.8	2.8	〃 〃	
45			10.2	2.2	中粒硬砂岩	
46			10.2	1.8	ホルンフェルス	
47			9.4	1.4	〃 〃	
48			7.2	1.0	千枚岩	刃部欠
49			12.8	3.2	中粒硬砂岩	
50			11.0	1.6	ホルンフェルス	
51			9.2	1.0	ホルンフェルス	
52			7.8	2.6	粗粒硬砂岩	
53			7.0	1.2	鄰緑凝灰岩	
54			6.0	2.0	中粒砂岩	

番号	種別	出土地点	大きさ (cm)	厚さ (cm)	石質	備考
55	(撥形)	第Ⅲ層	5.2	2.4	ホルンフェルス	刃部欠
56			11.6	1.4	中粒砂岩	基部欠
57			9.6	1.6	ホルンフェルス	
58			8.2	2.4	中粒硬砂岩	
59			10.0	1.4	ホルンフェルス	
60			7.4	3.0	〃 〃	刃、基部欠
61			5.4	1.4	中粒硬砂岩	基部欠
62			8.2	1.0	〃 〃	
63			6.8	1.4	砂質頁岩	刃部欠
64			8.0	1.2	中粒硬砂岩	
65			8.2	1.2	細粒硬砂岩	
66			7.2	1.4	ホルンフェルス	
67	(分銅形)		10.4	1.8	中粒砂岩	
68	掻器		10.2	2.0	中粒硬砂岩	欠損
69			10.4	2.6	ホルンフェルス	
70	敲打器		15.4	1.8	緑泥片岩	
71			9.8	2.2	〃	
72			12.0	1.8	千枚岩	
73	削器		5.0	0.8	チャート	
74			6.2	1.4	ホルンフェルス	
75			8.0	1.2	〃 〃	
76			3.2	0.8	チャート	欠損
77	尖頭石器		7.0	1.2	ホルンフェルス	
78	掻器		7.8	2.2	〃 〃	
79			6.4	1.2	〃 〃	
80	横刃形石器		10.0	1.0	〃 〃	
81	磨製石斧		13.0	4.4	輝緑岩	刃部欠損
82	(乳棒状)		4.2	2.4	粗粒砂岩	基部欠損
83			24.4	5.0	石英閃緑岩	
84			9.0	4.0	輝緑凝灰岩	基部欠損
85			11.2	1.4	〃 〃	
86	(定角式)		9.0	1.0	硬質頁岩	
87	(乳棒状)		11.4	2.8	蛇紋岩	刃、基部欠損
88	(定角式)		10.5	1.0	細粒硬砂岩	刃部欠損
89			5.8	1.0	砂質頁岩	
90	凹石		20.4	3.0	緑れん片岩	欠損
91	磨石		14.2	4.0	石英閃緑岩	
92			14.8	7.0	〃	
93			15.4	5.6	石英閃緑岩	
94			7.2	3.6	〃 〃	欠損
95			5.8	3.4	〃 〃	
96			8.8	3.6	〃 〃	
97			7.0	1.4	〃 〃	
98			13.0	4.6	〃 〃	
99			11.0	5.0	〃 〃	
100			17.0	4.0	中粒硬砂岩	
101	凹石、石皿		7.8	3.6	アルコーズ砂岩	欠損
102	磨石		6.4	4.4	石英閃緑岩	

Ⅵ 結　　語

1　遺物包含層（土器捨て場）について

本遺跡では、遺構内からは遺物が余り出土せず、遺構西側の緩斜面部第Ⅲ層中に、完形、大形破片を含む、土器、石器等が集中して出土した。性格上、これを土器捨て場と解釈し、ここではその性格について、若干の検討を試みたい。

いわゆる土器捨て場[1]については、可児通宏氏による平和台遺跡の調査事例から[2]、「住居址以外の特定地域から土器が纏って出土する」状態をもって平和台パターンとして提唱されたものであり、土器以外に、使用可能な石器等、日常生活用具をも含むのが一般的である。これらは、集落に隣接した特定地域に形成される場合が多い。調査事例が多いとは言えないが、下記の遺跡をもとに、その性格について考えてみたい。

居沢尾根遺跡[3]

井戸尻Ⅲ～曽利Ⅱ式期の集落である。土器捨て場は尾根北斜面に形成され、第Ⅱ層中から多量の完形、破片、石器等の遺物が出土し、土器は井戸尻Ⅲ式が主体を占めるとされている。石器群中、敲打器の占める割合が多いのも特徴であろう。井戸尻Ⅲ～曽利Ⅱ式にかけて、土器捨て場に選定場所の移動したことが報告されている。

荒神山遺跡[4]

「A区南側の段丘と大熊城址第Ⅵ之郭より落ち込む急斜面の裾、緩傾斜面に移る部分に位置する遺構」であり、第Ⅱ層中に、完形、半完形土器が集中的に出土し、時期は新道～曽利Ⅱ式期にわたると報告されている。東西径8ｍ、南北径10.5ｍの範囲である。

所沢市高峯遺跡[5]

台地西側急斜面部に完形土器を含む多量の遺物が集中して出土しており、時期的には五領ヶ台～勝坂式にわたるものと報告されている。

三口神平遺跡[6]

釈迦堂遺跡群に在り、扇状地に形成された集落である。大きく2箇所に分かれ、東、西側の住居址集中地域に1箇所ずつ土器捨て場が形成されている。正式報告はないが、土器の他、石器、土偶の出土例が多いとされている。

以上数遺跡の概要について若干触れてみたが、先に述べた如く、本来的には、完形土器以外に、破片、石器等日常生活用具等を多量に包含することが一般的であり、加えて、集落に隣接した特定範囲に集中的に投棄されるのが特徴である[7]。

小林達雄氏によるパターン論の提唱以来、その是否をめぐって、各氏の検討が加えられてきている。住居址第一次埋没土上に、「完形、大形破片を大量に投棄する」現象に対して、小林氏はシーズン制を考慮したが[8]、一方、第一次埋没土の形成に着目して、移動の所産によりなされたものとする見解が、末木　健[9]、石井　寛氏[10]によって呈示された。一方、山本暉久氏[11]は、両氏の説を批

判するなかで、第一次埋没土形成に関しては、人為説を主張し、一括遺存現象に関しては、宗教上の問題として理解された[63]。住居址内一括遺存現象に関しては、氏の集成に詳しい。一括投棄現象に関しては、その認定をめぐって判然としない部分が多く、1個体でも完形、乃至は大形破片が含まれれば本パターンとして認定し得るものであろうか、問題は現象面自体にあるのではなく、既に各氏の指摘する如く、第一次埋没土の形成までは、一括投棄がなされない点であり、かつ、集落内の一部の住居址に限られる点であろう。山本氏によれば、1住居址内に多量に出土する事例に関しては、「集落成員が当時使用していた生活財をも廃絶にあたつて投げ入れた」ものとされている。しかしながら、花積2A号住にも明らかな如く、土器群は僅少ながら時間差をもつと考えられ[63]、数時にわたる投棄も無視しえないように思われる。

また、第一時埋没土の形成に関しては、守氏の類型化に示される如く[64]、バラつきが顕著であり、一義的に埋め戻しとするには無理があるように思われる。住居廃絶に関して、全ての住居址に埋め戻しが行なわれたのか、あるいは、特定の住居に限りなされたのか、今後の検討を必要とするであろう。

一方、住居址内のセット資料の抽出が課題となろう。坂東山遺跡A地点16号住居址[65]では、床面に接して、浅鉢、甕形土器、台付土器等が倒置した状態で検出され、「住居址廃絶時に残されたと思われるほど良好な状態で遺存」していた。これを仮りに一時期の一セットとして認識し得るならば吹上パターン的一括遺存現象には、特定の器種を選択的に投棄し得る可能性も推定できるかもしれない[66]。

住居内への土器廃棄に関して大まかな概要を述べたが、土器捨て場との関連については不明な点が多いと言えよう。未だ報告例が少ないので明らかにし得ない点が多いが、先の居沢尾根例では、土器捨て場と住居址内一括遺存土器群とでは、型式差のあることが指摘され得るし[67]、荒神山例では長期間投棄されたことが明らかである。増善寺例では、主体が加曾利E Ⅰ式後葉であり、集落の継続期間、集落の規模を反映し得るものと思われるが、鈴木克彦氏の指摘される如く、遺跡の性格をも反映し得るものかもしれない[68]。

住居址内一括遺存現象が時期的には中期初頭～後葉に、空間的にも限定されており、対してより恒常的な廃棄の場として、土器捨て場の持つ意義は大きいものと思われる。

以上、増善寺遺跡の土器棄て場を考えるにあたって、遺跡における土器廃棄の在り方についていくつかの問題点を指摘した。今後、従来的な個々の類型化を踏まえて、土器棄て場の集落内における位置付けを考えていく必要があると思われる。　　（細田　勝）

註

(1) 土器集中区として扱われる場合が多い。
(2) 可児通宏・安孫子昭二「多摩ニュータウンNo.46遺跡の発掘調査」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ』多摩ニュータウン遺跡調査会　1969年
(3) 樋口昇一他『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その4—昭和51、52年度』　1981年
(4) 大沢和夫他『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その3—昭和49年度』　1975年
(5) 正式報告はない。概要は『埼玉県遺跡発掘調査報告会発表要旨』1981年に依った。
(6) 正式報告はない。概要は「縄文中期の集落をめぐって—山梨県東山梨郡勝沼町、東八代郡一宮町、釈迦堂遺跡群」『どるめん』第30号　1982年に依った。
(7) (6)文献によれば、他に、九兵衛尾根第3次調査、大石遺跡、十二ノ后、穴場遺跡等で確認されているとい

う。東京都では、西上遺跡B₂地点—和田　哲『西上遺跡』1975年　多摩市東寺方遺跡・永峯光一、桐生直彦『東京都調査研究発表要旨』1982年に類例がある。

(8)　小林達雄「縄文世界における土器の廃棄について」　国史学第93号　1974年

(9)　末木　健「縄文時代中期の土器廃棄について」　史陵5　1975年　「縄文時代中期土器廃棄の再検討」考古学ジャーナル№133　1977年

(10)　石井　寛「縄文時代における集団移動と地域組織」『調査研究集録第2冊』　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団　1977年

(11)　山本暉久「縄文中期における住居址内一括遺存土器群の性格」　神奈川考古第3号　1978年

(12)　同様な理解は、戸田哲也「縄文時代における宗教意識について」下総考古学4　1971年　桐原　健「床面浮上土器の取扱いについて」信濃第28巻8号　1976年　「土器が投棄された廃屋の性格」考古学ジャーナル№127　1976年に示されている。

(13)　下村克彦・城近憲一『花積貝塚発掘調査報告書』　埼玉県遺跡調査会報告第15集　1976年

(14)　守　茂和「縄文時代集落址の住居廃絶と遺物廃棄の性格」　考古学研究第27巻第3号　1980年

(15)　谷井　彪・宮崎朝雄「坂東山」　埼玉県遺跡発掘調査報告書第2集　1974年

(16)　深鉢形の占める割合いが多いように思われる。岳ノ上遺跡では浅鉢形が羅っておりこの限りではない。

(17)　(3)に同じ

(18)　鈴木克彦「廃棄論の再構成と課題—亀ケ岡パターンの認識から」　考古学ジャーナル142　1977年

2　土器について

今回の発掘調査は、面積300㎡と狭い範囲であったが土器捨て場と考えられる遺物包含層が検出され、比較的豊富な土器量が出土している。出土土器の大部分は遺物包含層出土である。前期諸磯b式を少量含み、中期勝坂式、阿玉台式、加曽利E Ⅰ式～E Ⅳ式が出土している。所々に大形破片がブロック状に存在するが、層位的な差は無く、混在している。しかし、全体的には加曽利E Ⅰ式後半の土器が主体を為し、実測土器も加曽利E Ⅰ式後半に比定されるキャリパー形土器が多い。ここでは、これらの土器を中心にして加曽利E Ⅰ式～E Ⅱ式前半の土器について検討を行いたい。

加曽利E式土器については、名称に混乱がみられるとはいえ、豊富な住居跡出土土器を基本にして、各地域における段階的な様相が明きらかになってきている[1]。しかし、その型式学的検討については、多量な土器に圧倒され、余り進展していないのが現状であろう。その結果、加曽利E式土器の変遷については、大筋では一致しながらも、個々の土器に対する位置付け、系統性、更には細分という問題については分析が深まっていない。今後、各地域における段階的な様相を整備する一方、地域交流を考えながら型式学的検討を深めていく必要があろう。

(1)　加曽利E Ⅰ式土器の系統

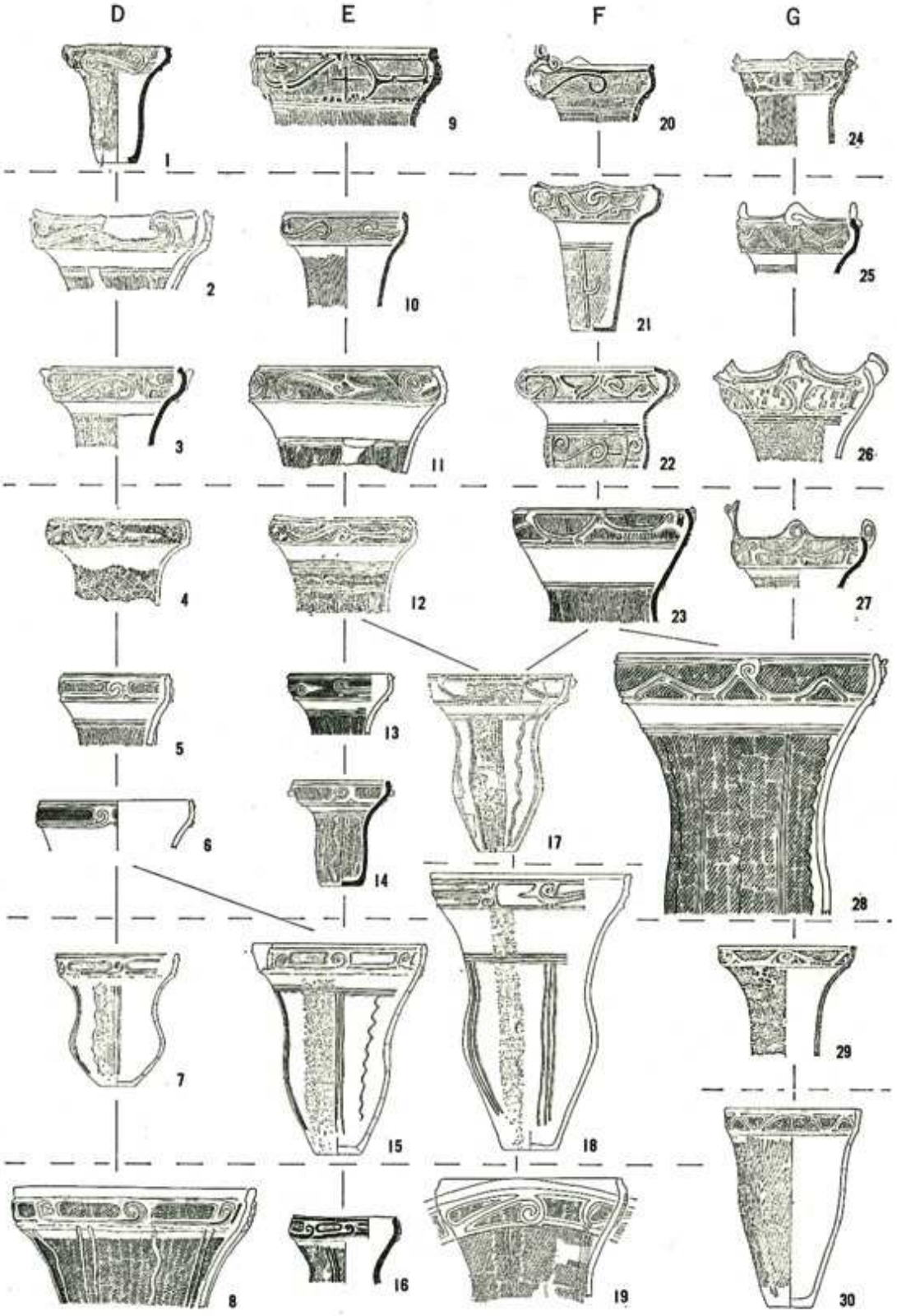
第34～36図は、関東地方における加曽利E Ⅰ～E Ⅱ式前半のキャリパー形土器について、口縁部文様帯の変化を中心に系統的な変遷を示したものである。加曽利E Ⅰ式土器は、地文に撚糸文、縄文を持つ口縁部文様帯が確立し、胴部文様帯が簡素化した土器である。大木8 a式土器を基本としながらも、勝坂式、阿玉台式の文様や文様構成を取り入れ、極めて多様性を持つ土器群として成立している。その結果、各地域の土器には、多種類の系統が存在するが、ここでは、増善寺遺跡の土器を中心に、主な系統についてA～K種として取り上げた。

A種（第34図1～16）

口縁部文様帯がの字文と十字文を出発として、末尾が渦巻く連結文及び連弧文に展開する土器で

A
B
C
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

第34図 土 器 系 統 図 (1)


D
E
F
G
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

第35図 土 器 系 統 図 (2)

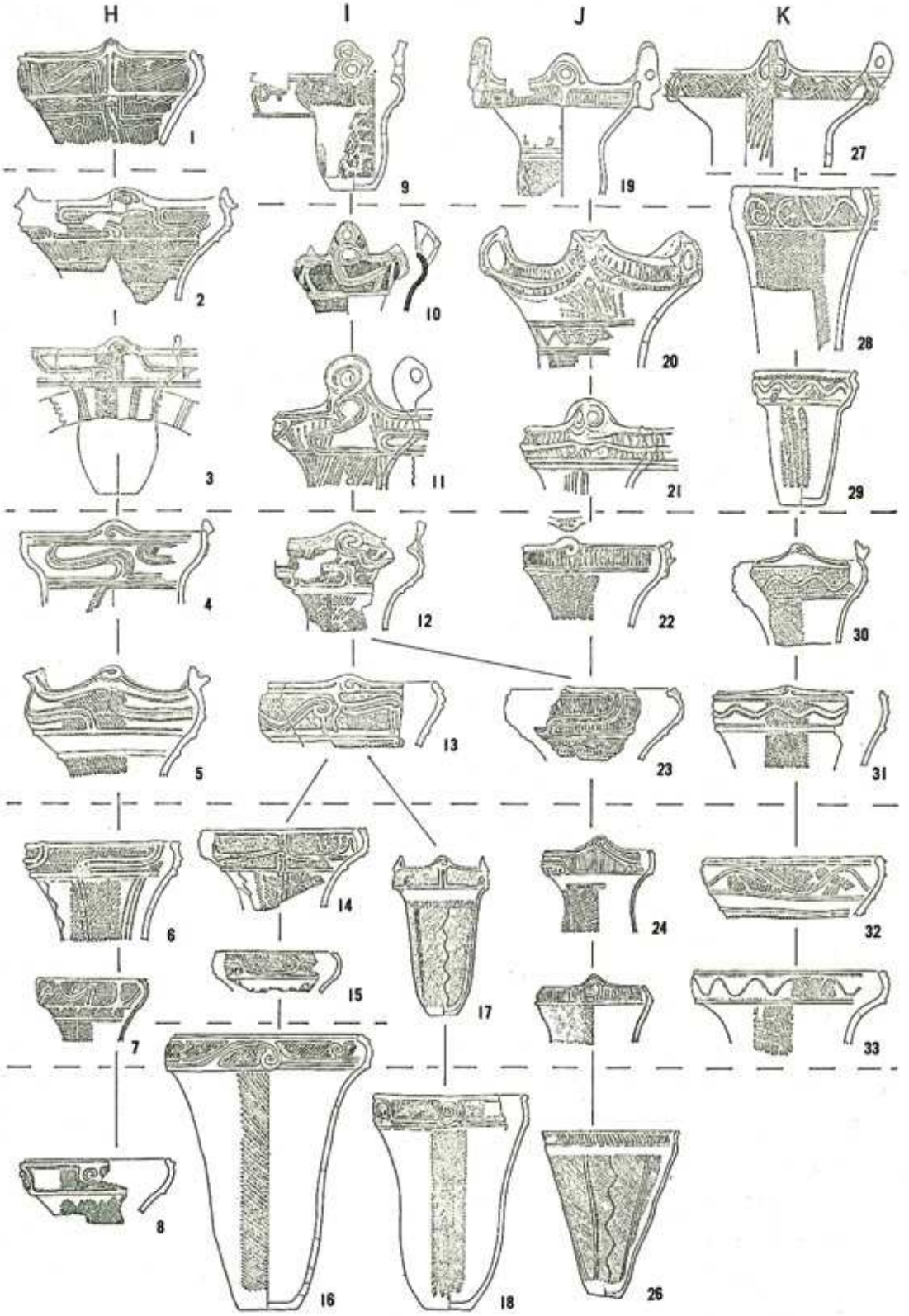
ある。1、2はの字文と十字文を配した土器である。の字文、十字文とも勝坂式土器に求められる。3単位を取る土器が多い。3は、の字文の末尾が渦巻になり、横位に展開して十字文と合体する。4は末尾の渦巻と横位の展開が一層増長され、単位数の多い連結文となる。12は、渦巻を持つ連結文とB種系統の区画文を併せ持ち6単位構成を取っている。4、12は頸部無文帯を持つ。頸部無文帯は、口縁部文様帯と胴部文様帯を明確に分断する効果を持つが、主として口縁部文様帯に付属する要素と考えられる。5、13は、口縁部文様帯と頸部無文帯の区画が消失し、その結果、口縁部文様帯は渦巻を持つ連結文として独立し、頸部無文帯は幅広になる。5は渦巻文下に隆帯を貼付しているが区画の意識が残存したものであろう。6、9、14は、口縁部文様帯の連結文が一層明確になる。幅広の頸部無文帯を持つ。胴部文様帯には、14のように従来の系統である懸垂文を持つ土器と、6、9のように弧線文を取り入れる土器が現われ、変化に富むようになる。7、10、15は胴部文様が頸部無文帯にまで拡大してきた土器である。10、15の胴部文様は、中部地方の土器[3]の胴部文様帯に良くみられるものである。幅広な頸部無文帯をも充塡する胴部文様帯として取り込んだものと考えられる。11、16になると、口縁部文様帯と胴部文様帯が一体化し、口縁部文様帯に重点が置かれたキャリパー形土器としてのスタイルは崩壊し、新たに連弧文土器等が成立する。8は7の隆帯が沈線に変化した土器である。このように、A種の後半では、口縁部文様帯下部の消失→渦巻連結文の確立と幅広頸部無文帯→頸部無文帯を充塡する胴部文様帯の受入→連弧文土器等の成立という変化を辿る事ができる。この変化は、キャリパー形土器が唐草文系及び曽利系土器と接触した中部地方を中心として関東地方西部に及ぶ地域において行なわれ、6～11、14～16の土器が生成された。しかし、関東地方では、11のような連弧文土器のみが主体的に採用され盛行したものと思われる。

B種（第34図17～24）

口縁部文様帯の突起状区画文が、楕円枠の区画文とその間に配される渦巻文へ変化する系統である。17は、突起から下がる区画が未発達であるが、18では区画ができ上がる。19は口縁部全体に、楕円枠の区画文が成立し、区画の上下には末尾が小さく巻く沈線を持つ。この文様は、F種の35図22、23と共通する手法である。口縁部文様帯の確立とともに頸部無文帯が形成され、胴部にも文様化が行なわれる。20は、19と類似する文様構成であるが、末尾の渦が若干良く巻き区画内は柳状沈線文を施文する。柳状沈線文はJ種における特徴的文様である。21は、口縁部下部の区画を充塡する沈線文や胴部の条線文が20と共通するが、12との関係が強い土器である。22は、20から直接的に系統が辿れる。末尾の小さな渦巻が独立した渦巻文となる、区画文間に配される。23は、従来の突起状の区画が無くなり、区画文と渦巻文によって構成される。文様は隆帯により描かれるようになるが、これは、A種14、15やC種30、31の影響に因るものである。24は、口縁部文様帯が退化するとともに頸部無文帯が消滅する。B種では、口縁部文様帯における区画文の成立及び変化を主眼としたが、区画文はD種～G種においても中心的文様となり、相互の関係が窺われる。

C種（第34図25～32）

口縁部文様帯に隆帯による渦巻文が発達する土器である。25はの字文の末尾が巻いて渦巻文になっている。26、27は渦巻文が連続し単位数が多い。の字文が渦を巻き、横位に大きく発達する傾向


H
I
J
K
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
26
27
28
29
30
31
32
33

第36図 土 器 系 統 図 (3)

は、A種2、3、D種2、3、E種11と共通する。胴部には文様帯を持つようになる。28、29は渦巻文の連結が無くなり、上、下の隆帯と接続して独立した渦巻文となる。その間は、区画文状になる。30、31は渦巻文と区画文により構成され、単位数が多い。32は、31と類似する口縁部文様であるが、頸部無文帯を消失する。地文には条線を施文している。C種では、隆帯による独立した渦巻文が残存するが、この傾向はA種14、15、16と同様に中部地方の土器の影響が考えられる。

D種（第35図1～8）

口縁部文様帯のの字文から区画文中心となる系統である。1は隆帯による3単位のの字文を持つ。2、3は、1では独立的であったの字文が連続的に横位に展開し、渦巻が大きく発達する。口縁部文様帯の発達とともに頸部無文帯を持つようになる。4は渦巻文が単位化し、その間が区画状になる。5、6は楕円枠の区画文が確立し、渦巻文は退化して沈線により描かれる。7は、6と同じ口縁部文様であるが、頸部無文帯が無くなる。8は、7と同様の文様であるが、単位数が多くなり、口縁部のキャリパー形が緩く外反するようになる。口縁部文様帯における区画文の成立は、B種と関連し、5以降文様としては余り変化がみられない。

E種（第35図9～16）

の字文の末尾に剣先文を持つ土器の系統である。D種と極めて近い関係にある。9は剣先文を持つの字文と、の字文の空間に十字文を配している。剣先文、十字文は空間を充填する事を目的とし、の字文に付随する文様と考えられる。10もの字文の末尾に剣先文を持つ。11、12はの字文の渦が発達し横位に流れるようになる。頸部無文帯が確立する。11、12のようにの字文の渦が巻き、剣先文が顕著になる口縁部文様帯は、東北地方の大木8b式土器において盛行するものである[10]。13はの字文が退化し、渦巻文は独立的になる。14は、区画文が確立し、その間に独立した渦巻文が配されている。渦巻文の末尾には剣先文が残存している。一方、13の口縁部文様は、18の土器に継続する。15、16になると、剣先文は消滅し、区画文と下の沈線と連続する渦巻文により構成され、単位数が多くなる。15は頸部と胴部を区切る沈線が存在するが、16では胴部文様帯が頸部にまで及んでいる。

F種（第35図20～23、17～19）

口縁部文様帯にの字文と長方形・Y字形区画文の両者を持ち変化する系統である。G種の区画文にの字文を取り込んだものである。20は、1単位のの字文以外は、十字文を充填する長方形区画文により口縁部文様帯が構成される。21は、20では独立的であったの字文と区画文が合体し、区画文は曲線化する。口縁部文様体の合成とともに頸部無文帯を持つようになる。22は、の字文とY字文を交互に配し、文様帯として確立した構成を持つ。23は、の字文が崩れて区画文化し、末尾が小さな渦を巻く。17は、崩れたの字文が横長になり、28は山形区画文として横位に展開するようになる。18は、末尾の小さな渦巻が沈線による渦巻文として顕著になるが、の字文は完全に横位の文様となり、口縁部文様帯を充める要素となる。このような変化とともに、頸部無文帯構成がなくなる。19では、頸部にまで胴部文様帯が拡大する。

G種（第35図24～30）

口縁部文様帯にX字文あるいはY字文を配し、区画構成を中心とする系統である。24は4単位の

区画内にX字文を配した土器である。口唇部に4単位の突起を持ち、二重口唇である。このような口唇部は大木8a、8b式に特徴的なものである。25は、X字文がY字文となり区画文化する。26は、突起と二重口唇部が一体化し、口縁部は楕円形の区画文となる。27は、25のY字文に末尾が渦を巻く沈線が加えられ、文様が横位に連続してくる。末尾が渦を巻く沈線の導入は極めて特徴的であり、B種19、20、F種22、23とも共通する。この文様は、大木8b式において盛行する文様である。大木8b式との関係は、28の胴部文様帯に施文された結節縄文の存在にも窺われる。結節縄文は加曽利EⅠ式の一般的胴部文様である蛇行沈線文と類似効果を持っている。28では、27の区画文が横位に展開する山形文となり、三角区画文を構成する。又、突起や二重口唇は退化する。29は山形区画文として単純な文様になり、区画内には渦巻文を取り入れている。30は、山形区画文のみにより構成され、頸部には胴部文様帯が施文されるようになる。

H種（第36図1～8）

口縁部文様帯にクランク文を持つ系統である。1は、口縁部と頸部に半截竹管によるクランク文を描いている。クランク文初源の土器は、口縁部と頸部の二段構成を取り、半截竹管文を多用する。馬高式と大木8a式が接触する関東地方北部に多くみられる(4)。2、3はクランク文の屈曲が緩く、隆帯により描かれるようになる。頸部にクランク文は持たない。4、5は、クランク文が横位に流れて曲線化し、6では口縁の突起が退化して平縁になる。7は、曲線化したクランク文がなお残るが、区画文が入ってくる。8は区画文が中心であり、クランク文は見られず、15のような渦巻文に変わる。の字文は種々に変化していく文様であるのに対して、クランク文はあまり変化の無い文様といえる。

I種（第36図9～18）

口縁に大形突起を持ち、口縁部のクランク文がの字文的展開を示し渦巻文と区画文に変化する系統である。9は、円形の大形突起を持ち、口縁部には隆帯により渦巻文、十字文、クランク文が描かれる。10は突起の渦巻文とクランク文が連続し、11ではそれが一層進みの字文状になっている。12は、突起が小さくなり横位に連続するクランク文の1単位となる。13は突起が残存でしかなくなり、クランク文には末尾が渦を巻く沈線が取り込まれ、連続する文様になる。これは、F種23やG種27と共通した変化である。14は突起が完全に消滅し平縁になる。口縁部文様帯は末尾が渦を巻く沈線を含む区画文である。15、16は区画文と末尾の渦が大きく巻くようになった渦巻文が主体になる。一方、17には小突起が残存するが区画文と渦巻文が独立した文様となっている。18は、区画文と渦巻文の土器として確立する。

J種（第36図19～26）

独立した文様の変化は持たないが、口縁部文様帯に櫛状沈線を充填する土器の系統を追ってみた。19、20は4単位の大形突起を持ち、口縁部に櫛状沈線を充填している。突起をみると19は大木8a式、20は中峠式に類似し、櫛状沈線は勝坂式に存在するが、この種の土器の祖型は不明である。21は、突起が若干小形化し口縁部に隆帯による文様を持ちキャリパー形を示すようになる。22は突起が一層退化する。23はクランク文を、24はF種17のような末尾が小さく渦を巻くの字文を取り入れた土器である。25は、口縁部文様帯が櫛状沈線だけに簡素化し、26ではキャパー形すらも崩

れてしまっている。

K種（第36図27～33）

口縁部文様帯に1本隆帯による曲線文を巡らす系統である。27は口縁に突起を持ち、口縁部には1本隆帯により渦巻状の曲線文が巡る。1本隆帯の曲線文は中峠式[5]に多用される文様であり、中峠式では地文に縄文を持たず、空間に刻み、刺突文、渦巻文を充填している。28は突起を持たないが、文様は渦巻状である。29は隆帯が蛇行状になる。30、31は蛇行が弱くなり、口縁にはH種4、5のような突起を持つ。32、33は曲線文が一層崩れ、口縁部文様帯が退化している。1本隆帯を巡らす文様手法はG種30へとも続くと考えられる。この種も文様としては余り変化がみられない。

以上、加曽利E Ⅰ式土器の主な系統A～K種について説明した。このうち、A～F種は江戸川以西の関東地方西部に、G～K種は江戸川以東の東部を中心に展開する系統である。ここでは、各種の系統を把握する必要から直線的に配列したが、実態は文様交換等相互関係が多くみられ、多様な様相を持っている。今後、更に検討を加えていく必要がある。

(2) 加曽利E Ⅰ式土器の細分

加曽利E Ⅰ式土器の細分は、現在2細分、3細分等が提示されている[6]。2細分を中心として、細分の基準は頸部無文帯の有無に置かれる事が多い。確かに、頸部無文帯はA～G種の後半の土器において一般的になるが、H～K種では必ずしもメルクマールとはなっていない。頸部無文帯設定の意味について、白石浩之氏は、「口縁部文様帯の発展が胴部文様帯の拡大を阻止する機能を果したもの」と考え「一種の文様効果」をあげていると把えた[7]。しかし、口縁部文様帯の発達はどちらかといえば、前半の土器において著しく、後半では、渦巻文や区画文が横位に展開し横帯としての意識が強く、文様帯幅も狭くなる傾向にある。又、A種の後半では口縁部文様帯下部の消失から、無文帯幅が広がり、胴部文様帯の拡大や他地域の胴部文様帯を導入する結果となっている。頸部無文帯は、口縁部と胴部文様帯の分断効果を持つが、主には口縁部文様帯の確立化を図る為の、口縁部文様帯に附随する要素と考えられる。H～K種においては、その役割を主に口縁の突起が果たしたと思われる。加曽利E Ⅰ式土器の細分は、口縁部を中心とする文様帯の変化から行なう必要があろう。

第34～36図の破線は、おおよその細分を示したものである。最下段は確立した連弧文土器が出現する段階で加曽利E Ⅱ式前半に比定される。加曽利E Ⅰ式は4段階の細分である。加曽利E Ⅰ式は地文に縄文を全面施文し、口縁部文様帯に重点を置く大木8a式のスタイルを基本にして、口縁部文様帯に勝坂式、阿玉台式、馬高式等の文様を取り入れる事によって関東地方において成立した土器と考えられる。第1段階は、口縁部文様帯に勝坂式、阿玉台式、大木8a式等の文様であったの字文、C字文、X字文、十字文、クランク文等が独立的に貼付される。勝坂式終末の土器が残存している。第2段階は、の字文を中心にこれらの文様が連続的になり、横位の文様として発達する。第3段階は、の字文末尾の渦巻が顕著になり、の字文、クランク文が横位に連続し横帯構成が確立する。それに伴ない頸部無文帯の存在が一般的になる。第4段階は、の字文は末尾が渦を巻く隆帯や沈線へと退化し、区画文が主体を占めるようになる。又、口縁部文様帯の下部消失という崩壊が始まり、頸部無文帯は幅広であったり、胴部文様帯を充填したり安定性を失なう。

(3) 増善寺遺跡出土土器の位置付け

加曽利E Ⅰ式土器について、若干の検討を試みたが、ここでは改めて増善寺遺跡の土器について考えてみたい。増善寺遺跡出土土器は、34図5、13、21、29、30、35図6、13、28である。34図30が第4段階に、その他は第3段階に位置付けられ、加曽利E Ⅰ式後半から終末の土器群である。34図5、13、21は口縁部文様帯下部が消失又は崩れ、頸部無文帯が広くなってきた土器である。34図29、35図6、13、28は、口縁部文様帯に渦巻文と区画文が描かれ、頸部無文帯を持ち横帯構成が明確な土器である。加曽利E Ⅰ式土器が持つ文様規制の継続性と、口縁部文様帯の崩壊という新たな変化の方向性を示す土器群といえよう。 （宮崎朝雄）

註

(1) a 神奈川考古同人会他「シンポジウム80、縄文時代中期後半の諸問題、土器資料集成図集」 神奈川考古第10号 1980年
b 日本考古学協会「昭和56年度大会シンポジウムⅠ 北関東を中心とする縄文中期の諸問題」資料 1981年
aにおいて加曽利E Ⅰ式を神奈川県はⅠ、Ⅱ（a、b、c）期に、東京都はⅠ～Ⅲ期に細分している。bでは中期Ⅵ期、Ⅶ期と細分している。
(2) 長崎元広他「中部高地縄文土器集成第1集」1979年。このようなH形懸垂文の胴部文様帯は、中部地方において曽利Ⅱ式頃より顕著になり、曽利Ⅲ式段階に盛行している。
(3) 丹羽 茂「大木式土器」縄文文化の研究4、縄文土器Ⅱ 1981年。剣先文は、加曽利E Ⅰ式ではの字文末尾の処理として従属的であるが、大木8b式では渦巻文とともに文様の中心となり、口縁部及び胴部文様帯に多用されている。
(4) 海老原郁雄他「槻沢遺跡」1980年は特に好資料である。
(5) 岡崎文喜「高根木戸北」船橋市教育委員会」1971年。八幡一郎・岡崎文喜他「海老ケ作貝塚」船橋市教育委員会 1972年。これらの遺跡の中峠式にみられる。
(6) (1)と同じ
(7) 白石浩之「加曽利E式土器の変遷」考古学研究第25巻第1号 1978年

3 石器について

石斧

本遺跡での石斧総量67点（内、磨製石斧9点）は量的にみて、決して多いとは言えず、また、欠損品が大部分であったため、属性分析には不充分な点が多かった。

打製石斧の形態分類に関しては、可能な限り細かく分類してゆく場合と、従来からの3分類法に従がう場合との2者があり、本遺跡での分類は後者に従った。この点に関しては小田静夫氏の指摘がある[1]。石斧の片面、乃至は両面に自然面を残す場合が多く、製作技法を知る上での手掛かりを与えているが、本遺跡では、打製石斧67例中23例に片面に残す事例があったのに対し、両面に残すものは5例と少なく、礫1個1点の製作は少ないものと思われる。また、欠損品が全体の83%を占め、刃部欠損42%、基部欠損14%、刃部、基部欠損17%と、刃部欠損品の多いことが指摘される。側面の刃潰し状敲打痕跡[2]は、完形が少ないこともあって、正確な状態を知ることができなかったが、両側縁に等しく加えられた例は少なく、片縁に集中する場合、両側縁に認められるが、不均等の場合が多い。分銅形は除くとして、短冊、撥形には石斧との着柄方向に変化のあることが推定さ

れる[3]。刃部には明瞭に摩耗痕の観察されたものが11点あり、線状痕を有するものは2点であり、共にホルンフェルス製であった。他の石斧は刃部が鋭利なままか、若干つぶれた程度であり、形態間の差異は認められない。

磨製石斧は未成品と思われるもの1点を除いて全て完成品である。製作工程は母岩選別→整形剥離→敲打→研磨の順に行なわれるが、第31図83の如く、研磨の過程を経ずに使用される場合がある。尾崎遺跡では、製作工程を示す多量の未成品が出土している。第31図81、第32図88は欠損後の再利用が想定されるが、磨製石斧にはしばしば見受けられる。石質と関連するものと考えられる。

上記以外の石器について

第31図80は三角形状を呈し、横刃形石器、或は除草具と考えられているものである[4]。藤の台遺跡に2点の類例がある他[5]、長野県内で多く存在するようである。中央部両側縁に浅い抉入部があり、微細な刃潰しが認められる。藤の台例と比較すると刃潰し部分に若干の相違が認められるが、何れも着柄して使用されたものであろう。資料の増加に期待したい。

第31図77は尖頭器状を呈するもので、先頭器[6]、ポイント様[7]、又は打製石斧として分類されている。自然面の有無が認められ、打製石斧と同一技法による製作が想定されよう。やはり着柄して使用されたものであろう。

本遺跡北側緩斜面部では、石器と伴に、多量の表皮付き剥片、砕片、石核と思われる石材が出土しており、石斧欠損品と伴に、剥片類の接合を進めたが、両者共に、一点も接合することができなかった。種々の要因が考えられようが、石器欠損品に関しては、使用時に欠損したものを着柄したまま持ち返り廃棄したとするのが妥当であろう。

一方、多量の剥片類に関しては、石器製作上の問題から、原石を集落内で石器に加工し、剥片、砕片、石核を廃棄したことが想定されよう。長沢遺跡[8]では、石器製作址が確認されている。何れにしても、原石が安易に入手し得る地理的条件が問題となろうが、同一地域でも全ての遺跡で行なわれたとは言えないようである。

（細田　勝）

註

(1) 小田静夫「縄文中期の打製石斧」　季刊どるめん　第10号　1976年
(2) 永峯光一他「貫井」『小金井市文化財調査報告書5　小金井市教育委員会　1978年　本文中、斉藤基生氏は「つぶれ」「たたき」「すれ」の3種を想定されている。
(3) 註1に同じ
(4) 武藤雄大「曾利一第三、四、五次発掘報告書　富士見町教育委員会　1978年
(5) 山田寛他「藤の台遺跡Ⅲ」　藤の台遺跡調査会　1980年
(6) 安孫子昭二、可児通宏他「多摩ニュータウン調査報告書Ⅶ」　多摩ニュータウン遺跡調査会　1969年
(7) 斉藤基生「平山橋遺跡」　東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会　1974年
(8) 和田　哲「福生市長沢遺跡一第一～四次」　福生市文化財調査報告書　1981年

第34～36図出土遺跡一覧

第34図　1. 岩の上21住　2. 中山谷10住　3. 中山谷6住　4. 新座5住　5. 増善寺　6. 尾崎
7. 尾崎13住　8. 尾崎20住　9. 当麻22住　10. 当麻7住　11. 島之上1住　12. 坂東山16住
13. 増善寺　14. 当麻10住　15. 島之上2住　16. 島之上1住　17. 岩の上21住　18. 中山谷10住
19. 舟山6住　20. 当麻54住　21. 増善寺　22. 岩の上1住　23. 大山A1住　24. 坂東山15住
25. 西原29住　26. 舟山5住　27. 松ノ木5住　28. 坂東山16住　29. 増善寺　30. 増善寺
31. 膳棚35住　32. 尾崎20住

第35図　1. 中山谷10住　2. 松ノ木6住　3. 西原15住　4. 当麻18住　5. 坂東山9住　6. 増善寺
7. 臀田8住　8. 島之上3住　9. 吹上2住　10. 膳棚2住　11. 当麻14住　12. 当麻30住
13. 増善寺　14. 西原14住　15. 臀田8住　16. 狭山1住　17. 二宮3住　18. 臀田8住
19. ハ番4住　20. 吹上3住　21. 三鷹5中1住　22. 三鷹5中1住　23. 舟山6住
24. 西原29住　25. 西原18住　26. 子和清水16住　27. 西原18住　28. 増善寺　29. 西原27住
30. 海老ケ作31小竪穴

第36図　1. 花積18住　2. 勳坂8住　3. 子和清水243住　4. 高根木戸34住　5. 子和清水129住
6. 子和清水123住　7. 向台　8. 子和清水188住　9. 子和清水240住　10. 西原18住
11. 高根木戸43住　12. 子和清水116住　13. 子和清水B4住　14. 子和清水148住
15. 子和清水148住　16. 海老ケ作10小竪穴　17. 今島田㋓土壙　18. 子和清水B3住
19. 子和清水240住　20. 高根木戸43住　21. 高根木戸43住　22. 子和清水16住　23. 子和清水77住
24. 向台　25. 今島田11住　26. 今島田㋔土壙　27. 高根木戸71住　28. 子和清水3住
29. 子和清水156住　30. 子和清水179住　31. 子和清水58住　32. 子和清水148住　33. 子和清水29住